

ISSN 2434-513X

東アジア日本学研究

第 13 号

Japanese Studies in East Asia

No.13

東アジア日本学研究学会

The Society of Japanese Studies in East Asia

2025 年 3 月 20 日発行

巻頭言

東アジア日本学研究学会

会長 李東哲

2年前に、日本のある学会誌に「日本語の書きことばにおける『造語的表現』について」という小論を載せてもらったことがある。それは主に、中国語を母語とする日本研究者によって日本語で書かれた書籍または論文における「造語的表現」について論じた内容で、例えば「言語習得学」、「誤用語」、「誤用者」、「適語」、「教授論」といった類が取り上げられている。これらの「造語的表現」について詳細に見てみると、中国語にも日本語にも見当たらない漢語の「造語」で、語構成論的にとくに問題がないし、字面の漢字の意味を追っていけば意味も充分にわかる。素晴らしいというまではいかないにしても、確かに妙を得たりという漢語の「造語」であると言えなくもない。

そもそも日本語の場合、漢語は和語に比べて造語しやすいと言われ、明治時代の大文豪である森鴎外は三千以上もの新しい漢語を造語したと言われているし、尾崎紅葉も作品の中で漢語の造語をふんだんに使ったという。一方、現代中国語にも現存する漢字と漢字を組み合わせで新しく造られたことばが実に多いし、これからもどんどん新語が造られていくに違いない。したがって、元はと言えば、中国語母語話者によって作られた上掲の日本語の「造語」についてああだこうだと云々することはナンセンスかも知れない。要は、このような「造語的表現」を著者が意識的に新造語として使っていたのか、それとも日本語に現存することばと勘違いして使っていたのかということである。もしも前者であるならば、著者に脱帽せざるを得ないが、出典における他の多くの日本語の誤用から推して、決して意識的に使った「造語」であるとは思えない。だとすれば、結果的にはこのような「造語的表現」は誤用に帰されることになる。

ところで、これまで本学会誌に投稿されてきた投稿者の論文を査読するに際して、たびたび原稿を少し読んだだけで、その内容よりも先にくせのある日本語の表現が気になる場合が多々ある。査読者の立場から見れば、内容がいかによくてもその内容を十分に言い表せる言語的能力がなければ、いい文章として認められないことが多く、当然評価も落ちる。もちろん、論文は文学作品とは異なるため、「雅」の境地までに達する必要がないにしても、論理的な文章は正確で筋の通ったことばで綴られなくてはなるまい。

本学会誌への投稿者の半数以上は日本語非母語話者で、とくに修士や博士課程の院生が多いが、投稿論文の中には前掲の「造語的表現」に似たような怪しい日本語の表現が多く見られる。そこで、編集委員会では日本語非母語話者に日本語ネイティブのチェックを求めている訳であるが、本当の「日本学研究」を目指すならば、投稿の際には是非とも僥倖の心理を切り捨て、真摯に取り組んでほしいものである。

目次

巻頭言	李東哲（東アジア日本学研究学会会長）	1
【論文】		
胡蘇紅	ターンの共同構築から見る「は」と「が」の投射力	3
黄少安	中国人学習者（閩南方言話者）による日本語語頭破裂音の VOT と H1-H2 に関する研究 ―実験音声学的アプローチ―	13
福田翔	中国人日本語学習者の名詞修飾節の習得 ―母語の影響と文法関係の分析―	23
力丸美和	日本語教育における日本語非母語話者教師の割合に影響を与える要因 ―CAGE フレームワークを用いた分析―	33
池孝民	玄相允と『学之光』誌について	43
韓娜	近代日本人の天童寺踏査とその認識について	53
邱月	日本近代文学に描かれた空間（珈琲館）における女性像の表象	63
周堂波・許娜	お茶から近代中日の文化的交流を考察する ―後藤朝太郎と『瓶史』―	73
金斑実	清国・日本・民国・偽満洲国・中国を生きた謝介石について	83
王鶴琴	フフホト日本人居留民の経済活動に関する考察（1937―1945）	93
学会役員		101
学会動向		102
会員消息		103
東アジア日本学研究学会会則		104
『東アジア日本学研究』投稿要領		107
『東アジア日本学研究』執筆要領		110
『東アジア日本学研究』査読要領		111
編集後記		113

ターンの共同構築から見る「は」と「が」の投射力

胡 蘇紅（神戸市外国語大学客員研究員）

要旨

自然会話において、1つのターンが複数の会話参与者によって共同で生成されることは「共同構築」と呼ばれる。日本語では、話題標識の「は」と主語標識の「が」は共同構築の産出過程において重要な投射機能を果たす文法構造上の要素である。本研究では、26時間の日本語自然会話のデータを分析して、相互行為言語学の「投射」の観点から、共同構築における「は」と「が」の相違点を考察した。本研究の結論は以下の3点である。(1) 形式から見ると、「は」と「が」の後ろに産出される共同構築の特徴は同じである。(2) 投射力から見ると、共同構築の産出過程において、「は」の投射力は「が」のより強い。(3) 共同構築の予測の正確率から見ると、「が」のほうが「は」より高い。

キーワード： 「は」、「が」、ターンの共同構築、投射力

はじめに

自然会話において、1つのターン (turn) ¹⁾ が複数の会話参与者によって共同で生成されることはよく見られる。このような現象は「共同構築」 (collaborative construction) ²⁾ と呼ばれ、投射 (projection) は共同構築の基礎である (Hayashi 2004)。投射とはある構造の前半部分が後ろの展開を予測させ、その完了が予測可能になることである (Couper Kuhlen & Selting 2018: 39、筆者訳)。日本語の共同構築は多様な文法構造上の要素の直後に産出される。例えば、例 (1) は話題を標示する「は」の後ろに産出されるものであり、例 (2) は主語を標示する「が」の後ろに産出されるものである。本研究では、例 (1) のようなタイプの共同構築を「典型的共同構築」と呼ぶ。一方、例 (2) では、聞き手は共同構築を行う際に話し手の発話とオーバーラップ (overlap) ³⁾ するため、このような共同構築を「オーバーラップ型共同構築」と呼ぶ。

(1) 01→JF101 : ピッチは…

02→JFB028 : 私、高校。(BTSJ⁴⁾, data 223)

(2) 01 JF109 : (前略) ま::自分をきたえる訓練にはなるかもしれないけど…: そうなら

02→ なかったときのリスクが:: [大きすぎる] 気がして、私はね.

03→JMB013 :

[で か い]. (BTSJ, data 257)

話題を標示する「は」と主語を標示する「が」の相違点に関して、これまで多くの研究者が考察をしている。書き言葉のデータを用いて考察した先行研究は主に文法機能、意味解釈、情報構造の面から「は」と「が」の相違点を考察している。その結果、第一に、文法機能においては、「は」は話題標識であり、「が」は主語標識である。第二に、意味解釈においては、「は」は対比的な話題を標示し、「が」は排他的な主語を標示する。第三に、情報構造においては、「は」は旧い情報を標示し、「が」は新しい情報を標示することが指摘されている。また、近年、Ono et al. (2000)、Nakayama & Horiuchi (2021) などは話し言葉のデータを用いて「は」と「が」の用法を考察している。Nakayama & Horiuchi (2021) は「は」で始まる応答文を考察し、「は」で始まる共同構築との比較を行った⁵⁾。しかし、「は」の直後に産出される共同構築、および「が」の直後に産出される共同構築との比較研究は行われていないため、分析する余地があると考えられる。

そこで、本研究では、『BTSJ による日本語話し言葉コーパス(トランスクリプト・音声)2021 年 3 月版』(以下『BTSJ』)の日本語母語話者を対象とした録音付きのデータ(約 26 時間)を用いて、会話分析(Conversational Analysis)の研究手法を援用し、相互行為言語学(Interactional Linguistics)の「投射」の観点から、ターンの共同構築における「は」と「が」の相違点を明らかにすることを目的にする。

1. 「は」「が」とターンの共同構築

本節では、「は」と「が」の後ろに産出される共同構築の特徴を考察する。

1.1 「は」とターンの共同構築

本研究では、共同構築の用例を 335 例収集し、そのうちの 20 例は、「は」の後ろに共同構築が産出される用例である。この 20 例を分析した結果から、文法機能上の話題を標示する「は」(16 例)、意味構造上の対比的な話題を標示する「は」(3 例)のほかに、定型化された構造「それはもう～」(1 例)においても共同構築が産出されることができると分かった。

以下、上記の 3 種類の共同構築の詳細な例を確認していく。

(i) 文法機能上の話題を標示する「は」

まずは、話題を標示する「は」の後ろに産出される共同構築の例を確認する。例(3)では、JFB027は01行目で「Xちゃんは」と質問し、JM028は02行目で「Xさんは」を産出し、返答しようとしたが、途中で言葉が詰まり、「あの」を使って答えを考えていると示している。JFB027は03行目で短い間を置いた後に答えの「医学部」と言い、「Xさんは医学部」という文

を共同で構築している。02行目の「は」は、01行目で既に提示されている「Xさん」を話題としてマークしており、これは既知の情報である。

- (3) 01 JFB027 : ふーん,で,X ちゃんは?
 02→JM028 : で,X さん**は**,あの::
 03→JFB027 : (.)医学部. (BTSJ, data 220)

(ii) 意味構造上の対比的な話題を標示する「は」

次は、対比的な話題を標示する「は」の後ろに産出される共同構築の例を確認する。例(4)では、この会話の断片の前、JFB025は自分の不手際で後期のゼミの履修登録ができず、救済策もないと話している。JF098は01行目で「ゼミ、じゃ、今は」と言った後に短い間を置き、JFB025は02行目で「一応行ってるよ、もちろん」と共同構築している。01行目の「は」は「今」の後ろに付き、対比的な話題を示している。具体的には、JFB025は後期のゼミの履修登録をしたと思っていたが、実はできなかった。それに対して、JF098はJFB025が今後どうするかという疑問を抱いた。これはJFB025が履修登録をできなかったことを知っている状況と知らない状況との対比になる。

- (4) 01→JF098 : ゼミ,じゃ::今は(.)
 02→JFB025 : 一応行ってるよ,もちろん. (BTSJ, data 210)

(iii) 定型化された構造「それはもう～」

興味深いのは、定型化された構造「それはもう～」の後にも共同構築が産出されることである⁶⁾。「それはもう～」は感嘆詞のように話し手の気持ちなどを強調する役割を持っている。「それはもう～」という構造における「それ」は「そのこと」を指し、前文で既に出てきた、もしくは既知の内容を指している。「は」は話題を示し、「もう」は元々「既に」という意味であるが、「それはもう～」という構造においては実際の意味が極めて希薄化している。本研究が用いたデータには、「それはもう～」という構造における共同構築の例が1件見られた。例(5)では、この会話の断片の前、JM026は11月に少し休んでいたと話している。JM026は02行目で「それはもう」と言った後、短い間を置き、JFB025は03行目で「精神的にも」と共同構築している。さらに、JM026は04行目で「精神的だよ」と言い、JFB025の03行目で産出した発話内容を肯定している。02行目と03行目は「それはもう精神的にも」という文を構成して、JM026が精神的な休養も必要としていることを強調している。

- (5) 01 JFB025 : それは,なん(.)
 02→JM026 : **それはもう**(.)

03→JFB025：精神的に[も.

04 JM026： [精神的だよ. (BTSJ, data 212)

本節では、「は」の後ろに産出される共同構築の例を確認した。次節では、「が」の後ろに産出される共同構築の例を確認する。

1.2 「が」とターンの共同構築

本研究のデータでは、共同構築が「が」の後ろに産出される用例を合計 20 例収集した。この 20 例の「が」は主に文法機能上の主語を標示する「が」（19 例）、意味構造上の排他的な主語を標示する「が」（1 例）という 2 種類に分けられる。

以下、上記の 2 種類の共同構築の詳細な例を確認していく。

（i）文法構造上の主語を標示する「が」

まずは、主語を標示する「が」の後ろに産出される共同構築の例を確認する。例（6）では、JF102は01行目で「なんか人が」と言った後、短い間を置き、JFB029は02行目で「増えてきた」と共同構築している。さらに、JF102は03行目で「増えてきた」と言い、JFB029の02行目で産出した発話内容を肯定している。01行目と02行目の発話内容は「なんか人が増えてきた」という完全な文を構成しており、01行目の「が」は名詞「人」を主語として示す助詞である。

(6) 01→JF102：なんか人がが(.)

02→JFB029：増えてきた.

03 JF102：増えてきた. (BTSJ, data 226)

（ii）意味構造上の排他的な主語を標示する「が」

次は、排他的な主語を標示する「が」の後ろに産出される共同構築の例を確認する。例（7）では、JFB026は01行目で「映像と音声で伝えるほうが」と発言し、その後、JM027とJFB026は同時に「わかりやすい」と評価している。01行目の「(Xより) Yのほうが～」という構造で、「が」は排他的な解釈を示す役割を持ち、「よりわかりやすいのは、映像と音声で伝えるテレビニュースであり、新聞ではない」という意味を表している。

(7) 01→JFB026：@@映像と音声で伝えるほうが[わかりやすい].

02→JM027： [わかりやすい](.)し,見やすい.

(BTSJ, data 217)

本節では、「が」の後ろに産出される共同構築の例を確認した。次節では、「は」と「が」の後ろに産出される共同構築の特徴をまとめる。

1.3 まとめ

「は」と「が」はそれぞれ「話題-説明」「主語-述語」の構造において、重要な役割を果たす要素である。1.1 節と 1.2 節で述べたように、「は」と「が」の後ろに産出される共同構築の用例数は同じである。「は」と「が」の後ろに産出される共同構築のイメージを図 1 にまとめる。図 1 が示すように、「は」と「が」の後ろに産出される共同構築は 4 つの特徴がある。具体的には、1) ターン末に出現している。2) 「NP は／が」の形であり、韻律上独立ではない。3) 形式上不完全である。4) 意味上不完全である。

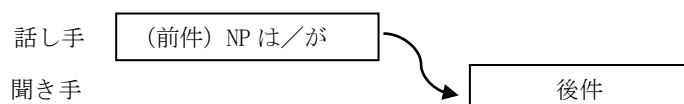


図 1 「は」と「が」の後ろに産出される共同構築のイメージ⁷⁾

2. 「は」と「が」の投射力

本文のはじめに述べたように、投射は共同構築の基礎である (Hayashi 2004)。「は」「が」のような文法構造上の要素は投射の重要な資源である。本文の 1.3 節から、形式の面から見ると、「は」と「が」の後ろに産出される共同構築は同じ特徴を持つことが分かった。本節では、「は」と「が」の投射力にみられる相違点を考察する。

投射力の強さに関して、Auer (2005) は「後件」の唯一性を判断基準として、強い投射力と弱い投射力という 2 種類の投射力に分けている。具体的には、後件の可能性が唯一である場合であれば、前件の要素は強い投射力を持ち、後件の可能性が複数ある場合であれば、前件の要素は弱い投射力を持つことになる。「NP は／が」の後ろの発話内容の可能性は必ず唯一であると言えないため、Auer (2005) の判断基準は本研究に適用できない。そのため、本研究は以下の 2 つの判断基準を提案し、「は」と「が」の投射力を比較する。

1) 共同構築が産出される際に不可欠な文法構造上の要素は強い投射力を持つ。一方、たとえ省略されても共同構築の産出に影響しない文法構造上の要素の投射力は弱い⁸⁾。

2) 聞き手のオーバーラップ型共同構築の産出を助ける文法構造上の要素はより強い投射力を持つ⁹⁾。

まず、判断基準 1) に基づき、「は」と「が」の投射力を比較する。本研究が用いたデータから、「は」がない場合で共同構築が産出される用例は収集できず、「が」がない場合で共同構築が産出される用例は 4 例収集できた。例えば、例 (8) では、この会話の断片の前において、JF098 は自分が就活していること、そして定期的に家に仕事紹介の冊子などが届くことを話している。JFB025 は 03 行目で「でっかい冊子とか」と述べた後、JFB025

と JF098 は同時に述語の「来る」を産出している。03 行目の「とか」の後ろでは主語を標示する「が」が省略されているものの、JF098 は問題なくオーバーラップ型共同構築を産出している。これは、JF098 は JFB025 の後件の発話内容を予測できる 2 つの要素があるからである。1 つ目は聞き手の認識状態 (epistemic status) ¹⁰⁾ と前の文脈で既に述べられた内容である。具体的には、この会話の断片の前、JF098 は冊子が定期的に家に届くことを話したため、「冊子が来る」ことは JF098 にとって既知の情報である。また、01 行目と 02 行目の内容が次の発話内容の参考となり、「家にむっちゃ来る」と「でっかい冊子とか来る」という一貫した内容となっている。2 つ目は、03 行目の「とか」が「が」の代わりに主語を標示する役割を果たすことである。具体的には、「とか」は列挙を表す副助詞であり、前の名詞を後ろの動詞の主体または対象として示すことができる。この 2 つの要素の相互作用により、03 行目には「が」がなくても、JF098 は順調にオーバーラップ型共同構築を産出することができている

(8) 01 JFB025 : なんか,家にむっちゃ(.)

02 JF098 : 来る[よね,

03→JFB025 : [でっかい冊子とか[来るよね,

04→JF098 : [来る:: (BTSJ, data 210)

一方、「が」の有無にかかわらず主語の後ろに共同構築が産出されることに対して、話題の後ろに共同構築が産出される場合は必ず「は」がある。すなわち、共同構築の産出は「は」の強い投射力と密接な関係があると言えるであろう。

次は、判断基準 2) に基づき、「は」と「が」の投射力を比較する。本研究が用いたデータにおける「は」と「が」の後ろに産出される典型的な共同構築とオーバーラップ型共同構築の用例数を計算した。表 1 が示すように、「は」の後ろにおけるオーバーラップ型共同構築の産出率が 50% であり、「が」の 35% より高い。この点から、「が」より、「は」の方は後ろにオーバーラップ型共同構築が産出されやすいと言えるであろう。

表 1 「は」と「が」の後ろに産出される共同構築の種類

	典型的共同構築	オーバーラップ型共同構築	合計
は	10 (50%)	10 (50%)	20 (100%)
が	13 (65%)	7 (35%)	20 (100%)

しかし、投射力の強さはただ共同構築の産出されやすさに関わる。すなわち、投射力が強くても、共同構築の予測の正確率（後続発話の軌道 (trajectory) の予測の正確率）が必ず高いとは言えない。なぜなら、共同構築の予測の正確率は聞き手の認識状態と密接な

関係にあるからである。本研究の話題を標示する「は」の投射力は主語を標示する「が」のより強いが、共同構築の予測の正確率は「が」のほうが高い。特に、オーバーラップ型共同構築において、「が」の後ろに産出される共同構築の予測の正確率は100%であるが、「は」では10%しかない。例えば、例(9)では、JF099は01行目で「だから、「JFB026名」が論文を出さないのは」と述べた後、短い沈黙が起こっている。そして、JF099は02行目でターンを引き続き産出している際に、JFB026は03行目で「うん、致命傷なの」を産出し、共同構築している。しかし、03行目の発話は、02行目のJF099の発話の軌道「先生も当たり前だと思ってるけど」とは、まったく異なる意見になり、予測が失敗している。その理由としては、自然会話においては、主語より、話題の範囲が広く、性質が不確定であるため、話し手の発話の軌道への予測に影響するからだと考えられる。

(9) 01 JF099 : だから、「JFB026 名」が論文を出さないのは(.)

→02 [先生も当たり前だと思ってるけど.]

→03 JFB026 : [@うん, 致命傷なの@ (BTSJ, data 214)]

本節では、実例を用いて、共同構築の産出過程において、「は」の投射力が「が」のより強いことおよび共同構築の予測の正確率は「が」のほうが「は」より高いことを論述した。

おわりに

本研究では、26 時間の日本語自然会話のデータを用いて、話題を標示する「は」と主語を標示する「が」の相違点について、ターンの共同構築という現象の分析を通して、相互行為言語学の「投射」の観点から考察した。その結果、形式においては、「は」と「が」の後ろに産出される共同構築の特徴は同じである。しかし、投射力においては、共同構築の産出過程において、「は」の投射力は「が」のより強い。さらに、共同構築の予測の正確率においては、「が」のほうが「は」より高い。今後、より多くのデータを用いて本研究の結論を検証することが期待される。

注

- 1) Sacks et al. (1974)は「ターン」(turn)を、文・節などの統語上の単位や、韻律上の要素(イントネーション)など、様々な特徴によって構成されている発話順番のことであると述べている。
- 2) 日本語の共同構築に関する研究は Hayashi (2003)、林 (2017) を参照されたい。
- 3) オーバーラップ (overlap) とは、話し手と聞き手が同時に発話する状況を指す。
- 4) BTSJ は『BTSJ 日本語自然会話コーパス (トランスクリプト・音声) 2021 年 3 月版』を指す。詳細は宇佐美まゆみ監修 (2021) を参照されたい。トランスクリプトの調整は筆者による。

る。

- 5) Nakayama & Horiuchi (2021) で言及されている「は」で始まる共同構築の具体例は以下の例 (i) のような用例である。

(i) A: jikan toka sa, rooryoku toka...

B: wa sugoku kakatteru yone. (Nakayama & Horiuchi 2021: 220, グロスを省略した)

- 6) 「それはもう～」の中の「もう」は実際の「既に」の意味が極めて希薄化しているため、この定型化構造で産出する共同構築を「は」の直後で産出する共同構築に分類する。
- 7) 話し手によって既に産出された文の前半部分を「前件」と呼んでおり、聞き手によって共同構築された後半部分は「後件」と呼ばれておる。
- 8) 本研究で収集した 335 例の共同構築の用例の中で、216 例 (64%) は文法構造上の重要な要素である助詞の投射を受けて産出されるものである。そのため、本研究では、文法構造上の要素の有無を投射力の判断基準の一つにする。
- 9) 本研究で収集した 213 例のオーバーラップ型共同構築の用例の中で、162 例 (76%) は文法構造上の重要な要素の投射を受けて産出されるものである。そのため、本研究では、オーバーラップ型共同構築の産出を助けるかどうかを投射力の判断基準の一つにする。
- 10) 認識状態とは、会話参加者がある領域の情報をどれだけ把握しているかを指し、より多くの情報を把握している側は認識状態が K+であり、反対に少ない側は K-である (Heritage 2012)。

参考文献

- 宇佐美まゆみ監修 (2021) 『BTSJ日本語自然会話コーパス (トランスクリプト・音声) 2021年3月版』、国立国語研究所、機関拠点型基幹研究プロジェクト「日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」。
- 林誠 (2017) 「会話におけるターンの共同構築」『日本語学』36(4)、128-139 頁。
- Auer, Peter (2005) "Projection in interaction and projection in grammar," *Text*, 25(1), pp. 7-36.
- Couper-Kuhlen, Elizabeth & Margret Selting (2018) *Interactional Linguistics: Studying Language in Social Interaction*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Hayashi, Makoto (2003) *Joint Utterance Construction in Japanese Conversation*, Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Hayashi, Makoto (2004) "Projection and grammar: Notes on the "action-projecting" use of the distal demonstrative *are* in Japanese," *Journal of Pragmatics*, 36, pp. 1337-1374.
- Heritage, John (2012) "Epistemics in action: Action formation and territories of knowledge," *Research on Language and Social Interaction*, 45(1), pp. 1-29.
- Nakayama, Toshihide & Fumino Horiuchi (2021) "Demystifying the development of a structurally

marginal pattern: A case study of the *wa*-initiated responsive construction in Japanese conversation," *Journal of Pragmatics*, 172: 215-224.

Ono, Tsuyoshi, Thompson, Sandra A. & Suzuki, R. (2000) "The pragmatic nature of the so-called subject marker *ga* in Japanese: Evidence from conversation," *Discourse Studies*, 2(1), pp.55-84.

Sacks, Harvey, Emanuel A. Schegloff & Gail Jefferson (1974) "A simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation," *Language*, 50, pp.696-735.

The Projective Force of "Wa" and "Ga" in Turn Collaborative Construction

HU, Suhong

Abstract

In natural conversation, the phenomenon where a single turn is co-constructed by multiple participants is referred to as "collaborative construction". In Japanese, the topic marker "wa" and the subject marker "ga" are grammatical elements that play an important projective role in the process of collaborative construction. This study analyzes 26 hours of natural Japanese conversational data to investigate the differences between "wa" and "ga" in collaborative construction from the perspective of projection in interactional linguistics. The conclusions of this study are as follows: (1) From a formal perspective, the characteristics of collaborative construction produced after "wa" and "ga" are the same. (2) In terms of projective force, the projective force of "wa" is stronger than that of "ga" during the process of collaborative construction. (3) Regarding the accuracy of predicting collaborative construction, "ga" demonstrates higher accuracy than "wa".

Keywords : "wa", "ga", turn collaborative construction, projective force

中国人学習者（閩南方言話者）による日本語語頭破裂音の VOT と H1-H2 に関する研究

—実験音声学のアプローチ—

黄 少安（国立全北大学大学院生）

要旨

VOT は、有声か無声かを判断する基準としてだけでなく、中国語音声学の分野では破裂音の帯気性（送気持続時間）を判断する基準とも見なされている。また、H1-H2 は、声帯の開閉度や緊張度を反映するパラメータであり、息漏れ声（有気音）と軋み声（緊喉音）を区別するための重要な指標である。この帯気性の観点から見た VOT と H1-H2 が示す破裂音の特徴には一定の関連性が見られるものの、両者は異なる側面から考察されるべきものである。

本研究では、実験音声学的な観点から、閩南語を母語とする 10 名の中国人日本語学習者の破裂音を収集し、VOT および H1-H2 について実験的な分析を行った。その結果、VOT の観点からは、母語である閩南語の影響による日本語有声破裂音の習得に対する正の転移効果は弱いことが示された。一方、H1-H2 の観点からは、閩南語を母語とする日本語学習者の破裂音は、日本のアナウンサーの標準的な日本語発音と比較して、声門の開き具合が大きく、送気性が強いといった特徴が見られた。

キーワード： 中国人学習者、日本語破裂音、実験音声学、VOT、H1-H2

はじめに

VOT¹⁾ は、有声か無声かを判断する基準としてだけでなく、中国語音声学の分野では破裂音の帯気性（送気持続時間）を判断する基準とも見なされている（呉宗濟・林茂璨, 1989; 冉启斌・石鋒, 2008）。また、H1-H2²⁾ は、声帯の開閉度や緊張度を反映するパラメータであり、息漏れ声と軋み声を区別するための重要な指標であると見なされている（e. g., Blankenship, 1997, 2002）。この帯気性の観点から見た VOT と H1-H2 が示す破裂音の特徴には一定の関連性が見られるものの、両者は異なる側面から考察されるべきものである。即ち、VOT は時間的な側面を示し、H1-H2 は高調波の差を表すものであり、実質的には声帯の動きや形状（空間的な側面）を反映して、帯気性に間接的に関わる指標である。

中国人学習者の日本語破裂音の習得に関する研究に関して、閩南語と日本語の両方に有

声破裂音が存在するため、これまで多くの研究が行われてきたが、それらの研究は主に日本語の破裂音の清音³⁾と濁音（すなわち、有声と無声）の区別に焦点を当てており、ほとんどが VOT に注目している。しかし、H1-H2 に関する議論はほとんどない。さらに、閩南方言話者の日本語学習者における日本語破裂音の VOT に関する研究では、母語である閩南語の有声破裂音が日本語の有声破裂音の習得に積極的な影響（正の転移）を与えているかどうかについては意見が分かれている。

本研究では、実験的手法を用いて、閩南語話者の日本語破裂音の VOT および H1-H2 を測定・分析し、閩南語話者による日本語破裂音の VOT と H1-H2 の特徴を明らかにする。先行研究における VOT に関する見解を再確認するとともに、これまで H1-H2 の考察が行われていなかったことに対するギャップを埋めることを目指す。最後に、日本人アナウンサーの発音との比較を通じて、学習者とアナウンサーの標準的な日本語発音の間に存在する差異を明らかにする。

1. 先行研究

王伸子（1999）は、中国北方方言、上海方言、閩南方言話者を対象に、母方言の音声特徴が日本語の有声破裂音の習得に与える影響について考察した。王は、中国語話者の日本語音声習得において、単に母方言の音声的特徴が影響を与えるだけでなく、話者の思考にも関連する音声的特徴が転移に寄与している可能性を指摘した。上海方言話者は日常的に上海方言を多用し、学校教育でも方言が使用されるため、方言音での文章読みや計算にも不自由がない。一方、閩南方言話者は、日常では閩南方言と標準語（北方方言）を使い分け、学校教育は北方方言で行われるため、方言音での文章読みや計算は難しい。その結果、目標言語である日本語の有声破裂音の学習に、上海方言は転移しやすいのに対し、閩南方言は転移しにくいという。陳茜（2008）は、中国の福建方言話者（福建出身の閩南方言話者）を対象に、日本語の有声・無声破裂音の習得において、母方言の音韻体系がどのように影響するかを検証した。特に、VOT に着目し、福建方言話者と北方方言話者を比較分析した結果、福建方言話者は日本語の有声音（濁音）を正しく発音できる一方で、北方方言話者は声帯振動が発生する場合が少ないことが明らかとなった。このため、福建方言の有声音体系が日本語有声音の習得に寄与していると指摘されている。

以上のように、閩南（福建）方言の有声音体系が日本語有声音の習得にどの程度寄与するかについては、異なる見解が存在しているため、近年の閩南方言話者による日本語有声音の再確認が必要と考えられる。また、管見の限りでは、先行研究において中国人学習者による日本語破裂音の H1-H2 に関する研究が見当たらないため、VOT 以外の側面から破裂音の音響的特徴を考察する必要があると考えられる。

2. 研究対象及び研究方法

2.1 被験者

今回の調査に参加した被験者は中国語母語話者（閩南方言）である中国 X 大学日本語学科一年生の男性 5 名・女性 5 名（合計 10 名）である。調査時点までに、破裂音に注目した特別な発音指導と訓練を受けていなかった。

2.2 録音資料

録音資料（調査語彙）は、語頭に「パ／バ」「タ／ダ」「カ／ガ」のいずれかを含む有意味語を使用した（表 1 参照）。なお、本実験では、破裂音の後続母音を[a]に限定した。また、アクセントが破裂音の音響的特徴に影響を及ぼす可能性があるため、日本語のアクセントを考慮した。具体的には、第 1 モーラの直後にアクセント核があるものとなないものの両方を用意した。すなわち、アクセント核が第 1 モーラの直後にある場合は頭高型(㊤)、アクセント核がない場合は非頭高型(㊦)である。詳細は以下の通りである。

表 1：日本語語頭破裂音に関する録音資料

破裂音種類		頭高型㊤		非頭高型㊦	
両唇音	[p]	<u>パ</u> ーティー	<u>パ</u> リ	<u>パ</u> ソコン	<u>パ</u> トロール
	[b]	<u>バ</u> ス	<u>バ</u> ンコク	<u>ば</u> くだん・爆弾	<u>ば</u> めん・場面
歯茎音	[t]	<u>タ</u> イ	<u>タ</u> クシー	<u>た</u> んしゅく・短縮	<u>た</u> いおう・対応
	[d]	<u>だ</u> んし・男子	<u>だ</u> れ・誰	<u>だ</u> いがく・大学	<u>だ</u> んたい・団体
軟口蓋音	[k]	<u>か</u> こ・過去	<u>か</u> んこく・韓国	<u>か</u> そく・加速	<u>か</u> くにん・確認
	[g]	<u>ガ</u> イド	<u>ガ</u> ス	<u>が</u> いしょく・外食	<u>が</u> くせい・学生

本研究では、中国人学習者の発音と日本人アナウンサーの発音を対照する。対照に用いる日本人アナウンサーの音声データは、筆者が 2024 年に発表した論文（黄少安, 2024）から採取したものである。

2.3 実験プロセス及び研究ツール

(1)音声収録

録音は、中国 X 大学日本語学科の資料室において、騒音・雑音・残響のない環境下で行い、RODE NT-USB+ コンデンサーマイクロフォンを使用して iMac Pro に取り込んだ（オーディオ録音ソフトウェアは Adobe Audition 2023 (version 23.3) を使用し、サンプリング周波数は 44,100Hz、量子化ビット数は 32 ビット）。被験者にはあらかじめ録音資料を配布し、資料を確認した後、3 分間の準備時間を与え、日本語の単語をマイクに向かって 1 回ずつ読んでもらった。

(2)音響パラメータの測定

音響パラメータの測定は、音声分析ソフト Praat（version 6.4.23）を用いて、日本語語頭破裂音の VOT および後続母音の H1-H2 を測定し、記録した。

(3)データの整理と分析

データは Excel で整理し、基本的な統計分析を行った後、図表を作成した。分析と考察は、主に平均値と全体分布の 2 つのレベルで行い、平均値については棒グラフで可視化し、全体分布については箱ひげ図を用いて表現した。

3. 実験結果及び考察

3.1 VOT に関する結果及び考察

筆者の先行研究（Huang, 2024）によれば、日本語破裂音の調音方法および調音部位は VOT に影響を与えるが、アクセント型は影響を与えない。したがって、VOT を考察する際には、アクセント型を区別せず、調音方法と調音部位に焦点を当てる。

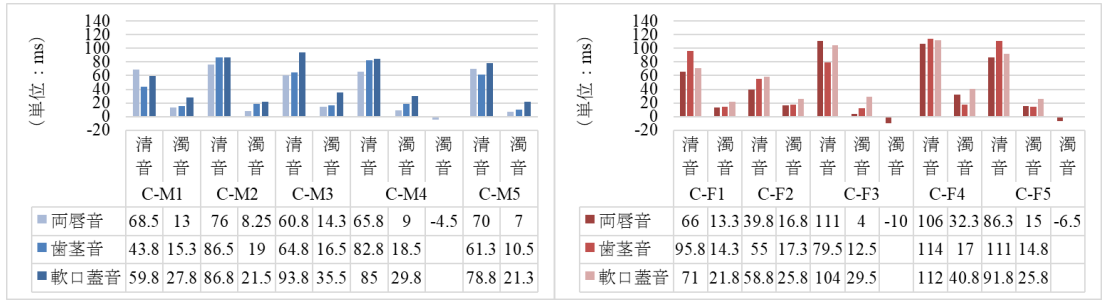


図 1：中国人学習者による日本語破裂音の VOT 平均値（男・女）

図 1 は、中国人学習者（閩南方言話者の大学生）による日本語破裂音の VOT 平均値を示しており、左側は男性、右側は女性のデータを表している。横軸には被験者 10 人（男性は C-M1 から C-M5、女性は C-F1 から C-F5）の結果があり、それぞれ清音と濁音の VOT 平均値が示されている。また、破裂音の種類（両唇音、歯茎音、軟口蓋音）も色の濃淡で区別されている。濁音の VOT には正の値と負の値が含まれる場合、それぞれの値について別々に平均値を計算し、その結果、正の平均値と負の平均値の 2 つが得られる。

このデータから、中国人学習者の日本語破裂音の VOT に関して、次のような特徴が把握できると考えられる。①調音方法による差異は顕著であり、中国人学習者が日本語の破裂音を発音する際、清音の VOT が濁音の VOT よりも一貫して長いことが確認された。濁音の VOT はほとんどが正の値を示していた。②調音部位による差異は顕著ではなく、両唇音・歯茎音・軟口蓋音の間に一貫した相互関係は見られなかった。

男女両方の VOT を確認した結果、日本語の濁音（有声音）の調音方法を正確に習得して

いる学生は非常に少ないことが判明した。すなわち、破裂前に声帯振動を開始するという日本語の有声音の調音方法がまだ身についていないため、VOT がマイナスの値を示すことが少ない。ところで、先行研究によれば、閩南方言には有声音が存在する。それにもかかわらず、日本語の濁音を有声音として発音できない理由については、いくつかの要因が考えられる。例えば、大学の授業では閩南方言ではなく中国語の標準語で学習しているため、日本語の習得過程でも標準語に基づいて認識・思考し、中国語の無気音の調音方法を自然に日本語の濁音に置き換えている可能性が高い。また、学生は閩南方言の話者であっても、日本語の発音指導を担当する教師が閩南方言話者ではなく、有声音を持たない方言の話者である場合、有声・無声の区別や有声音の特徴を学生に十分認識させることができず、有声音の調音方法を効果的に教えられなかった可能性も考えられる。次に、日本人アナウンサーと中国人学習者の日本語破裂音の VOT を比較し、日本人アナウンサーの VOT との違いに着目して、中国人学習者の日本語破裂音の VOT の特徴について考察する。

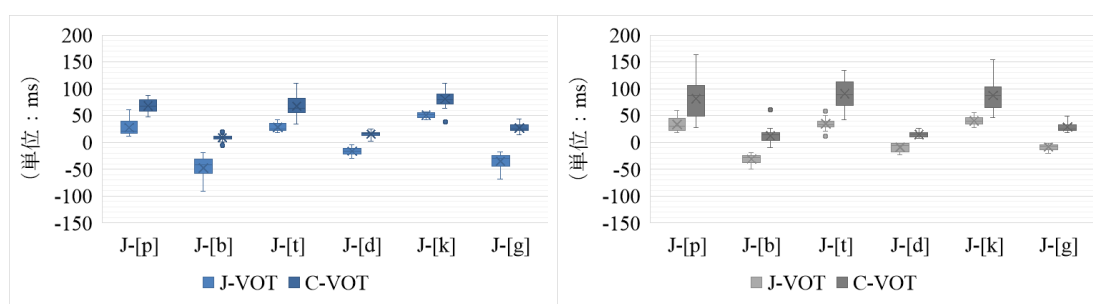


図 2：日本人アナウンサーと中国人学習者による日本語破裂音の VOT の分布（男・女）

図 2 は、日本人アナウンサーと中国人学習者による日本語破裂音の VOT の分布を示しており、左側は男性、右側は女性のデータを表している。図表には、J-VOT（日本人アナウンサーの VOT）と C-VOT（中国人学習者の VOT）がそれぞれ異なる色の濃淡で示されている。

この箱ひげ図から、中国人学習者と日本人アナウンサーとの間における VOT の差異を把握することができると考えられる。①清音に関しては、調音部位にかかわらず、中国人学習者は日本人アナウンサーに比べて VOT が長い傾向が見られる。すなわち、中国人学習者は日本人アナウンサーよりも清音を発音する際の送気持続時間が長いことが判明した。②濁音に関しては、調音部位にかかわらず、日本人アナウンサーの VOT（J-VOT）は負の値を示し、中国人学習者の VOT（C-VOT）は正の値を示している。これは、日本人アナウンサーが完全に有声音で濁音を発音するのに対し、中国人学習者は濁音（有声音）を発音する際に、実際には清音（無声音）を発音していることを示唆している。

筆者の先行研究（Huang, 2024）では、一般の日本語母語話者による語頭破裂音の VOT において、半有声化、すなわち「+VOT」の傾向が確認された。一方で、アナウンサーによる破裂音には「+VOT」が見られず、完全有声音の特徴が保たれているという結論に至った。

したがって、中国人学習者がより標準的な日本語の発音を習得するためには、一般母語話者の発音を基準とするのではなく、アナウンサーのように完全有声音で濁音を発音する調音方法を目指すことが理想的であると考えられる。

3.2 H1-H2 に関する結果及び考察

筆者の先行研究（黄少安, 2024）によれば、日本語破裂音の調音方法およびアクセント型は破裂音の後続母音の H1-H2 に影響を与えるが、調音部位は影響を与えない。従って、H1-H2 を考察する際には、調音部位を区別せず、調音方法とアクセント型に焦点を当てる。

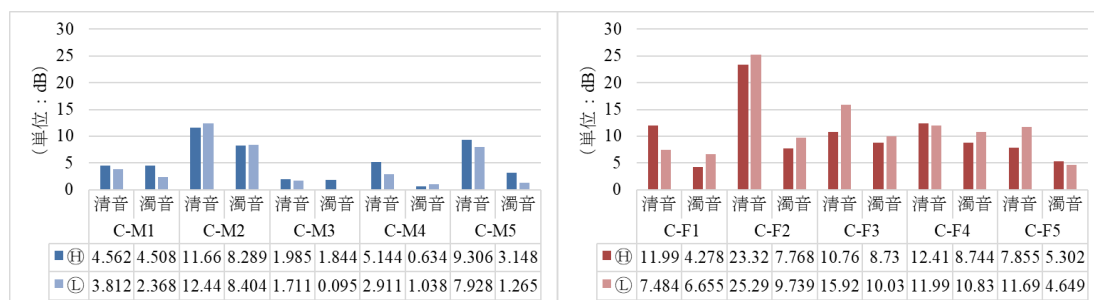


図 3：中国人学習者による日本語破裂音の H1-H2 平均値（男・女）

図 3 は、中国人学習者による日本語破裂音の H1-H2 平均値を示している。左側は男性、右側は女性のデータを表し、清音と濁音に分けて、各話者の H1-H2 値を比較している。また、また、破アクセント型（頭高型Ⓜと非頭高型Ⓛ）も色の濃淡で区別されている。

このデータから、中国人学習者の日本語破裂音の H1-H2 に関して、次のような特徴が把握できると考えられる。①清音と濁音の H1-H2 値には話者ごとに大きなばらつきが見られる。②頭高型Ⓜと非頭高型Ⓛの H1-H2 値の相互関係には明確なパターンが見られない。③同じ話者による同じアクセント型の清音と濁音の H1-H2 の間、濁音より清音の方が大きいという一貫性がある。

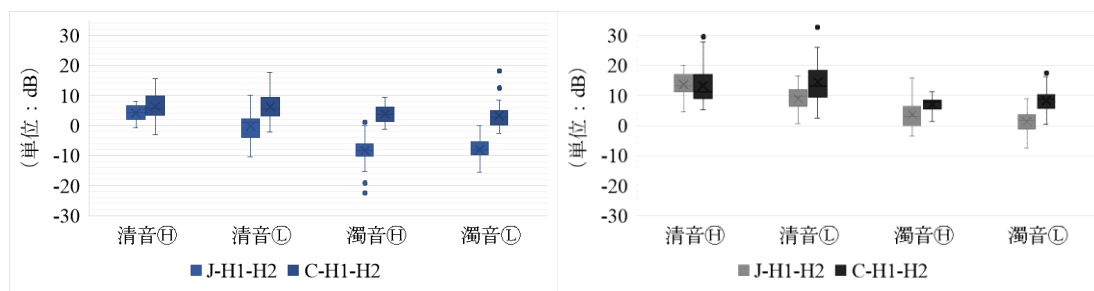


図 4：日本人アナウンサーと中国人学習者による日本語破裂音の H1-H2 の分布（男・女）

図 4 は、日本人アナウンサーと中国人学習者による日本語破裂音の H1-H2 の分布を示し

ており、左側は男性、右側は女性のデータを表している。図表には、J- H1-H2（日本人アナウンサーの H1-H2）と C- H1-H2（中国人学習者の H1-H2）がそれぞれ異なる色の濃淡で示されている。

この箱ひげ図から、中国人学習者と日本人アナウンサーとの間における H1-H2 の差異を把握することができると考えられる。①頭高型㊦の清音以外に、中国人学習者の H1-H2 は平均値も四分位範囲も日本人アナウンサーよりも高い傾向が見られる。つまり、中国人学習者の破裂音の帯気性は日本人アナウンサーよりも強く、声門の開放度が高い傾向があると考えられる。②清音よりも、濁音における中国人学習者と日本人アナウンサーの四分位範囲は大きく異なる。つまり、清音に比べて、中国人学習者の濁音における H1-H2 の値は、日本人アナウンサーとの違いが顕著である。

おわりに

本研究では、実験音声学的な観点から、閩南語を母語とする 10 名の中国人日本語学習者の破裂音を収集し、VOT および H1-H2 について実験的な分析を行った。その結果、VOT の観点からは、母語である閩南語の影響による日本語有声破裂音の習得に対する正の転移効果は弱いことが示された。一方、H1-H2 の観点からは、閩南語を母語とする日本語学習者の破裂音は、日本のアナウンサーの標準的な日本語発音と比較して、声門の開き具合が大きく、送気性が強いといった特徴が見られた。

特定の学習者群において、破裂音の VOT や H1-H2 などの音響的特徴には一定の傾向が見られることが明らかになった。これらの傾向は、その学習者群の発音習得のパターンを把握し、より効果的な教授法を立てる手助けとなる。しかし、これらの傾向には個人差も存在する。そのため、実験音声学の手法を用いて定期的に学習者の発音習得状況を個別に測定し、分析することにより、教師が学習者に対してより精密な発音指導を行うことが可能となるだろう。

次の課題として、後続母音の F0⁴⁾ などを含む日本語破裂音の他の音響的特徴についても考察を進めている。また、韓国人学習者による日本語破裂音の音響的特徴に関する研究も進行中である。今後、中国人学習者と韓国人学習者による日本語破裂音の習得パターンの違いを明らかにし、それぞれの特徴に対応した発音教育方針を策定することを目指している。

注

- 1) VOT (Voice Onset Time) は日本語で「有声開始時間」といい、声道開放から声帯振動が始まるまでの時間を指す。
- 2) H1-H2 は、基本周波数に対応する第 1 高調波 (Harmonic 1) と第 2 高調波 (Harmonic 2) の振幅差を指し、声帯の開き具合や声の性質を分析するために使われ、息漏れ声 (Breathy

Voice) と通常の声 (Modal Voice) と軋み声 (Creaky Voice) といった声質の特徴を区別するためによく用いられる。

- 3) 日本語両唇破裂音 [p] の場合、日本語学では「半濁音」と呼ばれるが、実質的に清音の [t] [k] と同じように無声音なので、本稿では「清音」で統一する。
- 4) F0 (Fundamental Frequency、基本周波数) とは、音声の基本的な周期振動の頻度を指す概念である。具体的には、声帯振動によって生成される音波の 1 秒間あたりの振動回数（ヘルツ単位）を表す値である。F0 は音の高さ（ピッチ）と密接に関連しており、声道の構造や話者の発声方法によって異なる値を示す。この指標は、音声の個人差や発話の感情、イントネーションなどの分析において重要な役割を果たしている。

参考文献

- 陳茜 (2008) 「日本語有声・無声破裂音に関する一考察—福建方言話者を対象に」北京師範大学修士学位論文。
- 黃少安 (2024) 「日本語・中国語・韓国語の音響的特徴「H1-H2」に関する実験音声学的研究—アナウンサーによる語頭破裂音を研究対象として」『漢語与漢語教学研究』15、70-82 頁。
- 冉启斌・石鋒 (2008) 「塞音の声学格局分析」第八届中国語音学學術會議暨慶賀吳宗濟先生百歲華誕語音科学前沿問題國際研討會論文集。
- 王仲子 (1999) 「中国語母語話者の日本語音声習得を助ける中国語方言」『音声研究』3 (3)、36-42 頁。
- 吳宗濟・林茂臻 (1989) 『實驗語音學概要』北京：高等教育出版社。
- Blankenship, B (1997) The time course of breathiness and laryngealization in vowels. [PhD dissertation, UCLA].
- Blankenship, B (2002) “The timing of nonmodal phonation in vowels,” *Journal of Phonetics*, 30 (2), pp. 193-228.
- Huang Shaoan (2024) “A Statistical Analysis of Factors Affecting VOT and F0 in Plosive Sounds across Chinese, Japanese, and Korean,” *International Theory and Practice in Humanities and Social Sciences*, 1 (1) pp. 54-64.

A Study on the VOT and H1-H2 of Japanese Word-Initial Plosives by Chinese Learners (Min Nan Dialect Speakers): An Experimental Phonetics Approach

HUANG, Shaoan

Abstract

VOT is not only used as a criterion for determining whether a sound is voiced or voiceless but is also regarded in the field of Chinese phonetics as a standard for evaluating the aspiration (duration of aspiration) of plosives. Additionally, H1-H2 reflects the degree of vocal fold opening and tension and serves as a crucial parameter for distinguishing between breathy voice (aspirated sounds) and creaky voice (constricted sounds). While the features of plosives indicated by VOT and H1-H2 from the perspective of aspiration show a certain degree of correlation, they should be

examined from distinct perspectives.

In this study, from the perspective of experimental phonetics, the plosives of 10 Chinese learners of Japanese whose native language is Min Nan were collected, and experimental analyses were conducted on VOT and H1-H2. The results revealed that, in terms of VOT, the positive transfer effect of the learners' native Min Nan language on the acquisition of Japanese voiced plosives was weak. On the other hand, in terms of H1-H2, the plosives produced by Min Nan-speaking Japanese learners were characterized by a greater degree of glottal opening and stronger aspiration compared to the standard Japanese pronunciation of professional Japanese announcers.

Keywords : Chinese learners, Japanese plosives, Experimental phonetics, VOT, H1-H2

中国人日本語学習者の名詞修飾節の習得 —母語の影響と文法関係の分析—

福田 翔（富山大学）

要旨

本研究は、中国語を母語とする日本語学習者における名詞修飾節の習得過程を分析し、母語の影響について検証した。独自に収集した日本語作文データをもとに、名詞修飾節の産出傾向を明らかにし、学習者の習得過程を分析した。まず、名詞修飾節の使用において、実質名詞よりも形式名詞が頻繁に用いられ、文法的な誤りは比較的少なかった。形式名詞の使用割合が69%に達しており、特に外の関係を持つ修飾節が多く観察された。これは、複雑な文法関係を必要としないため、学習者がより分かりやすい構造から習得を進める可能性があることを示している。一方、内関係では、主語関係の修飾節が優先され、動詞よりも形容詞を用いた状態描写が多く出現することが確認された。これは、学習者が母語の無標形式である主語関係にある修飾節を好んで使用し、ここには母語の影響が強く反映している可能性があることを示唆している。さらに、日本語教師による文法性判断に基づく修正例は全体の5.7%に留まり、修飾節を含む主節内の修正でも17.7%であった。これらの結果を踏まえ、中国語を母語とする日本語学習者の名詞修飾節の習得は、母語の影響を受けながら、比較的単純な構造から進行することが示された。また、被修飾名詞が形式名詞である割合が高く、学習者が定型文に頼りやすい可能性があることも示唆される。

キーワード： 第二言語習得、名詞修飾節、母語の影響、内・外関係、形式名詞

1. 研究の背景

本研究は、中国語を母語とする日本語学習者の名詞修飾節の習得について、作文データをもとに実証的に検証したものである。名詞修飾節は、「複雑な構造の代表として多くの第二言語習得研究の対象とされてきた」（大関 2020:43）。特に、それをめぐる議論では、「類型論的有標性（typological markedness）が習得の難易度に影響を与える」（Eckman1984等）と考えられてきた。また、その習得難易度については、「名詞句接近可能性の階層」（NPAH）（Keenan & Comrie1997）に従うかどうか検証されてきた。さらに、近年では、大関(2020)等で、母語の影響の観点からの考察もある。そこでは、名詞修飾節の位置とタイプが習得に影響を与えるということが議論されている。

日本語と中国語の名詞修飾節の位置とタイプの対応を挙げると、以下のようになる。

- (1) a. 昨日 食べた ϕ 料理 はおいしかった。
b. 昨天 吃 的 料理 很 好吃。
昨日 食べる -の 料理 とても 美味しい
- (2) a. サンマを焼く ϕ におい がする。
b. 有 烤 秋刀鱼 的 香味。
ある 焼く さんま -の におい

名詞修飾節の位置は、日本語と中国語で共通して主名詞の前に置かれる。さらに、名詞修飾節のタイプについても、日中両言語では(2)のような「外の関係」が成立する。この「外の関係」は、名詞修飾節が主名詞を統語的に支配しない構造であることを意味し、GNMCC (General Noun-Modifying Clause Construction) (Matsumoto, Comrie, and Sells2017) と規定される構造である。つまり、日本語と中国語は、名詞修飾節の位置とタイプにおいて共通していると言える。

本研究の目的は、中国語を母語とする日本語学習者の名詞修飾節の産出について、独自に収集した「中国人日本語学習者作文データ¹⁾」を用いて、次の考察を行うことである。

- (A) 作文データから名詞修飾節の産出の全体像を明らかにする。
(B) 名詞修飾節の位置とタイプの観点から、習得の傾向を明らかにする。

2. 研究方法

本研究では、独自に収集した中国人日本語学習者の作文を分析対象とした。これらの作文は、中国の大学で日本語を専攻している学習者を対象に収集したものである。対象とした学習者は、日本語学習歴が約 12 ヶ月の初級レベルの大学生である。作文の概要を以下に示す。

作文数	40 作文
執筆者数	40 名
作文総字数（日本語作文）	23,180 字
作文総字数（対応する中国語文章）	16,686 字
日本語平均文字数（1 作文あたり）	約 386 字

表 1 作文データの概要

この日本語作文はテーマ作文である。テーマは、日本語学習歴が約 12 ヶ月程度ということも考慮して、できる限り身近で書きやすい話題を選んだ。具体的には、「自己紹介」、「私の一日」、「私の友達」、「将来の夢」、「大学生活」、「旅行」、「日本に対する印象」、「趣味」の 8 つを設定し、学習者がこの中からテーマを選択できるようにした。また、作文データには、学習言語である日本語で書いた作文と、それに対応する内容を母語の中国語で書いた文章の 2 点が含まれる。母語で書く文章では、単なる翻訳ではなく、その内容をできるだけ自然な文章になるよう指示をした。

次に、この作文の中から考察対象である名詞修飾節を取り出す基準を示す。

(3) 「名詞修飾節」として取り出す基準

- a. 動詞が名詞を修飾している構造
- b. 形容詞が名詞を修飾している構造

本研究で対象とするのは、述語（動詞、形容詞）が名詞を修飾する構造である。具体的には、単一の動詞或いは形容詞が名詞を修飾する構造（例：食べるもの、いい人）、補語等の要素を伴う動詞或いは形容詞が名詞を修飾する構造（例：彼が買った本、歌が上手い人）等、すべてケースを考察対象に含める（大関 2020 参照）。一方、被修飾名詞については、実質名詞と形式名詞の両方を対象として収集した。特に形式名詞の基準については寺村 (1991) 等を参考にしている。

3. 結果・考察

本研究で収集、分析したデータから、いくつかの重要な傾向が明らかになった。以下に、主な結果を示すとともに、それに基づく考察を行う。

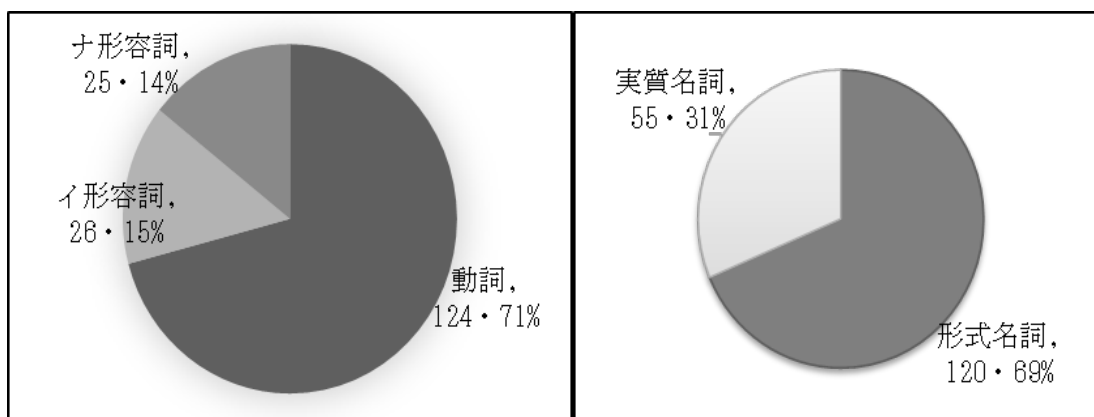
修飾節の総数	175
1 作文あたりの平均使用回数	4.38
最小使用回数	0
最大使用回数	11
使用回数の標準偏差	2.60

表 2 修飾節の出現頻度と一人あたりの使用回数

全作文で使用されている修飾節の使用回数は、175 回であった。1 作文あたりの平均使用回数は 4.38 回であり、最も少ない使用回数は 0 回、最も多い使用回数は 11 回である。修

飾節の使用回数の標準偏差は 2.60 であり、作文ごとの使用回数に一定のばらつきが見られることが分かる。この現象には、学習者の日本語レベルの差が影響している可能性が考えられる。ただし、この点についての詳細な検討は今後の課題とする。

次に、修飾節の品詞及び被修飾名詞の種類の使用割合の観点から観察する。



グラフ1 修飾語の品詞の割合

グラフ2 被修飾名詞の種類と割合

修飾語の品詞の使用割合は、動詞が 71%と多く、形容詞は 29%に留まる。形容詞の中では、イ形容詞が 14%、ナ形容詞が 15%を占めている。また、被修飾名詞の種類については、実質名詞が 31%であるのに対し、形式名詞が 69%と、形式名詞の使用割合が非常に高いことが分かる。この段階の学習者（学習歴約 12 ヶ月）は、特に形式名詞を多用している。この理由として、修飾節と被修飾節の文法関係が比較的単純であるため使いやすい可能性が考えられる。また、「～することです」「～するのが好きです」等の定型文として覚えやすいという点も影響している可能性がある。この点については、今後さらに検討を進める。

次に、修飾節が動詞、イ形容詞、ナ形容詞である実例を順に挙げる。

- (4) 外国語を学ぶ道は容易ではない。
- (5) 海の幸に恵まれていて、海老もカニも美味しいところです。
- (6) 川端康成は私の一番好きな作家です。

被修飾名詞として、「実質名詞」は「ヒマワリ、可能性、シンボル、言葉、勇気、漫画、問題、神社、娯楽」等、「形式名詞」は「こと、の、ほう、ところ」等の例が観察された。

まず、被修飾名詞が実質名詞であるケースについて考察する。ここでは、表形式でデータを整理すると同時に、それぞれの差異が分かるようにグラフも提示する。

外の関係		16
内の関係	主語 (SU)	28
	直接目的語 (DO)	5
	斜格 (OBL)	6
合計		55

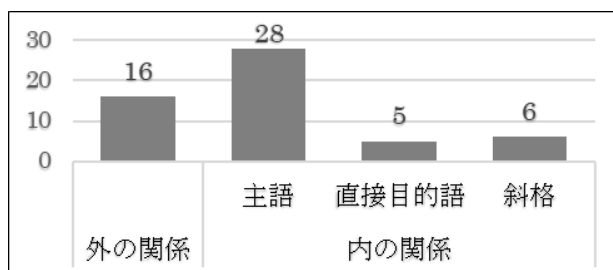


表 3 実質名詞での内・外の関係の用例数

グラフ 3 実質名詞での内・外の関係の割合

実質名詞を被修飾名詞とする場合、外の関係（16 例）よりも内の関係（39 例）での使用頻度が高い。特に、内の関係においては、被修飾名詞との文法関係が主語である用例が最も多い。これは、母語に関係節を持つ学習者が名詞修飾節を使用する際に、母語で無標形式である主語を頻繁に用いる傾向にあることを示唆している。また、これは母語における有標性が第二言語習得において転移する可能性が高いという考えに合致する。この結果は、学習者が母語の影響を受け、無意識に主語の関係節を優先して使用する傾向があることを示しており、文法関係の転移現象として重要な示唆を与えるものである。

次に、名詞修飾節と主名詞の文法関係と述語の品詞に基づいて用例を整理すると、以下のような傾向が見られる。

修飾節の文法関係	品詞	用例数
主語 (SU)	イ形容詞	13
	ナ形容詞	12
	動詞	3
直接目的語 (DO)	(他) 動詞	5
斜格 (OBL)	(自) 動詞	4

表 4 品詞別・修飾節の文法関係

まず、主語では形容詞の使用が多く、特にイ形容詞での使用が 13 例と多く、ナ形容詞が 12 例と続いている。一方、動詞の使用は比較的少なく、主語としては 3 例のみである。直接目的語においては、他動詞が主に使用され、5 例確認された。また、斜格においては自動詞の使用が見られ、4 例となっている。さらに、文法関係が主語における動詞の 3 例は、すべて「属性・状態」の事態を表す例である。次に具体的な例を挙げる。

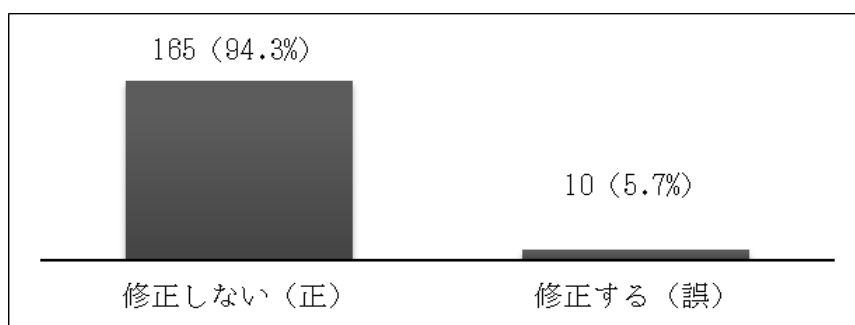
(7) 夏の新疆は、ヒマワリが至るところにあり、野原に生えているヒマワリが一面に咲き乱れ、

(8) 充実した生活は休みよりもっと楽しいです。

(9) 特に彼らのごみの分類と整然としている大通り。

この結果から、修飾節の文法関係と述語の品詞には一定の関連性があり、特に主語の場合には形容詞、或いは動詞であっても状態性を表す事態での使用傾向が高い、つまり学習者にとって、複雑な動作性の描写よりも、単純な状態性の描写が優先して習得される可能性があると言える。

次に、学習者の誤用の観点から分析を行う。ここでは、日本語教師による文法性判断を実施した。まず、修飾節内の修正が必要かどうかについての判断である。



グラフ4 修飾節内の修正の必要性についての判断

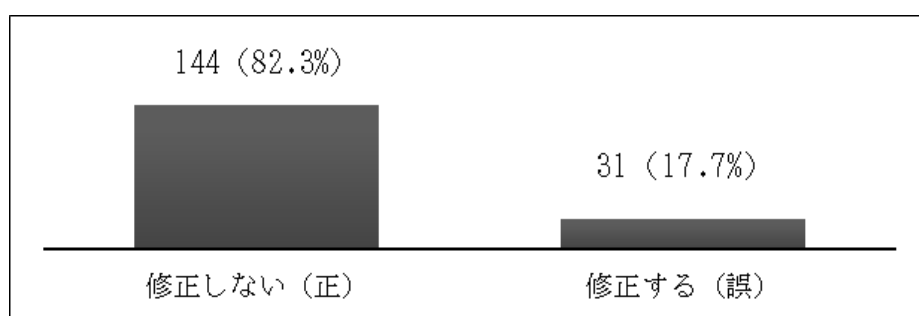
日本語教師による修飾節内の修正の必要性について、修正の必要がないとする例(94.3%)が大半を占めており、修正の必要があると判断したのは、わずか5.7%であった。この修正に対するタイプとしては、「①活用や形式面での修正」、「②文法関係の修正」、「③語句の選択や表現面での修正」の3つがあった。例えば、(10)では「絵を描き」を「絵を描く」に修正がなされている（①活用や形式面での修正）。また、(11)では「家に」を「家で」に修正（②文法関係の修正）、さらに、(12)では「非常に重い授業に直面する必要がある」という表現が「大変な授業に出なければならず」というように修正（③語句の選択や表現面での修正）されている。

(10) 興味について、絵を描き（→絵を描く）ことが大好きです。

(11) 普段は、家に（→家で）一人で映画やドラマを見たり、おやつを食べたりするのは楽しいことの一つです。

(12) 通常、私は月曜日から金曜日まで非常に重い授業に直面する必要があり（→月曜日
から金曜日まで大変な授業に出なければならず）、ストレスの人は息ができません。

次は、修飾節を含む主節内の修正の必要性についてである。



グラフ5 修飾節を含む主節内の修正の必要性についての判断

「①活用や形式面での修正」の例として、(13)「私にたくさんの美しい景色を見ることができて」が「見せてくれて」に修正されたケースがある。この修正により、文の形式が簡潔になり、意味の流れもより自然に改善されている。また、「②文法関係の修正」では、(14)「人を助けることを好きで」が「～が好きで」に修正されている。これにより、主語と動詞の適切な一致が確保された。さらに、「③語句の選択や表現面の修正」として、(15)「私は食べるのに興味を持っています」が「食べることに興味を持っています」に修正されている。この修正により、より自然な日本語表現となっている。

- (13) 様々な場所に行くことは私にたくさんの美しい景色を見ることができて (→見せてくれて)、
- (14) 私も人を助けることを (→が) 好きで、親切に人に接します。
- (15) 私は食べるの (→こと) に興味を持っています。

これらの結果から分かるように、修正が必要な例は少数であり、名詞修飾節において、学習者の習得が進んでいることが窺える。

日本語と中国語は共に、修飾節前置型であり、関係節のタイプは GNMCC (名詞修飾節) であるという特徴を持つ。この点で両言語の名詞修飾節は、類型的に共通であると言える。大関(2020)等では、同様の特徴を持つ韓国語を母語とする学習者の日本語作文の分析がなされており、これらの言語との類似性が確認されている。特に、本研究で明らかになったように、被修飾語として形式名詞が多く用いられ、また外の関係の用例が多く見られることが注目されている。これらの用例では文法的誤りが少ないことから、文法関係が希薄な名詞修飾節 (GNMCC の特徴) を通じて学習が促進される傾向があると考えられる。

4. 結論

本研究では、中国語を母語とする日本語学習者における名詞修飾節の習得過程について作文データを用いて検証し、母語の影響がどのように表れるかについて明らかにした。

作文データから名詞修飾節の産出の全体像として、次のことが分かった。被修飾名詞の種類に関して、実質名詞よりも形式名詞が使用される割合が高く、具体的には実質名詞が31%に対し、形式名詞が69%を占めている。一方、外の関係（16例）よりも内の関係（39例）の方が産出数は多いものの、両者とも一定の産出が見られる。特に、内関係においては、主名詞と修飾節の述語との文法関係として主語が最も多く産出され、その中でも「属性・状態」を表す事態の出現率が高いことが特徴的である。誤用については、修正が必要な箇所は比較的少なく、修飾節内では5.7%、主節内では17.7%に留まっている。このことから、学習者は複雑な文法関係を伴わない構造、特に属性・状態を表す事態や形式名詞を中心に習得を進めている可能性が示唆される。また、中国人日本語学習者にとっては、日本語の名詞修飾節の位置とタイプが母語である中国語と同じであり、それが文法的な誤りの少なさ、形式名詞や外関係の修飾節の産出の多さに影響を与えている可能性がある。

注

- 1) 本研究で用いた作文は、2022年9月から10月にかけて、中国の大学で日本語を学習している中国人学生を対象にオンラインフォームを通じて収集したものである。

参考文献

- 大関浩美 (2020) 「中級日本語学習者の名詞修飾節使用における母語の影響」, (パルデシ・ブラシャント, 堀江薫編. 『日本語と世界の言語の名詞修飾表現』ひつじ書房), 43-54 頁。
- 寺村秀夫 (1991) 『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』くろしお出版。
- Eckman, F. (1984) “Universals, typologies and interlanguage,” *Language universals and second language acquisition*, W. Rutherford (Ed.), Amsterdam: John Benjamins, pp. 79-105.
- Keenan, E. L., & Comrie, B. (1977) “Noun Phrase Accessibility and Universal Grammar,” *Linguistic Inquiry*, 8(1), pp. 63-99.
- Matsumoto Yoshiko, Comrie B, Sells P. (2017). Noun-modifying clause constructions in languages of Eurasia : rethinking theoretical and geographical boundaries, John Benjamins Publishing Company, (Typological studies in language (TSL) ; volume 116).

謝辞

本研究は、JSPS 科研費 21K13069 の助成を受けたものである。本論文を執筆するにあたり、査読の先生方から有益なご指摘をいただいた。ここに記して感謝申し上げる。なお、本研究に残された不備の責任はすべて筆者にある。

Acquisition of Noun-Modifying Clauses by Chinese Learners of Japanese: An Analysis of Native Language Influence and Grammatical Relationships

FUKUDA, Sho

Abstract

This study analyzes the acquisition process of noun-modifying clauses by Chinese native speakers learning Japanese, focusing on the influence of their native language. Using original Japanese composition data, the study identifies trends in the production of noun-modifying clauses and examines the learners' acquisition process. First, it was found that formal nouns were used more frequently than substantive nouns in noun-modifying clauses, with relatively few grammatical errors. The usage rate of formal nouns reached 69%, with a high frequency of clauses with external relationships. This suggests that learners may progress from simpler structures that do not require complex grammatical relationships. On the other hand, for clauses with internal relationships, subject-related modifying clauses were prioritized, and descriptive expressions using adjectives appeared more frequently than verbs. This indicates a strong influence of the learners' native language, as they prefer subject-related modifying clauses, which are an unmarked form in Chinese. Furthermore, grammar correction examples based on evaluations by Japanese teachers accounted for only 5.7% of all cases, and corrections within main clauses containing modifying clauses accounted for 17.7%. Based on these findings, it is shown that the acquisition of noun-modifying clauses by Chinese learners of Japanese proceeds from relatively simple structures while being influenced by their native language. Additionally, the learners' tendency to rely on set phrases is suggested by their frequent use of formal nouns as the modified nouns.

Keywords : Second Language Acquisition, Noun-Modifying Clauses, Native Language Influence, Internal and External Relationships, Formal Nouns

日本語教育における日本語非母語話者教師の割合に影響を与える 要因

—CAGE フレームワークを用いた分析—

力丸 美和（九州大学）

要旨

日本の労働力人口は、2022年の6,902万人から、2040年に6,002万人に減少すると見込まれる（独立行政法人労働政策研究・研修機構、2024）。一方、世界の人口は2023年に80億人に達した。日本における外国人労働者数は2023年10月末時点で約205万人に達し、過去最高を更新した（厚生労働省、2023）。日本の留学生数は、増加の一途をたどり2023年には約28万人にまで増加している（日本学生支援機構、2024）。また、国際交流基金（2023）の「2021年度海外日本語教育機関調査結果」によると、海外における日本語学習者数は約379万人である。留学生および海外の日本語学習者の増加は、労働力人口減少が進む日本において労働者の増加や労働市場の多様化、日本国内および海外における市場拡大に大きく寄与する可能性を秘めている。

本稿では、日本における労働者や日本企業のステークホルダー（利害関係者）となりうる人材である日本語学習者と、その日本語学習者の教育に携わる日本語非母語話者教師の割合に焦点を当て、いかなる要因が日本語学習者数と非母語話者教師の割合に影響を与えるかを明らかにした。Ghemawat (2001) のCAGEフレームワークを用いて分析を行なった結果、「地理的距離」「文化的距離」「政治的距離」「経済的距離」が、JLPT受験者数やNNTの割合に影響を及ぼすことが明らかとなった。

キーワード： 人材開発、外国人人材、日本語教育、非母語話者教師

はじめに

日本の労働力人口（15歳以上人口のうち、就業者と完全失業者を合わせた人口）は、一人当たりゼロ成長に近い経済状況のもと、労働参加が2022年と同水準で推移した場合では、2022年の6,902万人から、2030年に6,556万人、2040年に6,002万人に減少すると見込まれる（独立行政法人労働政策研究・研修機構、2024）。一方、世界の人口は2023年に80億人に達した。日本における外国人労働者数は2023年10月末時点で約205万人に達し、過去最高を更新した（厚生労働省、2023）。日本の留学生数は1980年にはわずか6,572人

であったが、1980 年代半ばの中曽根康弘元総理による「留学生受け入れ 10 万人計画」および 2008 年の福田康夫内閣による「留学生 30 万人計画」によって、増加の一途をたどり 2023 年には約 28 万人にまで増加している（日本学生支援機構、2024）。また、国際交流基金(2023)の「2021 年度海外日本語教育機関調査結果」によると、133 の国・地域で日本語教育が実施されており、海外における日本語学習者数は約 379 万人である。留学生および海外の日本語学習者の増加は、労働力人口減少が進む日本において労働者の増加や労働市場の多様化、日本国内および海外における市場拡大に大きく寄与する可能性を秘めている。

本稿では、日本における労働者や日本企業のステークホルダー（利害関係者）となりうる人材である日本語学習者と、その日本語学習者の教育に携わる日本語非母語話者教師の割合に焦点を当て、いかなる要因が、日本語学習者数と非母語話者教師の割合に影響を与えるかを明らかにすべく、大規模調査のデータをもとに分析を行なった。

1. 先行研究

外国語教育において母語話者教師（Native Teacher：以下 NT）と非母語話者教師（Non Native Teacher：以下 NNT）が存在する。Phillipson(1992)は、第二言語としての学習という過程を乗り越えた経験を有し、担当する学習者の言語的および文化的なニーズを理解している非母語話者のほうが、母語話者より教師としてふさわしいと述べている。

国際交流基金の 2021 年度の日本語教育機関調査によれば、世界の日本語教師の数は 74,592 人で、うち NNT は約 8 割を占めており、海外の日本語教育の現場では NNT は多数派の存在である。カイザー(1995)と加納(2010)は、日本語への客観性や学習者への共感など、日本語非母語話者教師の複数の長所を挙げており、岡本(2010)は、媒介語使用を強みとする中国人日本語教師を対象に考察している。

アメリカの経営学者 Allen(1984)は、組織内のコミュニケーションの緊密さを維持し、組織体と外界とを結びつける役割である「ゲート・キーパー」という概念を提唱した。ゲート・キーパーが外部とインフォーマルに接触することによって、組織内の同僚に最新の技術の進展状況を知らせ（Allen, 1984, 130）、文献情報や個人的接触によって得た情報を、組織メンバーの情報に要領よく関連させ、理解しやすいように変換して伝える（Allen, 1984, 138）。Allen が指摘したのは、組織体と外界の結びつきであるが、日本と外界を結びつけるゲート・キーパーの役割を、日本語学習者と NNT が担っているのではないかと考えられる。また、Hansen et al. (1999)の提唱した知識共有における個人化戦略（Personalization Strategy）においても、日本語学習者と NNT の存在が大きく寄与していると考えたため、いかなる要因が各国の日本語学習者数と NNT の割合に影響を与えるかに着目して、日本語能力試験と海外日本語調査のデータをもとに統計分析を行った。

2. 日本語教育における非母語話者教師に関する調査

2.1 調査の概要

本調査では、日本語能力試験と海外日本語教育機関調査の結果を用いて分析を行なった。日本語能力試験（Japanese-Language Proficiency Test：以下 JLPT）は、日本語を母語としない人の日本語能力を測定し、認定する試験で、2023 年は 92 の国・地域で実施されており、受験者数は 1,265,435 人で、日本語能力を測る試験としては最大規模である。JLPT は国ごとの得点や合格率の公表を行っていないため、本調査では日本における労働者や日本企業のステークホルダーとなりうる人材として、特に高レベルの日本語力を有する JLPT 受験者数のデータを用いて分析を行うこととした。

海外日本語教育機関調査は、世界の日本語教育の現状を正確に把握するために、国際交流基金によって 3 年おきに実施されている調査である。調査対象は、海外で日本語教育を実施している可能性のあるすべての機関である。

JLPT 受験者数や NNT の割合に影響を及ぼす要因を明らかにするために、Ghemawat (2001) の CAGE フレームワーク（表 1）を用いて分析を行なった。CAGE とは、Cultural（文化的）、Administrative（政治的）、Geographical（地理的）、Economic（経済的）の頭文字の略称で、CAGE フレームワークとは、この 4 つの距離から分類することで、地域が有する固有の性質を把握することを目的としたものである。

表 1 CAGE フレームワーク

	文化的距離	政治的距離	地理的距離	経済的距離
距離を生み出す属性	異なる言語	植民地支配の不在	物理的遠隔地	消費者所得の違い
	異なる民族性；民族的・社会的ネットワークの欠如	通貨や政治的な結びつきがない	共通の国境がない	コストや質の違い： ・天然資源 ・金融資源 ・人的資源
	異なる宗教	政治的敵対関係	海や川へのアクセスのなさ	・インフラ ・中間投入物 ・情報・知識
	異なる社会規範	政府の政策 制度的弱点	国の大きさ 交通や通信の便が悪い 気候の違い	

出所：Ghemawat (2001) pp. 5 をもとに筆者作成。

2.2 調査結果

2.2.1 地理的距離

まずは、日本からの「地理的距離」による分析である。日本は、海に囲まれた国土で、どの国とも「共通の国境がない」。また、語学教育においては「国の大きさ」や「交通、通信の便」、「気候」などの因子よりも、人的交流に直接的に関わる「物理的遠隔地」のほうに影響が大きいと考え「物理的遠隔地」の観点から考察することとした。

ニューヨーク大学(NYU)が提供する CAGE Comparator によると、本調査の対象国のうち、

日本から最も近い韓国への距離は 952km、最も遠いウルグアイへの距離は 18,746km で、対象国の平均は 9,199km である。日本からの地理的距離のデータをもとに下記の仮説の検証を試みた。

仮説 1-1. 日本からの地理的距離が近いほど、JLPT 受験者が多い。

仮説 1-2. 日本からの地理的距離が近いほど、NNT の割合が高い。

対象国 81 か国の日本からの地理的距離を独立変数、2019 年、2020 年、2021 年の国民 10 万人あたりの JLPT 受験者数平均値を従属変数として、回帰分析を行なった結果、すべての級において、t 値は負の値を示しており、5%未満水準で有意であった。これは、日本からの地理的距離が近いほど、国民 10 万人あたりの JLPT 受験者数が多いことを意味する。

次に、日本語教育を実施している 81 か国を対象に、日本からの地理的距離を独立変数、2015 年と 2018 年と 2021 年の NNT の割合を従属変数として、回帰分析を行なった。その結果、2021 年は t 値が -2.417 で有意確率が .018、2018 年は t 値が -1.985 で有意確率が .051、2015 年は t 値が -2.021 で有意確立が .047 であり、これは日本からの地理的距離が近いほど NNT の割合が高いことを示す。上記の結果により、地理的距離と JLPT 受験者数および NNT の割合に因果関係があることがわかった。

2.2.2 文化的距離

次に文化的距離と JLPT 受験者数および NNT の割合について調査を行った。CAGE フレームワークによると、文化的距離を生み出す属性は複数存在するが、本調査においては言語教育や外国語学習において最も大きく影響すると考えられる「異なる言語」を採用した。当初は語族や語派などの観点からの分析も検討したが、日本語学習者や NNT にとっては、母語が漢字文化圏に属するか否かが、学習上のアドバンテージや隔たりとなっている現状から、本調査では漢字文化圏か否かで、下記の仮説の検証を行った。

仮説 2-1. 漢字文化圏の国は、JLPT 受験者が多い。

仮説 2-2. 漢字文化圏の国は、NNT の割合が高い。

上記の仮説をもとに、漢字を日常的に使っている中国、シンガポールおよび過去に漢字を使用していた韓国、ベトナムの JLPT 受験者数と NNT の割合について調査を行ったところ、国民 10 万人あたりの N1 受験者数は、81 か国中、韓国が 1 位、中国が 4 位、ベトナムが 5 位、シンガポールが 3 位であった。N2 受験者数は、81 か国中、韓国が 1 位、中国が 5 位、ベトナムが 2 位、シンガポールが 4 位であった。N3 受験者数は、81 か国中、韓国が 1 位、中国が 14 位、ベトナムが 3 位、シンガポールが 5 位であった。これらの結果より漢字文化圏の国は、国民 10 万人あたりの JLPT 受験者数が多いと言える。

また、NNT の割合は、全 81 か国の平均が 82.0%であるが、韓国は 93.7%、中国は 93.3%、ベトナムは 87.1%、シンガポールは 22%であり、シンガポール以外は、平均よりも NNT の割合が高いことが明らかとなった。

2.2.3 政治的距離

Ghemawat (2001)は「政治的距離」のカテゴリーにおいて、5つの属性を提示しているが、日本語教育において、占領下における皇民化教育や同化教育は歴史的に大きな意味合いがある。そのため、本調査では政治的距離を生み出す属性として「植民地支配の不在」を採用した。「植民地支配の在・不在」を明確化するため、松永(2014)の「国家的規模の対外的日本語教育」と外務省の「賠償並びに戦後処理の一環としてなされた経済協力及び支払い等」を参照して、対象国の選定を行なった。

松永(2014)が「国家的規模の対外的日本語教育」で示した中国および「賠償並びに戦後処理の一環としてなされた経済協力及び支払い等」に挙げられたフィリピン、ベトナム、ビルマ（ミャンマー）、インドネシア、ラオス、カンボジア、マレーシア、シンガポール、韓国、ミクロネシア、タイ、フランス、モンゴルのデータをもとに、下記の仮説を検証した。

仮説 3-1. 植民地支配があった国は、JLPT 受験者が多い。

仮説 3-2. 植民地支配があった国は、NNT の割合が高い。

まずは、国民10万人あたりのJLPT受験者について分析する。国民10万人あたりのN1受験者数は、81か国中1位が韓国、2位がモンゴル、3位がシンガポール、4位が中国、5位がベトナムである。N2受験者数は、1位が韓国、2位がベトナム、3位がモンゴル、4位がシンガポール、5位が中国である。N3受験者数は、1位が韓国、2位がモンゴル、3位がベトナム、4位がミャンマー、5位がシンガポールである。N1、N2、N3の受験者数上位5か国全てに植民地支配の歴史がある。

NNTの割合は、全81か国の平均が82.0%であるが、「国家的規模の対外的日本語教育」の対象国である中国は93.3%であり、NNTの割合が高いと言える。それに対して、「賠償並びに戦後処理の一環としてなされた経済協力及び支払い等」に挙げられたフィリピン、ベトナム、ビルマ（ミャンマー）、インドネシア、ラオス、カンボジア、マレーシア、シンガポール、韓国、ミクロネシア、タイ、フランス、モンゴルのうち、81か国の平均の82.0%を上回った国は、ベトナム、ミャンマー、インドネシア、韓国、モンゴルのみであり、その他8か国は平均を下回るため、植民地支配があった国の全てがNNTの割合が高いとは言えない。

2.2.4 経済的距離

Ghemawat (2001)は、「経済的距離」についての2つの属性を挙げているが、日本語学習やJLPT受験、日本語教師へのキャリア選択の動機は、「コストや質の違い」よりも「消費者所得の違い」によるものが大きいと考え、本調査では、GNI(Gross National Income)と国民10万人あたりのJLPT受験者数およびNNTの割合の回帰分析を行った。

仮説 4-1. 経済的距離が遠いほど、JLPT 受験者が多い。

→GNI が日本と負の開きがあると、JLPT 受験者が多い。

仮説 4-2. 経済的距離が遠いほど、NNT の割合が高い。

→GNI が日本と負の開きがあると、NNT の割合が高い。

仮説 4-1 を検証するために、2019 年の各国の GNI から日本の GNI を引いた値を独立変数、国民 10 万人あたりの JLPT 受験者数を従属変数として、回帰分析を行った結果、N1 から N5 まで全てのレベルにおいて、因果関係は認められなかった。

仮説 4-2 を検証するために、2019 年の各国の GNI から日本の GNI を引いた値を独立変数、2021 年の NNT の割合を従属変数として、回帰分析を行った。尚、2019 年の日本の GNI は、USD41,970 である。回帰分析の結果、t 値は-5.987 であり、1%未満水準で有意であった。また、現状をより把握するために、散布図を作成した（図 1）。散布図を見ると、日本よりも GNI が低い国は NNT の割合が高いことがわかる。

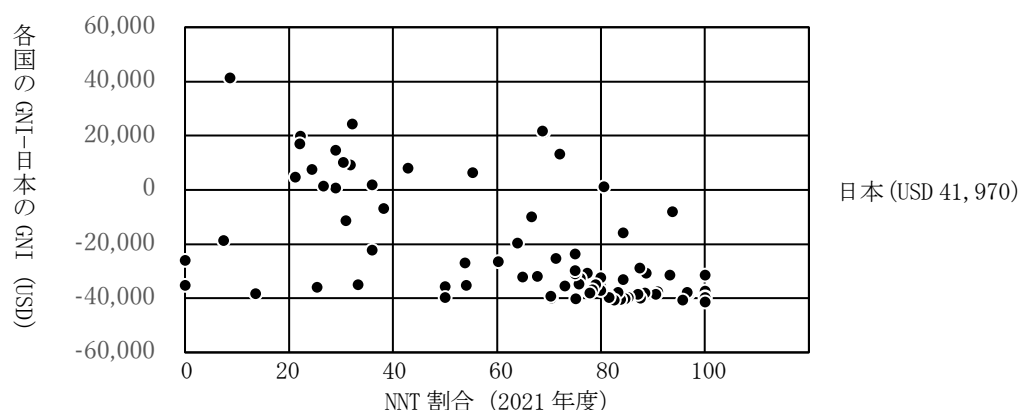


図 1: 日本からの経済的距離と日本語非母語話者教師の割合の散布図

2.3 結果の考察

分析結果から、日本から地理的距離が近い国は、国民 10 万人あたりの JLPT 受験者が多く、NNT の割合も高いことが分かった。文化的距離は、漢字文化圏か否かの観点から分析を行ったが、漢字文化圏の国は、JLPT 受験者が多く、NNT の割合はシンガポール以外は、高い傾向にあることがわかった。

政治的距離については、「植民地支配の在・不在」の観点から、「国家的規模の対外的日本語教育」および「賠償並びに戦後処理の一環としてなされた経済協力及び支払い等」に該当する国を対象に分析を行った。その結果、JLPT 受験者数上位 5 か国は、「国家的規模の対外的日本語教育」および「賠償並びに戦後処理の一環としてなされた経済協力及び支払い等」に該当することがわかった。

「国家的規模の対外的日本語教育」の該当国である中国は NNT の割合が高いことが分かったが、「賠償並びに戦後処理の一環としてなされた経済協力及び支払い等」に挙げられたフィリピン、ベトナム、ビルマ（ミャンマー）、インドネシア、ラオス、カンボジア、マレーシア、シンガポール、韓国、ミクロネシア、タイ、フランス、モンゴルの中で、81 か国の平均の 82.0%を上回った国は、ベトナム、ミャンマー、インドネシア、韓国、モンゴルのみであり、その他 8 か国は平均を下回るため、植民地支配があった国の全てが NNT の割合が高いとは言えないことがわかった。

経済的距離については、GNI (Gross National Income) の数値データをもとに分析を行った結果、経済的距離と JLPT 受験者数に因果関係は認められなかったが、GNI が日本と負の開きがあると、NNT の割合が高いことが明らかとなった。

おわりに

CAGE フレームワークを用いた調査・分析を行なった結果、「地理的距離」「文化的距離」「政治的距離」「経済的距離」が、JLPT 受験者数や NNT の割合に影響を及ぼすことが明らかとなった。日本語学習者は、日本における労働者や日本企業のステークホルダーとなりうる人材であり、そのような人材に知識を移転し教育を行う NNT は、日本社会にとって非常に重要な存在である。昨今、語学教育、とりわけ英語以外の言語が軽視される傾向にあり、語学教師の立場も危ういものとなっているが、日本社会と世界をつなぐ日本語学習者および NNT の存在は今後も非常に重要であるといえる。

国際交流基金（JF）は、各国の日本語学会や研究会、教師会など、355 機関・団体（2024 年 1 月 1 日現在）が所属する「JF にほんごネットワーク」（通称「さくらネットワーク」）の構築を進めている。このネットワーク構築が推進され、NT や NNT が相互に繋がりを持ち、国家を超えた知識移転に寄与することで、日本のステークホルダーとなる外国人人材のさらなる育成が期待される。

参考文献

- Allen, T. J. (1977) Managing the flow of technology: Technology transfer and the dissemination of technological information within the R&D organization, Cambridge: The MIT Press. （中村信夫訳『技術の流れ管理法：研究開発のコミュニケーション』開発社、1984）
- Ghemawat, P. (2001) “Distance Still Matters: The Hard Reality of Global Expansion,” Harvard Business Review, September 2001, pp. 1-12.
- Hansen, M. T., Nohria, N., & Tierney, T. (1999) “What’s your strategy for managing knowledge?,” “Diamond Harvard Business Review, March-April 1999, pp. 1-15.
- NYU “CAGE Comparator” <https://globalization.stern.nyu.edu/cage?country=USA&indicator=mx> (accessed: 2024. 07. 17)

Phillipson, R. (1992) *Linguistic Imperialism*. Oxford: Oxford University Press.

岡本和恵 (2010) 「「ネイティブ」教師・「ノンネイティブ」教師の意識とその実践：ティーム・ティーチングを通して見えてきたもの」『阪大日本語研究』(22)、大阪大学大学院文学研究科日本語学講座、205-235 頁。

カイザー・シュテファン (1995) 「ノンネイティブ日本語教師の役割 異文化間教育現場 としての日本語教室を目指して」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』 10、95-106 頁。

外務省「賠償並びに戦後処理の一環としてなされた経済協力及び支払い等」

<https://www.mofa.go.jp/mofaj/files/000100328.pdf> (閲覧日：2024 年 12 月 7 日)。

加納千恵子 (2010) 「大学院における日本語教師養成の課題：ネイティブ・ノンネイティブによる教師役割観の違い」『国際日本研究』(2)、筑波大学人文社会科学 学研究科国際日本研究専攻、99-116 頁。

厚生労働省(2023)、「外国人雇用状況」の届出状況まとめ」

chrome-extension://efaidnbmninnibpcapjpcglclefindmkaj/https://www.mhlw.go.jp/content/11655000/001195787.pdf (閲覧日：2024 年 6 月 4 日)。

国際交流基金「海外日本語教育機関調査」<https://www.jpff.go.jp/j/project/japanese/survey/result/> (閲覧日：2024 年 6 月 4 日)。

国際交流基金・日本国際教育支援協会「過去の試験のデータ」

<https://www.jlpt.jp/statistics/archive.html> (閲覧日：2024 年 6 月 4 日)。

独立行政法人労働政策研究・研修機構(2024)「2023 年度版 労働力需給の推計 (速報)」

<https://www.jil.go.jp/press/documents/20240311.pdf> (閲覧日：2024 年 6 月 24 日)。

日本学生支援機構(2024)「2023 (令和 5) 年度外国人留学生在籍状況調査結果」

<https://www.studyin-japan.go.jp/ja/statistics/enrollment/data/2405241100.html> (閲覧日：2024 年 6 月 4 日)。

松永典子(2014)「日本占領下の東南アジアにおける日本語教育—マラヤ、北ボルネオを中心に」『日本占領下の南洋』、137-144 頁。

Factors Affecting the Percentage of Non-Native Teachers in Japanese Language Education

: An Analysis Using the CAGE Framework

RIKIMARU, Miwa

Abstract

Japan's labor force is projected to decline from 69.02 million in 2022 to 60.02 million in 2040 (National Institute for Labor Policy and Training, 2024). Meanwhile, the global population reached 8 billion in 2023. The number of foreign workers in Japan reached a record high of approximately

2.05 million by the end of October 2023 (Ministry of Health, Labor and Welfare, 2023). Additionally, the number of foreign students in Japan rose to approximately 280,000 in 2023 (Japan Student Services Organization, 2024). According to the “Results of the 2021 Survey of Overseas Japanese-Language Institutions” by the Japan Foundation (2023), the number of Japanese-language learners abroad is estimated to be around 3.79 million. The increase in the number of foreign students and overseas learners of Japanese has the potential to contribute significantly to the rise in the number of workers, the diversification of the labor market, and the expansion of markets both in Japan and abroad, as Japan's labor force continues to shrink.

This paper focuses on the number of Japanese language learners, who are potential stakeholders in the Japanese workforce and companies, and the percentage of non-native Japanese teachers who are involved in their education. Using Ghemawat's (2001) CAGE framework, the analysis reveals that “Cultural Distance,” “Administrative Distance,” “Geographical Distance,” and “Economic Distance” influence the number of JLPT takers and the percentage of NNTs.

Keywords : Human Resource Development, Foreign Human Resources, Japanese Language Education, Non-Native Speaker Teachers

玄相允と『学之光』誌について

池 孝民（商丘師範学院）

要旨

玄相允（1893－1950）は1919年の3・1独立運動民族代表の一人で、歴史家としても知られ、後に初代高麗大学総長も務めた人物である。玄相允の生涯において日本留学時代は彼の人生に大きな影響を与えていた。彼は日本留学時に在日朝鮮人留学生機関誌『学之光』の編集・発行などに参加しながら積極的な投稿も行っていた。そこで、本稿では彼が『学之光』誌に発表した作品を通じてその動機及び作品の作風を考察してみた。漢学影響が深い家庭で成長した玄相允、そして晩年の「純ハングル使用」極力反対などのことからすれば、日本留学時に『学之光』誌に発表した一部の作品群は確実に異様であった。これには留学当初、崔南善と李光洙が『青春』誌を舞台として行った「ハングル改革運動」と深い関わりがあったこと、また彼の小説と詩はすでに新小説から脱皮して近代小説・詩に近づいたことも本稿を通じて明らかにした。

キーワード：玄相允、学之光、小説、詩、日本留学時代

はじめに

玄相允¹⁾の生涯を通じての文学創作活動は、主に日本留学の時期に『学之光』誌と『青春』誌を舞台として行われた。当時、李光洙や崔斗善らが早稲田大学哲学科に入学、玄相允が社会学及史学科、金與済が英文科に入ったことなどは従来留学生たちの多くが政治科、経済科などに入ったこととは顕著に異なる現象であった。これについて、金允植は「務実力行の生き方が1910年亡国以後韓国知識人の思潮が反映されたものであった」²⁾としている。多くの留学生たちは、実学的な分野に進学しているのに反して、玄相允が早稲田大学文学科及史学科に進学したのは、当時東京留学生界の「小説哲学趣味を求めて文弱に流される弊害が横行する現在の学生の弱点」³⁾という思潮の反動から来るものではなかろうか。そしてこのような「反動」が彼の帰国後、「朝鮮文壇の当事者ではなくあくまで第三者の立場」⁴⁾をとって一切の文筆活動を中止した根本的な原因であると思われる。早稲田に在籍している間、彼は東京で発行されている『学之光』誌の編集に力を注ぎながら、評論と詩、小説など様々なジャンルの作品を発表していた。

本稿では彼の日本留学時期における『学之光』誌との関わりと、実際の文章などを検討

することにより、「文学」というジャンルに懐疑的であった玄相允がなぜ日本留学中には積極的に創作活動を行ったかについて『学之光』誌の一部作品を考察してその糸口を見つけることを目的としたい。

1. 玄相允と『学之光』誌

1910年代の留学生たちは、彼ら自身が先駆者として、亡国の奈落に陥った朝鮮を救済しなければならないという意識を強く持っていた。彼らはよく「青年」と自称しながら、青年こそが先駆者としての役割を果たさなければならないと言っていた⁵⁾。在東京朝鮮人留学生たちは様々な集会を開いて熱弁を振るったり、団結を呼びかけたり学校以外でも旺盛に活動していた。このような集会以外に、留学生たちが頻繁に自分の主張を述べ合うもう一つの場が在東京朝鮮留学生学友会の機関誌『学之光』誌であった。

『学之光』誌は、1914年4月2日に創刊され、1930年4月5日に終刊した在日本朝鮮留学生学友会の機関誌であった。1913年、鉄北親睦会、溟西親睦会、京西倶楽部、三漢倶楽部、洛東同志会、湖西茶話会など七つの団体が合併して、東京とその近郊に在住する留学生たちを構成メンバーとして機関誌を発行し始めた。『学之光』誌の内容は、投稿範囲を「言論、学術、文芸、宗教、伝記及びその他(但し、時事政談は不受)」と規定し、時事問題、政治問題については掲載しない編集方針ではあったが、実際の内容は社会問題や民族運動を間接的に表現したものが多く、「排日思想を宣伝鼓吹」するとの理由で数回に渡って「発売頒布禁止」処分を受けた。当時、在東京留学生たちは亡国のうっ憤からくる反動で活発な活動を行っていた。当時『学之光』誌で活躍した人物たちが朝鮮の近代、さらについ最近に至るまで相当重要な役割を果たしていた。そしてその影響は現在の朝鮮半島の南と北を問わず、経済・政治・学術などの様々な分野まで及んで、特に現代韓国では社会システムの至るところまで当時の影響が響いている。当時、近代朝鮮で留学卒業後帰国してからの主な行き先は官僚と教員であったため、官僚システムは言うまでもなく、教育システムにおいても至極な影響を与えたことは否定できないであろう。

1910年代に留学生として来日した朝鮮青年たちは、朝鮮社会の中でも富裕層及び上流階級の子弟がほとんどであって、彼らは多かれ少なかれ一定のエリート意識を持っていたし、そして朝鮮社会を変えるには自分たちの力が必要であるという意識が強かった。つまり、将来朝鮮社会を担って行くべき自分たちをドイツと日本の指導者層に照らしながら『学之光』誌への盛んな執筆活動をおこなったものと考えられる。

一年に2回あるいは3、4回刊行された『学之光』誌は、李光洙が編集人であった1918年頃、1600部を発刊したことからその規模と400人前後⁶⁾の在東京留学生界の中での人気と影響力がうかがえる。そして、『学之光』誌の編集、発行と投稿などは主に早稲田大学の留学生たちが主体となっていた。『学之光』誌の編集部長及び編集委員は張徳秀、申翼熙、崔斗善、崔承九など当時、留学生界でも名が知られていた人物たちで、玄相允も第5号(1915

年5月)に学友会第四回役員の編集部員⁷⁾になっていた。その上、玄相允はこの『学之光』誌にほとんど毎号に論説、小説、詩あるいは雑文を寄せていた。これについて以下小説、詩の順に具体的に見ていきたい。

2. 小説

玄相允の『学之光』誌での小説は「清流壁」(第10号、1916年9月)一篇しかない。それも一段小さい活字で「小星」という自身の号で発表している。論説以外的小説、詩、雑文を発表する時、彼はほとんど本名「玄相允」ではなく号である「小星」を用いている。まるで、「玄相允」の本業は論説を書くことであって、小説、詩、雑文は「玄相允」の本業ではなく「小星」の本業であるかのようにはっきりと使い分けているのである。プロフィールが載らない当時の雑誌からすれば、ジャンルがはっきり分けられていた「玄相允」と「小星」は確かに別人のような錯覚さえも与えかねない。ちなみに「小星」という号は「詩経」の「小星章」から採ったらしく、儒学の伝統家系の出身らしい命名法であった。

「清流壁」(第10号、1916年9月)は、玉香(売春屋・降仙館に売られる前の本名は金永恩)に一通の手紙が届き、その手紙を読むことから始まる。手紙の中には百円の為替一枚が入っていたが、手紙には「僕の妻よ!」から始まり、玉香に謝罪の意を表していた。

玉香は16歳の時、安岳邑の成道という男に嫁いで行くが、しばらくして義母が亡くなったから夫の成道は墮落し始め、1年後、玉香は夫に捨てられ、止むを得ず実家に戻ったが、19歳の時、載寧郡主事として赴任して来た平壤の人・黄錫甫の妾になる。

玉香が黄錫甫の妾に入る時の心境を玄相允は次のように描いている。

実家にいつまでも面倒を見させることもできないし、また一方、人間の定め(運命)がそこまでひどいものかと思いながら、再び運を世に問う決心で、両親の勧める話を受け入れた結果、19歳の時、その当時載寧郡主事として赴任して来た平壤の人黄錫甫という人の妾になった⁸⁾。

妾に入ることを定め(運命)の試しとして処理することは『青春』誌に発表した「恨の一生」と「薄命」につながるもので、人間の再会と別れを含む多くは運命によるものであるという作者の考え方がこれを支えていたと考えられる。

妾に入った玉香は、1年間は幸せな生活を送っていたが、黄錫甫の転任により、玉香の去就が再び問題になる。「黄主事の家系も所謂両班家系で青年期の畜妾は認められないことだけでなく、その人に本妻の嫉妬⁹⁾」で、仕方なく黄主事は玉香を平壤で有名な娼妓組合・降仙館に5年期間、身代金300円で売ってしまうのである。玉香も、最初は降仙館の娼妓生活を屈辱と思い、自殺まで図るのだが、次第にそこの生活に慣れてしまうことになった。

一方、6年間の墮落生活を送った末、全財産を失ってしまった李成道は良心の呵責で妻・

玉香を捜しに出る。

以来6年間あらゆる悪事をして少なくない財産をすべてなくして、どういう考えがあったか一緒に住んでいた妾を追い出して、以前犯した罪を悔やみ、酒を断じ悪事からも身を引いて完全にいい人になった。しかし、まだ昼夜心からすまなく思い刺激されるのは自分の妻であった金永恩のことであった¹⁰⁾。

このように、李成道はすべての悪事から身を引いて完全に善人になっていたが、本妻の玉香のことで心を痛めていた。これは、当時在東京留学生たちの自由恋愛風潮の中で、自由恋愛自体はよいことであるが、本妻を捨ててまで自由恋愛に走ることには反対であった玄相允のいわゆる「糟糠之妻、不下堂」（苦労を共にした連れ合いを大切にという意）という考えがあったのであろう。そして、このような考えを抱いたのは、彼が来日前にすでに結婚した身であったことも一因であったであろう。李成道は本妻の玉香を探し出し、娼妓組合・降仙館で彼女に会い、そして玉香の許しをえることができた。だが、すべての財産を失った李成道は娼妓組合・降仙館に玉香の身代金300円を払えず、玉香は結局自殺してしまう。

このような展開の中で作者は若干、強引な処理方法を用いている。つまり、李成道が6年間で全財産をなくしたように描いたのは、後半玉香の身代金300円を払えないことを展開するための伏線なのである。「どのような罪を犯しても人間は必ず良心の呵責に沈痛な痛みを避けられないのは、人間の霊的自然性」¹¹⁾で、李成道もこの良心の呵責から突然「善人」に変身するのは、あまりにも不自然な展開である。

白鉄によると、新小説の矛盾点の一つは人為的な結末であるという。新小説の「勸善懲惡の構造的性から出てくる結末がすべてハッピーエンドに終わるのも古代小説の結末と一致する古い要素の一つである」¹²⁾という観点からすれば、玄相允が玉香を悲劇的な自殺の形で結末を処理したことは、確かに少なくとも新小説のハッピーエンド的な矛盾点を克服して、そこからの脱皮を模索したと注目される。

3. 詩・その他

当時、『学之光』誌に寄稿、投稿する時 大きな誤謬がない限り編集者は特別な修正はしなかった。

本誌上の諺文用法は、確実な誤謬がなければ、すべて原稿主の用法をそのまま掲載したもので、多少の差異もあり、あるいは変体の用法で間違っただけのものが度々あるのは遺憾なことであるが、仕方がないことでご諒承願いたい。今後もしできる限りの注意をするつもりである¹³⁾。

当時、無原則な分かち書きと漢字を多用する漢文調文章の文体が主流であった。この時期、玄相允の論説のほとんどの中でも漢文調文章の文体が使用されていた。ところが一方で、詩と小説中では分かち書きを使用しているのである。次にその例を示す。

原文：병어리갓치 어러부튼 겨울밤빛은 꾹엿시도 寂寞이 놀너잇는데,
오직한줄기 沐浴집 선굴통으로 끈침엿시 니러나는 水蒸氣뿔을
아희들아 그까닭 못지말아라.
무럭무럭 끌어오르는 冤의안개로,幸여나 한방울 눈물을지워보라고——¹⁴⁾
訳文：唾のように凍った冬の夜光は果てしなく寂寞が漂っているが、
ただ一筋、銭湯の煙突から絶え間なく立ち昇る水蒸気を
子供たちよ、そのわけを問うな。
もくもくと沸き上がる恨みの霧で若しや一滴の涙を消して見んと——

また、同じページにある雑文「申 朝君を送りて」の中での分かち書きは次のようになっている。

原文：親舊야잘가거라 내病엿시 잇어주마——
가튼맘가튼뜻으로 玄海를 건너왔다가
中途에事情으로 兄몬저돌아가니,
남아잇는 내의마음 엇더타形容할가——¹⁵⁾
訳文：友よ元気で行け 俺も元気でやるから——
同じ心と同じ志で玄海を渡って来たが
途中に事情で君が先に帰郷するので
残る私の心をどう形容しよう——

つまり、分かち書きをしない漢文調の文体は論説、雑文だけであって詩の中ではそうではないのである。『青春』誌に投稿した小説作品の文体も『学之光』の中の「思い出すままに」の中での使用方法¹⁶⁾と近い。つまり、玄相允はこの時期から詩と小説で文体を使い分けていて、詩と小説にはそれなりの文体の意識をもっていたことが分かるのである。

玄相允は『学之光』誌に論説、小説のほかに「寒菊」（第3号、1914年12月）、「思い出すままに」（第4号、1915年2月）、「申 朝君を送りて」（第4号、1915年2月）などの詩と「学友会忘年会スケッチ」（第4号、1915年2月）、「雨降る夜」（第5号、1915年5月）等の雑文も発表している。この時期、『学之光』誌と『青春』誌に発表されていなかった「小星の漫筆」に収録された「失樂園」、「これ、なんだ」、「後姿が寂寞」などの詩もあるが、ここでは主に『学之光』誌に発表された作品だけを対象とする。

「小星の漫筆(5)」に収録された詩と『学之光』誌の詩はほぼ同時期である 1913 年と 14 年に集中している。そして彼のこの時期の詩は最近の研究においては、金與済・崔承九らの詩とともに近代詩史において高い評価を受けているのである¹⁷⁾。「小星の漫筆(5)」には 11 篇の詩が載っているが、この中には、『学之光』誌上に発表されなかった詩も含まれていることから、玄相允自身が『学之光』誌上に発表したのは、当時の自作の中では自信作だったのであろう。『学之光』誌第 3 号に発表された「寒菊」もこの中の一つである。

寒 菊

風に霜に苦しみながら	原文:바람에 서리에 시달니면서
辛しも打ち過ぎる一輪の菊	苦롭게 지나는 한떨기菊花
最後まで節義は保つと	끝까지 節義는 保全한다고
半ばは枯れた花房を	半남아 말나진 꽃송아리를
真すぐ、辛うじて保って立つさま	꽃々이 干辛하게 이고서는
厳しいこの世の冷たさを彷彿とさせるのだね	거친世上 찬맛이 彷彿도 하고나 ¹⁸⁾

「寒菊」は、このように形式的には、3・3・5 調の唱歌に似た定型性をもつ詩である。内容的には、留学間もない時期に自分に「風にも霜にも、菊のように屈せず、冷たい荒い世の中」でも頑張らなければならないと、言い聞かせている主観的な心情の表出のようにも読み取れる。この時期、『学之光』誌と『青春』誌に発表されていなかった「小星の漫筆」に収録された「失樂園」、「これ、なんだ」、「後姿が寂寞」などの詩もあるが、ここでは主に『学之光』誌に発表された作品だけを対象とする。一方、第 4 号には 3・3・5 調の「寒菊」とは違った自由詩形式の「思い出すままに」を発表している。

空中を駆ける雲たちよ、重くない我が身なので、そなたの腰をちょっと貸してくれないか？

天の川の向こう遠い遠い理想郷に、笑いを求め歌を求めて遊びに行きたいね。

人様より花が綺麗で実が美味しいと杏の木よ自慢するな。

人様より背が高く材木がよいと楠よ自慢するな。

木の中の王になり木の一番になるには——花よりも実よりも

背よりも材木よりも、ただ一つ、人も羨む松柏の節義にあることをまだ知らないか？

原文：

하늘中天 달녀가는 떼구름아,얼마무겹지안은 내몸이니,네허리 暫間 빌나라는가?

銀河水저쪽 멀니멀니 理想郷에,우숨차자 노래차자 놀녀가기 願하노라.

남보다 꽃치곱고 열매가 맛잇노라 桃李야 자랑말아라.

남보다 키가높고 材木이 죠흐로라 樟楠아 자랑말아라.
 나무의왕이 되고 나무의 웃듬이 됴에는——꽃보다도 열매보다도
 키보다도 材木보다도 오직한아 사람흐리는 松栢의節잇음을 아직껏 물으드냐? ¹⁹⁾

この詩は表題の通り、思うままに書かれたもので、各連が内容的につながったものではなく独立的な内容である。ここでも、「寒菊」の中で表れていた「節義」というものが強調されていることに注目したい。そして、「人様より花が綺麗で実が美味しいと杏の木よ自慢するな。人様より背が高くくて材木がよいと楠木よ自慢するな。」は、「日本よ、朝鮮より強くなったことで自慢するな」、本当の強者には節義というものが大切で、我々朝鮮人には「節義」というものがあるぞ、というようなニュアンスさえも感じさせるのである。また、さらにこのようなニュアンスを感じさせる文章としては、『青春』誌第7号に発表された寓話「向上」がある。

玄相允のこの時期の詩についての評価は、同時期『学之光』誌を中心に活動していた崔承九、金與濟らの詩に劣らないものであったと諸先行研究の中でも意見が一致している。その玄相允の詩の評価についての代表的なものを挙げると次のようである。

玄相允の詩は主に理想と現実の乖離によって苦痛に強いられる植民地知識人の苦悩と喪失感を表現することに焦点があてられていた。特に、彼の詩は荒廃化された現実に対する認識とそのような現実の中でどうでもいいように捨てられている自我に対する認識が主調を成している。このような認識は時々荒廃化された世界を変化させるための主体の努力と忍耐そして闘争を強調するものに繋がったりもするが、大体は抽象的な当為論の水準に止まっていた。このような様相はこの現実認識が多分に観念的なものであったことを示唆している ²⁰⁾。

最後に詩以外の文章に触れておきたい。『学之光』で玄相允は「学友会忘年会スケッチ」(第4号、1915年2月)、「雨降る夜」(第5号、1915年5月)等の雑文も発表している。また、当時の編集委員であったため「編集所にて」という『学之光』編集者の後書きの中には、玄相允の文章であると思われるものもあるが、後書きにはっきりした編集者の名前が書かれていないため、ここではその言及については避けたい。「学友会忘年会スケッチ」(第4号、1915年2月)は、1914年、当時朝鮮留学生たちの忘年会の様子を生々しく描いたもので、当時の朝鮮留学生たちの留学生活ぶりを知るよい材料とも言えよう。

また、「雨降る夜」(第5号、1915年5月)は、雨が降っている夜中、自分が今、何を思っているかを悩みながら、最近の自分が考えて行った行為を深く反省しながら、そしてそれを否定・批判している。彼は、自分が今まで知り、そして考えたことが正しいと思っていたが、それはすべて殻に過ぎないことであったと反省しながら、知識のある人になる前

に、先ずよい人格を持つ人間にならなければならないとして、そしてそれに努めなければならないと自分を励ました内容で、当時在東京留学生界の「人格」や「自我」に対する活発な論調の中で、留学生の一員であった玄相允の心境の一面を読むことができる一文である。

おわりに

本稿は、1910年代崔南善と李光洙とともに「文壇の革命児」とも絶賛されながらも彼らのかげに隠されて朝鮮近代文学史上であまり照明を受けなかった玄相允の日本留学時に学業に励みながら在日朝鮮人留学生機関誌『学之光』誌に積極的に投稿を行って動機について彼の投稿作品を通じて考察してみた。

玄相允が『学之光』誌に投稿した作品作風から、漢字廃止での純ハングル文章に極力反対した晩年と異なって日本留学当初は李光洙・崔南善のハングル改革運動に賛同しながら、またそれに歩調を合わせて積極的に投稿を行ったことが分かる。また、彼の小説・詩作品も新小説・詩の範疇から脱皮して近代小説・詩の構成に近づいたことが分かる。

注

- 1) 玄相允（1893－1950）は1919年の3・1独立運動民族代表の一人で、歴史家として知られ後に初代高麗大学総長も務めた人物である。
- 2) 金允植、『李光洙と彼の時代1』、ソル出版社、1999、p. 519
- 3) 「日本留学生史」、『学之光』第6号、1915年7月、p. 16
- 4) 玄相允；「文壇に対する要求」、東亞日報、1922年1月1日、第一面
- 5) 朴賛勝；「1910年代における渡日留学生の思想と動向」、『近代交流史と相互認識Ⅱ』、慶応義塾大学出版会、2005年、p. 149
- 6) 「寄書」の中で「わが在東京留学生は僅か500人足らず」（『学之光』第17号、1918年8月、p. 79）という記事からも朝鮮からの留学生の人数が推測できる。
- 7) 「わが消息」、『学之光』第5号、1915年5月、p. 63
- 8)~11) 小星；「清流壁」、『学之光』第10号、1916年9月、p. 54
- 12) 白鉄・李秉岐；『国文学全史』、新丘文化社、1993年（初版1952年）、p. 256
- 13) 「編輯所にて」、『学之光』第4号、1915年2月、p. 55
- 14)~15) 小星；「思い出すままに」、『学之光』第4号、1915年2月、p. 49
- 16) 前掲 小星；「思い出すままに」の原文を参照すれば分かるように、ここで玄相允は彼の論説の中で常用している漢文調の文体を意識的におさえて、ハングル調を主体的に使い、そして分ち書きもきちんと使われていた。
- 17) 金成允の崔承九、金與濟、玄相允の詩の近代性についての評価は、『韓国近代自由詩形成期研究』博士論文を参照されたい。

- 18) 小星生 ; 「寒菊」、『学之光』第 3 号、1914 年 12 月、p. 48
 19) 前掲 ; 小星「思い出すままに」の一部
 20) 金在湧他、前掲『ハングル文学芸術叢書 11 韓国近代民族文学史』、p. 246

参考文献

- 『学之光』第 3 号～第 17 号 (1978)、太学社【影印本】。
 『青春』第 1 号～第 11 号 (1980)、太学社【影印本】。
 김윤식 (1999)、『이광수와 그의 시대 1、2』、솔出版社。
 白鉄・李秉岐 (1993)、『国文学全史』、新丘文化社。
 大村益夫他 (1998)、『近代朝鮮文学における日本との関連様相』、緑蔭書房。
 正宗白鳥 (2013)、『文壇五十年』 中公文庫。
 和田博文外 (2017)、『「異郷」としての日本 東アジアの留学生在がみた近代』、勉誠出版。

About Hyeon Sang Yun and the Journal of “Hakjikwang”

CHI, Xiaomin

Abstract

Hyeon Sang Yun (1893-1950) was one of the national representatives of the March 1st Independence Movement in 1919, and was also a well-known historian and later the first president of Korea University. In Hyeon Sang Yun's life, his period of study in Japan had a great influence on his life. While studying in Japan, he participated in editing and publishing the journal for Korean students in Japan, “Hakjikwang,” and actively contributed to the journal. This paper examines his motives and style of writing through the works he published in Hakjikwang. Considering that Hyeon Sang Yun grew up in a family deeply influenced by Chinese studies and was opposed to the use of “pure Hangul” in his later years, some of the works he published in “Hakjikwang” during his study in Japan were certainly bizarre. This is because he was deeply involved in the “Hangul Reform Movement” that Choi Nam-seon and Lee Gwang-soo conducted in “Youth” magazine when they first came to Japan to study, and also because his novels and poems had already moved away from new novels and approached modern novels and poems.

Keywords : Hyeon Sang Yun, Hakjikwang, novels, poems, studying in Japan

近代日本人の天童寺踏査とその認識について

韓 娜（浙大寧波理工学院）

要旨

天童寺は寧波市の太白山麓にあり、宋の時代から禪宗五山の一つに数えられた名刹である。栄西、道元、雪舟をはじめ、多くの日本高僧が訪れ、日本との関わりも深く、古代中日文化交流にかなり役割を果たした寺院の一つでもある。しかし、近代以降天童寺を訪れた日本人についてはこれまで検討されていない。本稿は主に明治から大正にかけて中国に渡航し天童寺を訪れた日本人に着目し、彼らの踏査記録を新しい史料として用いて考察を試みるものである。近代日本人の天童寺踏査の実態については、交通ルートから踏査人物や目的まで明らかにした。そのうえで、踏査記録を手がかりにしながら日本人の目に映し出された当時天童寺の諸相及び日本人の天童寺認識について検討し、近代中日両国における交流の一端を考察した。近代日本人による天童寺の記録は、天童寺の歴史記憶として史料価値を持つものであり、近代中日交流史においても重要な意義を持つものと考えられる。

キーワード： 天童寺、寧波、中国踏査記録、中国認識、近代中日交流

はじめに

天童寺は寧波市の太白山麓にあり、宋の時代から禪宗五山の一つに数えられた名刹である。かつて臨済宗の開祖栄西、曹洞宗の開祖道元、画聖の雪舟をはじめ、多くの日本高僧がここに修行しており、日本との関わりも深く、古代中日文化交流にかなり役割を果たした寺でもある。しかし、十七世紀後半から鎖国政策によって中日間の交流が次第に減少し、一時中断したこともあった。1871年『日清修好条規』の締結によって両国の交流が再び頻繁に行われるようになったが、近代においては日本人が天童寺を訪れたか、何のためにどのような認識を持って来たのか、これまでの研究ではほとんど検討されていない。

一方、近年、近代日本人による訪中紀行文や見聞録などが新しい史料としてかなり注目されている。これらの史料を用いて近代日本人の中国寺院体験や仏教踏査についての研究もあるが、ほとんど特定の個人に焦点を当てて検討を行うもので、その代表的なものとして陳（2002）が挙げられる。陳（2002）では明治初期1873年に僧侶として初めて訪中した小栗栖香頂の日記を手がかりに、当時中国仏教や寺院の衰微を実見した小栗の認識について議論されている。ただ小栗は主に中国北部の寺院に滞在しており、近代日本人の中国寺

院認識の全体性を視野に収めるためには、特定の地域や寺院に着目する研究も必要であるが、ほかの地域の寺院体験についてはこれまで十分に考察されてこなかったように思われる。本稿の取り扱う天童寺については、近代日本人の中国古建築調査などの研究に少し触れたが、その実態の究明や天童寺認識の検討にまで及んでいないと言わざるを得ない。したがって、本稿は近代以降、主に明治から大正にかけて日本人の天童寺踏査に着目し、日記、紀行文、見聞録など天童寺関連の踏査記録を収集整理したうえで、近代日本人の天童寺における踏査活動の実態を明らかにするとともに、日本人の天童寺に対する認識についても検討してみたい。

1. 近代中日交流の再開と天童寺へのアクセス

天童寺の玄関である港町寧波は、隋唐の昔よりも明末清初まで、長期にわたって日本を含む東アジアの交流拠点であった。特に、唐宋時代、多くの遣唐使や学問僧は皆寧波を発着地としていたため、天童寺に留錫するものが多かった。しかし、近代になると、日本から天童寺へのアクセスはもはや昔と同様ではないが、それについてまず触れていきたい。

近代中日交流の本格的な幕開けとなった 1871 年の『日清修好条規』に基づき、明治政府と清（中国）の間に正式な外交関係が始まり、日本側の横浜などの八ヶ所が中国に開放され、中国側の上海、寧波など十五ヶ所も日本に開放された。それにつれて、日本と中国の上海を結ぶ定期航路が整備されるようになった。1875 年に郵便汽船三菱会社（三菱商事の前身）が政府指示の下、日本初の海外定期航路となる横浜-上海間（神戸、下関、長崎経由）の航路を開設し、週一回に運行することになった。その後、この航路は 1885 年に合併で新たに設立された日本郵便会社によって継承され、さらに充実された。1915 年以降週二回の運行となり、1922 年には長崎丸、上海丸などの快速船が投入され、長崎-上海間を一昼夜 26 時間で結ぶ日華連絡船の定期航路が開設された。¹⁾そして上海航路の整備と充実につれて、中国に渡航する日本人の数も急速に増加していった。一方、寧波は 1842 年に上海とともに開港五港に指定されてから、上海と極めて密接な関係にあった。上海と寧波を結ぶ定期航路が最初米国の「旗昌汽船会社」によって 1862 年に開設されたが、1875 年に政府の「輪船招商局」、1909 年に地元会社の「寧紹商輪公司」も航運に参入することによって、ますます便利な汽船時代になった。上海から寧波までは約十二時間で到着でき、しかも毎日の運行があるため、上海を経由して寧波を訪れる日本人も多くなっていった。²⁾

また、寧波から天童寺への移動を見よう。上海からの汽船が寧波市内に入港し、そこから太白山にある天童寺まで約 30 キロの距離がある。当時「公路」いわゆる道路がまだ整備されていなかったが、古来より水路が発達していたため、船で利用することが多かった。寧波港より小船で運河を進め、約三時間で天童中院のある小白鎮に上陸し、そして日本人は大抵駕籠を雇い、「少白嶺古道」を辿りながら約二時間で天童寺に着くというルートであった。

つまり、近代日中交流再開及び汽船時代の到来につれて、日本から天童寺へのアクセスも変わり、昔よりずいぶん便利になったが、決して容易とは言えないだろう。にもかかわらず、上海を経由して天童寺にわざわざ訪れた近代日本人が多く、彼ら自身の体験に基づいた天童寺の記録も多く残されている。

2. 近代日本人による天童寺の記録

これまでの文献調査では、天童寺踏査に関する近代日本人の記録は十数点確認された。それぞれの踏査目的及び作者の職業身分等によって、グループ分けをしてみた。

第一に、天童寺を訪れた日本人にはやはり僧侶や仏教関係者が一番多い。求法参学してきた昔の日本僧と違い、むしろ聖地巡礼兼ねて仏教考察を目的としたものである。日本各宗派のものが訪れており、それぞれの訪中記録には天童寺はかなり詳細に書き残されている。代表的なものだけを数えても、曹洞宗の來馬琢道の『蘇浙見学録』、高橋竹迷の『秋野老師支那祖蹟参拝紀行』、臨済宗の関精拙の『達磨の足跡：禅僧の支那行脚』、黄檗宗の山田玉田『支那祖蹟巡拜記』などが挙げられる。さらに、1926年10月に日本仏教連合会主催の中華仏教視察団が天童寺を訪れた。一行二十二名は宗派上見れば、天台二名、真言六名、臨済三名、曹洞四名、浄土二名、真宗四名のほかには日華仏教連合団連絡委員としての水野梅暁であり、団員たちの視察報告が『日本仏教徒訪華要録』にまとめられている。

第二に、文化遺跡調査の目的で訪れた学者である。近代日本建築史学者伊東忠太、関野貞、仏教史学者常盤大定は、数回にわたって中国文化史跡踏査を行い、それぞれ1907年、1918年、1922年に天童寺を訪れた。常盤大定の『中国佛教史蹟踏査記』及び関野貞との共著『中国文化史蹟解説第四卷』には天童寺の踏査記録が残されている。

第三に、懷古趣味で名所史跡めぐりの目的で訪れた文人作家、新聞記者などである。明治初期中国各地を遊歴した漢学者岡千仞の漢文日記紀行文『觀光紀游』では、早くも1884年に天童寺へ旅をしたことが確認された。これが明治期の日本人による最初の日童寺記録とも言えよう。また、俳人河東碧梧桐は1918年の中国旅行を『支那に遊びて』にまとめ、天童寺での見聞も記録している。また、「読売新聞」で上海特派員を務めた池田桃川、中国通と言われるほど長年中国に滞在した後藤朝太郎も天童寺での体験を記している。

このように、近代において天童寺を訪れた日本人が多種にわたる。近代日本人の中国紀行文や見聞録の全体から見ると、天童寺踏査に関する記録は膨大な量とは言えない。しかし、このような限られた踏査においても、天童寺が細かく観察されている。これらの記録は当時の天童寺の諸相を伝え残す、また近代日本人の天童寺認識を検討する貴重な史料となる。

3. 近代日本人の記録に見られる天童寺

本章では、近代日本人が残る天童寺踏査記録の内容に基づいて、彼らの目に映し出され

た天童寺及び日本人の天童寺認識について考察を試みる。

3.1 親しみのある「聖地」

1884年に天童寺を訪れた岡千仞が「天童山我邦名衲之所問禪」「覺縁不淺矣」³⁾といったように、天童寺は日本の名僧たちが参禅した所として、日本人にゆかりのある中国仏教の聖地である。河東碧梧桐が「四明天童第一座」の雪舟を道連れにしている気で天童寺へ向かったと記している。⁴⁾僧侶はなおさらで、来馬琢道は1913年に天童寺に向かいた時に「いよいよ今回旅行の宿願となる天童参拝」「写真器も三個共支度致し、十分な資料を得べき覚悟を定め、心ばかりの浄衣をつけて中村旅館を出発」⁵⁾と書き残している。このように、天童寺への憧れと敬虔な気持ちは多くの日本人に共通しているものと思われる。また、程度の差こそあれ、どの記録も天童寺と日本仏教との繋がりに触れている。歴史に思いを馳せることで、天童寺が日本仏教の聖地ともされた理由を述べたものも少なくない。例えば、1926年中華仏教視察団の今井鉄城は「我が傳教（最澄）、弘法（空海）の二大師が此地を經過せられたるを初めとして、栄西、道元の二大徳が此地に留錫せられて、共に大法を東に傳へられた」と日本各宗派の開祖に当たる人物が天童寺との因縁について述べ、さらに日本の曹洞宗は「実に其の源を天童山下に発して、七百年來の法統を繼續しつつあるを思えば、水を飲んで源を思ふ」と、日本の曹洞宗の源泉たる天童寺の地位を到底否定することはできないと述べている。⁶⁾そのため、中日の仏教に大きな足跡を残した高僧たちの霊跡を辿る日本人にとって、古天童すなわち天童寺の旧跡は一度訪れてみたいところになる。古天童には晋の義興、宋の宏智をはじめとする天童寺の古徳の木像や墓塔もある。古天童に惹きつける気持ちが日本人の天童寺に対する深い宗教的感情とも考えられる。

もちろん、天童寺に来るまで、近代日本人は天童寺をはじめとする中国寺院については、主に仏教古典や文献からしか知り得ていないと言ってよからう。そこからのイメージを持ちながら、天童寺を実見した日本人の思いも注目すべきものである。1922年に天童寺の境内に足を踏み入れた常盤大定は、道元によって開創された永平寺の勝景が、この天童寺を真似ているということは一見明白であると述べ、さらに「我れ支那に遊ぶ三回、多くの省を跋涉するも未だに斯くまでに我が禅院を仿佛せしめるものに接せぬ。ここに入りてその環境が恰も故郷に帰るの思あらしめた」⁷⁾と第一印象を記し、天童寺に親近感を覚えている。四年後中華仏教視察団の保坂玉泉も天童寺と永平寺とのつながりに注目し、「永平寺は小天童と云われるが、境内と云ひ伽藍の配置と云ひ天童寺によく似ていたのは特に親しみを覚いた」⁸⁾と同じような感銘をうけたと思われる。寺の伽藍だけではなく、天童寺辺りの景色も日本と違わぬ風情があるというような記述も見られる。日本人にとって、目の前で直に見る天童寺の光景は、あたかも日本に相似しているものが多く、仏教の聖地でありながら親しみを感じ、それが第一印象に残ったのではないかとと思われる。

3.2 期待以上の「禪林」

日本人が尤も関心を寄せているのは、何よりも天童寺当時の様相である。天童寺の伽藍配置、規模様式、住僧の状態などは、どの記録においても主役となり、細かく記されている。

とりわけ、多くの日本人は天童寺の伽藍が宏大で立派であったことに意外に思い、期待を超えた大伽藍に深い感銘を受けている。天童寺の整頓した伽藍を目にした中華仏教視察団の高井観海は「天王殿、仏殿、法堂、羅漢堂等棟棟相摩し、其の左右に客堂、齋堂、静観堂、雲水堂、玉佛閣、藏經閣等無数の建築物は彼此呼応して、繞らずに土壁を以てし、四面山につつまれている」と細かく記録しながら、その規模の壮大さに「誠に驚嘆せざるを得なかった」と書き残している。⁹⁾保坂玉泉も「予想以外というよりも寧ろ驚くべき程整っているのみか、何れも立派に修理され、日本仏教に優れるとも劣らない」¹⁰⁾と同感している。また、具体的な建築物についての記録もある。例えば、天童寺の最初の主殿である天王殿については、常盤大定は「その巨大なる事、未だ曾て接せざる所のものである」¹¹⁾とその大きさに衝撃を受けている。安藤文英も驚きを示しており、その大きさをよく伝えるために日本との比較を添えて「天童の四天王は浅草の二王様の三倍もある、いかにもいかめしいもの」¹²⁾と補足している。このように、天童寺の寺域の広大さや伽藍の壮大さが期待を超えるものであり、驚嘆の声をあげるような記述は多く見られる。

建築構造法に注目した人もいる。関野貞は建築史の視点から、天王殿内部の天井は「化粧屋根裏、その構造の法並びに軒の手法、虹梁などの制は、東大寺の南大門を想起せしめる」と記し、さらに仏殿の軒や垂木や天井などの形式は「重源上人により輸入された我が所謂天竺様に近い」¹³⁾と指摘している。「天竺様」は「大仏様」とも称されるが、鎌倉時代初期に東大寺再建のため、入宋した経験のある重源が天童寺など中国の五山十刹から取り入れた建築様式のことである。長い歳月を経たにもかかわらず、多少類似するところがあるのを目にした関野貞は、仏教の伝来とともに、中国仏教の建築様式も日本へと伝わったことに実感させられ、天童寺の建築に日本仏教建築の源を探し出そうとしていると考えられる。

また、天童寺の僧侶の状態や修行の様子についても近代日本人はよく観察している。天童寺に一夜を過ごした日本人が大体朝課修行に参列しており、その実体験も多く書き残されている。例えば、1922年天童寺に宿泊した高橋竹迷らは午前二時の行持に参加し、すっかり揃った法服を身につけた百五十人ぐらいの僧侶の行列を見て、その人数の多いことにまず驚きを覚えたという。そして僧侶たちがお経を唱えながら殿内をめぐるという念仏行道が始まると、「何等の混雑もなく、疎密よろしきを得てちゃんと来る。その規則の整正たるに驚く」¹⁴⁾と記している。同年に訪れた常盤大定も天童寺の作法や念経の態度に極めて感動を覚え、中国に来て以来「如何にも佛寺に詣せるの感を以て衷心より喜んだのは、南嶽祝聖寺とこの天童寺との二所のみである」¹⁵⁾と称賛している。前述のように、彼は天

童寺踏査の前にすでに二回も中国に来たので、各地の寺を訪れたが、天童寺の整然たる規則と熱心に修行に励む僧侶たちの姿によほど感慨深かっただろうから、このような記述を書き留めたのではないかと考えられる。同じく中国各地の寺を訪れた中華仏教視察団の保坂玉泉は「多く外禪内浄で、殆ど念仏で風味している状態」と当時の中国では禅宗が盛んでないのにいささか失望を示し、「天童には清規稍や行われ、禪寺たる面影があつて、幾分慰む所があつた」¹⁶⁾と禅の特色を依然として保った天童寺に感銘を受けている。このように天童寺の宗風や行持などをほかの中国の寺と比較しながら高く評価する記録が多い。また、来馬琢道は、当時天童寺内の僧侶は三百人ぐらいで、また寧波に天童下院、小白鎮に天童中院があるという観察を踏まえたうえで、「沢山の参詣者のあることを察することができる」と述べ、これだけの多人数の僧侶と参詣者を維持してきた天童寺が「真に完備せる支那当代の禪林と云つてよからう」¹⁷⁾という感嘆の声をあげている。

3.3 その他

天童寺に感動や驚嘆や称赞という記述がある一方、やや異様に感じたり遺憾に思ったりするという記録もある。

前述のように、天童寺の伽藍が想像以上に修繕が行き届いているのに驚いた日本人が多い。その一方、仏像が多すぎるとか、装飾が派手とか、金光燦爛としているとか、日本の寺に見慣れないものに異様を感じたという記述も見られる。これについては、高橋竹迷は殊に禅的感化においては日本人の国民性として淡泊、清楚なものを好むが、中国の寺は濃厚に複雑に壮麗でありながら、盛んに塗り立てており、簡素で禅的なところがないと指摘しながら、中国文明の輸入によって日本禅宗建築が発達したので懐かしみも感じたと言っている。¹⁸⁾

また、古跡について遺憾に思った人もいる。たとえば、天童寺に登る道に「鎮蟠塔」という古跡がある。この塔を見た時天童寺に着いたと思わせるシンボリックなものとして、天童寺を訪れた日本人の間でも名高い。唐の時代に建てられ、大分破損していたため、1920年に建て直された。その近代様式への変化に失望を隠せなかった日本人の記録が多く見られる。修復二年後訪れた常盤大定は「面目を一新し、全く昔の余影を遺さぬに至った」と残念がっており、「工匠は昔時の様式を重んぜず、修理の際に旧型を破壊して、徒らに新手法を弄する」と古跡の修復問題まで厳しく指摘している。¹⁹⁾

おわりに

以上のように、本稿は近代日本人の天童寺踏査について、その交通ルートや踏査人物や目的などを明らかにした。そのうえで、様々な踏査記録を重ねることにより、近代日本人の天童寺認識を浮き彫りにした。

近代日本人による天童寺記録の内容はかなり詳細で、規模様式や伽藍配置だけでなく、

行持に参加した実体験や高僧遺跡にたどった心境なども生々しく記されている。多くの日本人はかつて歴史や古典から抱いたイメージ以上の天童寺を見つけ、感心したり称賛したりしている。また、一般的な感想にとどまらず、見聞を元にして天童寺と日本仏教の関わりを述べたり、さらに天童寺が日本に対して持つ仏教史的意味へと遡ろうとしている。これは日本仏教の源泉たる天童寺に対して近代日本人が抱いた深い宗教的感情とも考えられる。

しかしながら、天童寺が期待以上という日本人の驚きからは、当時の日本社会における中国仏教認識には先入観や偏見もあったのではないかと考えられる。冒頭に述べた明治初期小栗栖香頂などの訪中日記においては、「墮落」「衰退」など中国の寺院や仏教への批判には手厳しいものがある。当時、中国仏教が風化し、寺院の荒廃化が進んでいると一般的に考えていた日本人が多かった。天童寺を訪れた日本人の中には、天童寺もずいぶん荒廃しているのではないかという考えを抱きながら向かうものもいたと思われる。そして、想像以上に修繕が行き届いており、紛れもなく生きていた天童寺及び熱心に修行に励む僧侶たちの姿を見たときは、驚きや感動を禁じえなかったのである。

つまり、近代日本人の天童寺を見る目線は、単なる中国趣味でもなく、サイード的な意味のオリエンタリズムとも異なるといえる。むしろ、天童寺のような日本ゆかりの地に、日本文化の源流を求める傾向があるのではないかとと思われる。そのため、彼らの天童寺をめぐる記述では、天童寺と中国その他の寺との違いの強調や、天童寺と日本との共通性の指摘が目立った特徴をなしていることも留意すべき点である。

確かに記録は個人的主観に基づくものもあり、また天童寺での限られた体験の記録から、近代日本人の天童寺認識についての一般化を行うことには慎重であらねばならない。しかし、近代日本人による天童寺踏査記録は、当時の天童寺をリアルに描いた史料価値が高いとともに、これらの記録が後に出版して読まれることによって、近代日本社会に当時の天童寺の状況や中日仏教の交流を大衆的に伝えたことにおいてもかなり役割を果たしているといえる。また、これらの記録は近代中日交流史や近代日本人の中国認識に補足しえるものも多くあると思われる。

注

- 1) 松浦章 (2020) 「長崎丸・上海丸の時代——日中汽船航路の新時代」『或問』第 38 号、1 頁。
- 2) 上海寧波間の航路の歴史については、『寧波港史』を参照。
- 3) 岡千仞著、張明傑整理 (2009) 『観光紀遊・観光続紀・観光遊草』中華書局、51 頁。
- 4) 河東碧梧桐 (1919) 『支那に遊びて』大阪屋号書店、209 頁。
- 5) 来馬琢道 (1913) 『蘇浙見学録』鴻盟社、131 頁。中村旅館は当時寧波唯一の日本人旅館。
- 6) 今井鐵城 (1928) 「寧波の佛教」水野梅曉等『日本仏教徒訪華要録』日本佛教联合会、338 頁。

- 7) 常盤大定（1938）『中国佛教史蹟踏査記』龍吟社、470 頁。
- 8) 保坂玉泉（1928）「支那視察感想」『日本仏教徒訪華要録』日本佛教聯合会、309 頁。
- 9) 高井觀海（1928）「中華佛教訪問記」『日本仏教徒訪華要録』日本佛教聯合会、231 頁。
- 10) 前掲(8)、307 頁。
- 11) 前掲(7)、470 頁。
- 12) 安藤文英（1928）「支那を瞥見して」『日本仏教徒訪華要録』日本佛教聯合会、323 頁。
- 13) 常盤大定、関野貞（1939）『中国文化史蹟解説 第四卷』法蔵館。138-139 頁。
- 14) 高橋竹迷（1926）『秋野老師支那祖蹟参拝紀行』中央仏教社、83 頁。
- 15) 前掲(7)、472 頁。
- 16) 前掲(8)、317 頁。
- 17) 前掲(5)、100-101 頁。
- 18) 前掲(14)、92 頁。
- 19) 前掲(13)、143 頁。

参考文献

- 岡千仞著、張明傑整理（2009）『観光紀遊・観光統紀・観光遊草』中華書局。
- 来馬琢道（1913）『蘇浙見學録』鴻盟社。
- 関清拙（1919）『達磨の足跡：禅僧の支那行脚』二松堂書店。
- 河東碧梧桐（1919）『支那に遊びて』大阪屋号書店。
- 高橋竹迷（1926）『秋野老師支那祖蹟参拝紀行』中央仏教社。
- 常盤大定（1938）『中国佛教史蹟踏査記』龍吟社。
- 常盤大定、関野貞（1939）『中国文化史蹟解説 第四卷』法蔵館。
- 山田玉田（1926）『支那祖蹟巡拝記』宇治黄檗真光院。
- 水野梅曉等（1928）『日本仏教徒訪華要録』日本佛教聯合会。
- 鄭紹昌（1989）『寧波港史』人民交通出版社。
- 陳繼東（2002）「近代における日中仏教の再接近—小栗栖香頂の北京日記を中心として」『近代仏教』第 9 号、52-71 頁。
- 松浦章（2020）「長崎丸・上海丸の時代—日中汽船航路の新時代」『或問』第 38 号、1-14 頁。

【附記】本稿は、2024 年度寧波市重点文化研究基地の研究プロジェクト「近代日本対天童寺の踏査与認識研究」（研究代表者韓娜、プロジェクト番号 WJ24-42）による研究成果の一部である。

Exploring Modern Japanese Field Surveys and Perceptions of Tiantong Temple

HAN, Na

Abstract

Tiantong Temple, located at the foothills of Taibai Mountain in Ningbo, has been renowned as one of the Five Great Chan Buddhist Temples since the Song Dynasty. It also has a profound connection with Japan, as many Japanese high priests, including Eisai, Dogen and Sesshu studied there. This temple is recognized for its significant role in cultural exchanges between China and Japan in ancient times. However, despite the fact that many Japanese have also visited Tiantong Temple since the modern era, these visits have received limited scholarly attention thus far. This paper focuses on the Japanese visitors to Tiantong Temple during the Meiji and Taisho periods, and attempts to examine their field survey records as novel historical materials. The actual conditions of these modern Japanese field surveys of Tiantong Temple are clarified, including the transportation routes, the visitors' identities, and their purposes. By analyzing these field survey records, we can gain insights into various aspects of Tiantong Temple as observed by these Japanese visitors and their perceptions of Tiantong, as well as glimpse into some of the exchanges between China and Japan in the modern era. These field survey records, written by modern Japanese visitors, are considered quite precious materials documenting Tiantong Temple during that time and hold certain historical value for understanding culture exchanges between modern China and Japan.

Keywords : Tiantong Temple, Ningbo, field survey records about China, Japanese perception of China, culture exchanges between modern China and Japan

日本近代文学に描かれた空間（珈琲店）における女性像の表象

邱 月（フェリス女学院大学非常勤講師）

要旨

日本近代文学に描かれた公共空間としての珈琲店（日本では主にカフェ）に焦点を当て、文学作品に映し出された珈琲店における女性、とりわけカフェ「女給」の表象を中心に分析しようとするものである。1920年代以降、「女給」という職業婦人の登場に伴い、カフェ「女給」を題材とする文学作品は日本で数多く現れたが、それらを系統的に整理・考察する試みはほぼなされていない。それゆえ、本稿は、まず、谷崎潤一郎『痴人の愛』（改造社、1925年）、広津和郎『女給』（中央公論社、1931年）などの作品を代表として取り上げ、1920年代銀座エンサイクロペディアと言える、安藤更生『銀座細見』（春陽堂、1931年）と繋げて考察することによって、カフェ「女給」の表象・描写の位相を究明する。珈琲店という西洋文化の象徴たる公共空間におけるカフェ「女給」という群像は、日本の近代文学作品の中でいかに表現され、そこにいかなる類似や相違があったのかを、モダニズム文化の諸相との関わりも含めて究明していきたい。

キーワード：日本近代文学、カフェ、女給、モダニズム文化

はじめに

女性及び女性学は、近年世界中で注目されている。20世紀初頭には、日本においても社会システムの転換に伴い、女性のアイデンティティや社会的地位が大きく変容した。明治の文明開化から昭和時代に至るまで、資本主義の発展により、急速な産業化が都市化の進行を齎す中で、女性の社会的地位及びライフスタイルの変容も話題となった。

本稿では、珈琲及び珈琲店という西洋的な「食」文化を切り口として、その新たな西洋文化及びそれがもたらしたライフスタイルの変化と女性との関わりに着目する。当時の日本では、西洋文化の影響を受けて珈琲店が各地で姿を現し、文学や政治にまつわる議論が活発に繰り広げられた。このような新たな公共空間において、女性たちという特定の群像はどのような存在として登場し、どのように記録されたのか。そして、そこで描かれる女性像にはどのような特徴と時代性が刻印されていたのか。以上の問題点を探るために、本稿では当時の近代文学作品と関連文献を素材として議論を進めていく。

先行研究を一瞥すると、日本の近代文学に絞っていえば、特定の作家およびその諸作品に反映された女性像に関する研究は多い。明治末期から、従来の伝統的な観念を持った良

妻賢母型の女性像に変化が起き、自由で、「我が人生の道」に注目する女性が現れた。夏目漱石の『虞美人草』、菊池寛の『真珠夫人』は、これを表象化した作品である。また、島崎藤村の作品に登場する女性像などを題材にして、主に「家」、「性」、「母性」などが論じられている。本稿の主題と重なる先行研究としては、山路勝彦(2021)の「女給が輝いていた昭和：近代日本のカフェ文化（2）」がある。そこでは、昭和時代のカフェの営業状況などが論じられ、一部の文学作品を参考資料として、カフェと女給などの状況にも言及している。しかし、文学作品に表象された女性像に重点は置かれているわけではない。このような先行研究を踏まえ、特定の文化（珈琲文化）、もしくは特定の場所（新たな公共空間としての珈琲店）、特定の要素（女性像）に絞り込んで、それぞれの近代文学作品から、これらに関わる描写を抽出し、系統的な整理や考察を進める必要がある。

したがって、本稿では、日本近代文学に描かれた公共空間である珈琲店における女性像に関わる描写を抽出し研究対象とする。これを通じて、珈琲店に登場する女性表象を中心に検討していく。その上で、女性の社会的地位とアイデンティティが時代の変遷と共に、どのように変化してきたか、文学作品に映し出された女性イメージなどの問題を明らかにすることが、本研究の目的である。

1. 日本近代文学に描かれた珈琲店における女性像

本稿の調査によると、珈琲文化が日本に入ってから、文学機能をもつ珈琲店が多く設立されたと思われる。実際、永井荷風、芥川龍之介などの日本近代作家、知識人、エリートたちはよく利用していた。この時期に彼らの文学作品に描かれた珈琲店の表象は、「…ヨーロッパのカフェのやうなものが欲しいといふ話が、新帰朝の書家達や若い文学者達の間に交された。…」¹⁾と述べられているように、いわば文学サロンである。このような珈琲店に通っていた女性客は主に文人、エリートであった。女性客の文人、エリートについては、例えば、安藤更生の「カフェの起源」に言及した女性会員として、「森真如、長谷川時雨、岡田八千代、尾島菊子（今の小寺菊子）等の人々があつた。」²⁾。彼女らは公共空間である珈琲店の文学機能を利用し、談話などの社交場としていたが、彼女らが創作した珈琲及び珈琲店に関わる文学作品は多くないということが明らかになった。昭和初期のエログロナンセンスの世相の中で、文学サロンであった珈琲店のほか、娯楽性の高く、夜の街を彩る存在である「カフェ」が生まれた。カフェの従業員は女性スタッフ、いわゆる当時に「女給」と呼ばれる特定の群像であった。1920年代以降、日本における「女給」という職業婦人の発達に従って、カフェ「女給」を題材とする文学作品（主に小説）も現れた。それゆえ、文学作品に映された珈琲店の女性像は、「女給」が話題となった作品が主流である。そして、「女給」たちが通っていた珈琲店は当時「カフェ」と呼ばれた。そこで、まずは「女給」そのものを詳しく説明する。

現在記号化された「女給」というのは、日本では、明治時代末から現れ、昭和時代にピ

ークに達し、和服の女性が白いエプロンをつけ、給仕をしたりお酌したり、時には一緒に席について雑談したりする女性を指し、カフェ「女給」と一般的に認識されている。ところが、最初に登場した「女給」はミルクホール、汽船、鉄道にもよく現れ、「女ボーイ」、「女仕給」とよく呼ばれたのである。明治時代に「女給」の仕事内容と類似性のあるウェイトレスが現れた店は京橋区南金六町（銀座八丁目）の恵比寿ビアホール³⁾であり、竹川町（銀座七丁目）の台湾喫茶店⁴⁾などである。従事する仕事内容と服装イメージはその後に定着されたカフェ「女給」と似ている。そして、昭和時代にカフェの出現と人気に伴い、「女給」という呼び方も大いに流行していた。とりわけ、関東大震災後、カフェの急増により、カフェ「女給」の隆盛期に至った。当時、女給時代ともよく呼ばれており、流行歌の「女給の唄」でさえも作られた。

安藤更生は『銀座細見』の「女給篇」で「女給」という新たな職種の重要性について、「女給は解放期に向つてゐる日本女性にとつての一つの重要な職業である」⁵⁾と述べた。珈琲店は元々東京の銀座エリアを基盤に活躍し、そこは都市化の代表地域である。「女給篇」に「…銀座は女給の母體である。カフェは銀座に生まれた。カフェと共に発生した女給は同じく銀座を母胎として生まれたのである。…」⁶⁾という記述からすると、「銀座」は近代化された都市のシンボルであり、生み出された「カフェ」は西洋文化のシンボルであると同時に「女給」はそうした時代の産物であり、「カフェ」、「銀座」、「女給」という密接な関係を保っている。安藤はカフェ「女給」に関しては、その新奇性と重要性、さらには、近代都市の形成にも役立ったと強調した。

2. 日本近代文学作品から見るカフェ「女給」の表象

日本におけるカフェ「女給」を話題とした文学作品は、ジャンルとしては、主に小説であり、作者はほとんど男性作家である。もちろん、この時代に女性作家は多く存在していたが、女性作家でカフェ「女給」に焦点をあてた作品は男性作家の作品よりずいぶん少なかったのが実状である。主に自分自身の「女給」経験を通し、彼女らの人生の苦難と不幸を反映した作品は僅かである。例えば、林芙美子の『放浪記』であり、佐多稲子の「女給の生活」などがある。

さて、作家たちは、なぜこの時代にこのようなテーマに絞ったのか、このようなテーマを選ぶことによってどのような社会実態を反映させたかったのか、読者にどのような問題を深く理解させたいのか、また、この時代のカフェ「女給」の社会的地位はどのように位置づけされていたのか、文学作品に描かれたカフェ「女給」の表象を分析していく。

2.1 谷崎潤一郎 小説『痴人の愛』

谷崎潤一郎の長編小説『痴人の愛』は1924年3月20日から6月14日にかけて『大阪朝日新聞』に連載され、中断後、雑誌『女性』11月号から翌年7月まで連載された。単行本は

1925年7月改造社により出版された。本稿では、作品の中におけるカフェ「女給」ナオミの働く場及びその外貌などの描写に注目する。

「…彼女は浅草の雷門の近くにあるカフェエ・ダイヤモンドと云ふ店の、給仕女をしてゐたのです。彼女の歳はやつと數へ歳の十五でした。…中略…「奈緒美」は素敵だ、NAOMIと書くとまるで西洋人のやうだ、と、さう思つたのが始まりで、それから次第に彼女に注意し出したのです。不思議なもので名前がハイカラだとなると、顔だちなども何處か西洋人臭く、さうして大そう伶俐（りこう）さうに見え、「こんな所の女給にして置くのは惜しいものだ」と考へるやうになつたのです。…」⁷⁾

小説の冒頭で、「…浅草の雷門の近くにあるカフェエ・ダイヤモンドと云ふ店…」は当時、作者がよく浅草周辺のカフェを利用し、それで、カフェの機能などを詳しくわかつていたため、小説の舞台としてカフェを選択したと考える。「…やつと數へ歳の十五でした。…」の若いナオミの年齢を掲げている。彼女の外貌と名前を説明し、主人公が「…「奈緒美」は素敵だ、NAOMIと書くとまるで西洋人のやうだ、」、「顔だちなども何處か西洋人臭く、さうして大そう伶俐（りこう）さうに見え、…」彼女の西洋風の名前と雰囲気にと表現した。この文章からみれば、主人公のサラリーマン河合は「ナオミ」に憧れがあり、さらに西洋化されたものへの憧憬の念があることがわかる。文章全体の内容から見れば、主人公の河合は、西洋文化を崇拜し、そのような西洋文化から派生した新しい要素であるカフェ「女給」にさらに抵抗できなかった、当時の日本のサラリーマンの一部を代表していることもわかるであろう。その後の作品内容から見れば、主人公のナオミは当時、河合と一緒に暮らしても、定められた運命を受け入れようとはせず、河合及び当時の社会に反抗したことが明らかにわかる。

2.2 広津和郎 小説『女給』

広津和郎の『女給』の初出は1930年の『婦人公論』連載であり、1931年に中央公論社により単行本で出版された。主な内容は、主人公の女給小夜子がカフェで働き、何人かの男性客に絡まれ、また、同僚の君代と付き合う。単行本の『女給』では『女給 小夜子の巻』と『女給 君代』に分けられている。それぞれ二人の女性のさまざまな側面が描かれている。当時の社会背景の中で、女性、特にカフェ「女給」という特殊な職業に就いている女性たちの悲劇的な経験を反映し、女性の社会的地位が側面から描かれている。『女給 小夜子の巻』の冒頭の「作者のことば」には、以下のような描写がある。

「…併し、女自身のか弱い手で、この世に生きて行かなければならないやうな境遇に置かれた一般の婦人には、この女主人公の苦しみは、必ず多少の同感を得ることと思ふ。自

身の眼には一般に婦人の「夜明け」はまだまだ遠い遠いといふ気がする。教養ある一部の婦人が、何を叫んでみよう、一般に婦人の運命は、まだまだ「闇」の中を彷徨してゐるといふ気がする。自分は、さういふ婦人たちに向つて、「小夜子」が何を叫びかけているかを聞いて貰ひたいと思ふ。…」⁸⁾

「女自身のか弱い手で、この世に生きて行かなければならないやうな境遇」、「一般に婦人の「夜明け」はまだまだ遠い遠い」という内容から見ると、この作品におけるカフェ「女給」の描写や映された女性の表象は、他の作品とほぼ同じであり、すなわち、社会的地位は高くなく、さらには、「一般に婦人の運命は、まだまだ「闇」の中を彷徨してゐる」ということがわかる。

2.3 永井荷風 小説『つゆのあとさき』

永井荷風の『つゆのあとさき』は「二」の部分の冒頭で、近代都市である東京の銀座を背景にして、主人公のカフェ「女給」君江の通勤途中にカフェ及び周辺環境に関わる描写が出てくる。

「…松屋呉服店から二、三軒京橋の方へ寄つたところに、…これが君江の通勤してゐるカフェであるが、見渡すところ殆ど門並同じやうなカツエーばかり續いてゐて、…路地は人ひとりやつと通れる程狭いの、大きな芥箱が並んでゐて、寒中でも青蠅が翼を鳴し、晝中でも鼯鼠のやうな老鼠が出没して、人が来ると長い尾の先で水溜の水をはね飛ばす。…十畳ばかり畳を敷いた一室があつて、…朝十一時から店へ出てゐた女給と、今方来たものとの交代時間で、坐る場所もない程混雑してゐる最中。鏡一臺の前にはいづれも女が二三人ずつつ繡眼児押しに顔を突出して、白粉の上塗をしたり髪を直したり、或は立つて着物を着かへたり、大胡坐で足袋をはき替へたりしてゐるものもある。…」⁹⁾

そこでは、「大きな芥箱」、「寒中でも青蠅」、「晝中でも鼯鼠のやうな老鼠」など、カフェに汚いイメージが付与されている。さらに、このカフェ「女給」用の休憩室は、その空間が狭く、「坐る場所もない程混雑してゐる」と描写されている。カフェ「女給」たちは二三人で「着物を着かへたり、大胡坐で」という内容から、彼女らの日常生活の実態も反映されている。上記の文章のように、カフェの屋外であれ屋内（「女給」の休憩室）であれ、狭く、汚い荒廃したというイメージが付けられた。それは、壮麗な銀座通りにいた、おしゃれな人々と鮮やかな対照を成している。そのような劣悪な環境で生活苦にあえいでいた人々の社会的地位はもちろんのこと、そのような公共空間の劣悪な状況も映し出している。そんな雑踏の中で、着物を着てあぐらをかいて座っている二、三人のカフェ「女給」には身なりのよくない女性のイメージが示されている。当時のカフェ「女給」のイメージは切羽詰

まった生活を送り、慎み深くなく、社会の底辺にいた女性たちの姿である。

2.4 その他

また、堀辰雄の小説『不器用な天使』、永井荷風の小説『腕くらべ』などにも、カフェ「女給」は登場した。これらの作品に映された女性表象は、主に前述の内容と同じ傾向が見られる。文学作品に描かれたカフェ「女給」の表象は、いずれも、都会で働いた女性としても、生活が貧困で、元々経済的な困窮であったため、高収入やチップが得られ、社会的な地位が低い職種に落ち込んだということをかいている。

2.5 カフェ「女給」の表象

明治時代以来、第一次世界大戦と大正デモクラシーの後の日本の急速な産業化と民主主義を求める自由な風潮の広がりに伴って、女性たちのライフスタイルも大きく変化した。大正後期、着物などの和装女性以外、モダンガールたちの姿もよく見られていた。この自由主義の風潮が影響を与え、女性解放も発生し、女性が家庭におけるそれぞれの役割も変化し、社会に進出し働く女性が珍しくなくなった。また、この時期、人々は農村部から都市部へ続々と移動した。それと共に、サラリーマンなど、新たな職種も生まれた。カフェの中の「女給」も女性の新たな一つの職となった。サービス業であり、仕事内容が比較的簡単で、さらに収入が高かったため、当時、一部の女性に人気を集めていた。それをきっかけに、この時期の作家たちも、カフェと「女給」に焦点を当てて小説などの文学作品を創作した。

この時期、カフェ「女給」という特殊なキャラクターは、新しい職種であり、近代都市化の産物である一方で、カフェ「女給」たちの女性としての社会的地位への疑問や彼女らの身分に対する侮蔑を端的に批判している。当時の文学作品も現実社会も、カフェで働いていた「女給」は、主に上京してきた農村の女性、または貧しく混沌とした生活を送っており、家計を維持するための女性が主流である。より良い生活の機会を求め、あるいは色彩豊かな大都会に憧れ、上京することを選んでいるが、多くの小説はカフェ「女給」にとって不本意な生活を送り、不幸な結末を用意している。本稿に取り上げた『痴人の愛』、『女給』、『つゆのあとさき』などの女性主人公たちは全てこのペルソナに当てはまるし、そのほかの作品も同じ傾向が見られる。また、これらの小説の中では、客たちは主に中産階級であり、彼らがカフェ「女給」たちに向けるまなざしは西洋文化への崇拝の外、恋愛と結婚でもある。だが、カフェ「女給」たちの社会的地位のため、客と彼女らの恋愛は対等な関係ではなかったのである。

他方、カフェ「女給」は当時日本の都市生活の象徴の一つと成され、資本主義の下で消費社会の一環とみなされる。松崎天民の『銀座』の中に「…カフェーの客というものは、歳月と共に走馬灯のように転換して、お互いに若い時代の或る期間だけを、享樂的

に寄託するが例である。」¹⁰⁾と述べた。当時社会におけるカフェ「女給」の存在意義もこの一つの側面から解釈できる。小説に登場するカフェ「女給」たちは、たとえば、「ナオミ」、「小夜子」、「君江」など、常に監視され、消費される対象となった。当時の日本に民主主義を求める自由の風潮が広がっても、女性の地位向上は当時の日本社会において、一部の女性のみが享受でき、「ナオミ」のような社会の底辺で暮らす女性たちは根本的に変わっていないという状況も存在している。男性社会の意識が根深い当時に、社会的地位の高くない女性たちは相変わらず、社会的弱者としても位置づけられ、職業選択の道が狭かった。そのような時代にあって、カフェ「女給」として消費され、肉体的魅力を資本として生活手段を獲得する職業であったのである。

おわりに

本稿では、日本近代文学に描かれた公共空間（珈琲店）における女性像の表象を考察し、その形成の背景などを論じた。そこに登場する女性像は主にカフェ「女給」をめぐるものであった。カフェ「女給」という話題となった文学作品の出現時期は、20 世紀 20 年代以降現れ、30 年代に至って多く見られる。20 年代以前の日本文学にも、珈琲及び珈琲店に関わるものが存在しているが、それは文学機能をもつ公共空間として描かれ、そこには「女給」は登場しない。カフェ「女給」が登場する 20 年代以降になると、そこでは主にカフェ「女給」と男性の主人公との恋愛または曖昧な関係の物語が描かれる。その場合のカフェ「女給」の表象は、主に生活が貧乏で、家計を維持するために働く女性であり、娯楽性が高い珈琲店で消費の対象と見なされた。彼女らの労働環境も複雑で、社会的評価も高くなかった。当時の女性の社会的地位はある程度向上したものの、けっして根本的な問題は解決されていなかったことを反映している。カフェ「女給」という女性たちは、社会の道徳的嘲笑と批判に耐えなければならない状況にあった。これが本稿の行き着いた結論である。

本稿では、日本近代文学作品を素材に考察した。もちろん、作家たちの個性などにより、文学作品の表現はそれぞれ相違があるが、文学作品が映し出した女性の表象は、その時代の女性像の一端を示す可能性を秘めている。それゆえ、様々な文学作品に描かれた珈琲店における女性像の表象を見ることは、その時代の女性の様相及び社会的地位を読み解く一つの手段であり、一つの側面だと考える。

最後に、今後の課題に触れておく。本稿では、いずれも現時点で入手した資料に限定されている。今後、資料の追加入手により、さらに検討を継続する必要がある。

注

- 1) 安藤更生（1992）「カフェの起源」『銀座細見』、大空社、100 頁。
- 2) 安藤更生（1992）「カフェの起源」『銀座細見』、大空社、99 頁。

- 3) 篠原昌人（2023）『女給の社会史』（株）芙蓉書房出版、13 頁。
- 4) 野口孝一（2024）『明治・大正・昭和 銀座ハイカラ女性史』、平凡社、290 頁。
- 5) 安藤更生（1992）「女給篇」『銀座細見』、大空社、176 頁。
- 6) 同上。
- 7) 谷崎潤一郎（1960）『痴人の愛』『谷崎潤一郎集（一）』、講談社、40 頁。
- 8) 広津和郎（1931）「作者のことば」『女給・小夜子の巻』、中央公論社、2 頁。
- 9) 永井荷風（1960）「つゆのあとさき」『永井荷風集』第十七巻、築摩書房、269 頁。
- 10) 松崎天民（1992）『銀座』、中央公論社、75 頁。

参考文献

- 安藤更生（1992）『銀座細見』大空社。
- 篠原昌人（2023）『女給の社会史』（株）芙蓉書房出版。
- 谷崎潤一郎（1960）『谷崎潤一郎集（一）』講談社。
- 永井荷風（1960）『永井荷風集』第十七巻 築摩書房。
- 永井荷風（1962）『荷風全集』第六巻 岩波書店。
- 野口孝一（2024）『明治・大正・昭和 銀座ハイカラ女性史』平凡社。
- 広津和郎（1931）『女給・小夜子の巻』中央公論社。
- 堀辰雄（1961）『堀辰雄集』講談社。
- 松崎天民（1992）『銀座』中央公論社。
- 山路勝彦氏（2021）「女給が輝いていた昭和：近代日本のカフェ文化(2)」『関西学院大学社会学部紀要 136 号』、29-53 頁。

The representation of the Female Image in the Spaces (Coffee Shop) of Modern Japanese Literature

QIU, Yue

Abstract

This study examines the representation of female café waitresses (Jokyu) in modern Japanese literature, focusing on their portrayal as figures within the public space of the coffee shop. Following the rise of female professionals in the 1920s, including café waitresses, the Jokyu became a recurring subject in Japanese literary works. However, a systematic analysis of this literary motif remains largely unexplored. To address this lacuna, this paper analyzes key texts, including Junichiro Tanizaki's *Naomi* (Kaizosha, 1925) and Kazuo Hirotsu's *The Waitress*

(Chuokoronsha, 1931), alongside Kosei Ando's *Ginza Saiken* (Shunyodo, 1931), a comprehensive account of 1920s Ginza. Through close readings of these works, the study investigates the diverse representations and depictions of the Jokyū, considering both similarities and differences in their portrayal. By analyzing the collective image of the Jokyū within the coffee shop—a public space emblematic of Western influence in Japan—this study seeks to illuminate how these figures were constructed within the broader context of modernist Japanese culture.

Keywords : Modern Japanese Literature, Coffee Shop, Waitress (Jokyū), Modernist Culture

お茶から近代中日の文化的交流を考察する —後藤朝太郎と『瓶史』—

周 堂波（武漢理工大学），許 娜（武漢理工大学大学院生）

要旨

本論はお茶の世界から、近代中国と日本の文化的交流を考察したものである。昭和初年発刊の『瓶史』に掲載された「お茶の湯の座談会」における後藤朝太郎の発言に焦点が当てられた。『瓶史』と最も深い関係を持つ西川一草亭という人物についても触れた。中国のお茶では「さび」、「わび」などは使われず、「幽玄味」は使われていた。しかし、その「幽玄味」は主に文字の幽玄味と認識され、しかもその幽玄味は中国大陆らしい雰囲気から生まれたものであると考えられた。この中国のお茶や茶館は日本の「茶道」ほど中国庭園との結びつきがほとんどない。一方、日本のお茶は近代において、少なくとも、西川を代表とする京都の文化サークルは日本の伝統文化をどのように現代化していくのか、つまりお茶の「さび」をどのように守りながら再創作していくのかという過程は、中国のことを決して無視できないと考えられる。このような背景において、後藤の言説は時代を映す鏡のように西川を代表とする日本文化界の人々の前に映っていたのであろう。

キーワード：『瓶史』、西川一草亭、後藤朝太郎、お茶の座談会、幽玄味

はじめに

本論はお茶の世界から、近代中国と日本の文化的交流を考察することを目的としたものである。本論で注目する点は、昭和初年発刊の『瓶史』に掲載された「お茶の湯の座談会」における後藤朝太郎の発言である。『瓶史』と後藤について考察するにあたっては、『瓶史』と最も深い関係を持つ西川一草亭という人物についても看過することはできない。西川及び『瓶史』に関する研究はいくつか散見され、西川と藤井厚二、武田五一、堀口捨巳ら建築家との繋がりや、西川と西堀一三との茶道認識の異同、西川とその門下生との関係（例えば九条武子）に焦点を当てられている。しかし、『瓶史』と後藤朝太郎との関わりに関してはまだ考察する余裕が残る。

1. 西川一草亭

生花の去風流は、今から300年余り前、江戸時代の元禄14年（1701年）、京都に誕生

した一代目の去風を流祖とする。西川家は、元々米穀商を営んでいたが、流祖は風流に憧れ、祖業を弟に譲って商売を諦め、自らは尺八を好み、号を一時庵と名付けた。明和版の『京羽二重』に「去風 京都堺町御池」として尺八家の中に登録されている。²⁾二代目去風以降、去風の名が一変し、一の字を頭文字として、一峰、一風、一道、一葉、一草などになっていった。西川一草亭は 1878 年（明治 11 年）、京都上京区に生まれ、第 7 代家元を引き継いだ。

2. 雑誌『瓶史』について

『瓶史』の前身は『去風洞社報』である。これは大正 6 年から昭和 4 年まで、年一回発行された社報である。大正 13 年、大阪稽古所に加えて東京稽古所を増設し、大正 15 年には花堂一時庵を再興するというように規模が大きくなっていった。西川自身の生花に対する認識も深まるなど主要な要素が練り合わさっていった。これについて、工藤昌伸は西川思想変化なども踏まえながら『瓶史』への変遷メカニズムを、「同門誌に過ぎぬ『去風洞社報』では不十分である。一挙にそのスタイルを改め、一大飛躍をとげる日がやってくる。それが『瓶史』の誕生であった。（中略）社報刊行の過程ではほぼ完成をみた一草亭の思想を、社会的に実践するためのメディアの創出という、一草亭の期待が働いていたのである」と論じている。ここで問題となるのはなぜ書名を『瓶史』³⁾に変えたのかということである。これは中国の袁宏道が著した插花書『瓶史』に鑑み、細川吾園が明治 10 年に記した『瓶花挿法』の発刊が、明治後年になってくると多大な影響を与えたようである。雑誌『瓶史』についてより深く理解するために、昭和 6 年 4 月 1 日発刊の『瓶史』陽春号における巻頭語を引用し、その時代的使命について考察する。

我々の同胞は今新しい文化の建設に懸命の努力を払って、より愉快に、より幸福に生きる方法を講じている。それがために我々は一面私達の父や祖先の知らなかった生活苦を嘗めているかもしれないが、その一面に祖先の知らない便宜な愉快な生活を実現しつつあることも事実である。……しかもこの二つの異なった生活は互いに両立を許さないで、新しい文化は祖先の生活を踏みにじって、祖先の生活に喜びを感じる者に憎悪の感を与え、新しい文化に生きる者は伝統の生活を持て余して、片足に靴を、片足に下駄を履いたような不愉快な気持ちを感じている。そしてそれをどうする事も出来ないで、毎日を暮らしているのが現在日本人の生活状態である。我々はこの祖先の遺した生活遺産を新しい文化の中にどう生かして、特殊な国の特殊な美をどの程度に味わい楽しめばよいか、それを研究するために同人と共にこの風流雑誌『瓶史』の刊行を企てた。（西川語）

以上の巻頭語からは、昭和初年の日本における新しい生活と伝統的生活との矛盾が窺え

る。どのようにこの二種類の生活を両立させていくのかを、西川が『瓶史』を通じて模索していく姿勢も垣間見える。また西川の考えでは、生花だけに止まらず、日本の庭園、茶の湯、建築すべてに根底に通じるものがあるという。「茶の湯の座談会」では後藤と西川の茶の湯についての異同点が垣間見える。

3. 「茶の湯座談会」における後藤朝太郎

『瓶史』には、昭和7年新年号⁴⁾に載せられた「掃花寮茶話」を皮切りに、昭和13年春号の『宗湛日記』を読むまで、全部で24回にわたる座談会形式の集まりがあった。後藤が参加したこの「茶の湯の座談会」について見てみよう。

昭和七年四月二十四日 赤坂山王星ヶ岡茶寮に於て 茶の湯座談会
出席者（イロハ順）

板垣鷹穂	長谷川如是閑	西川一草亭	堀口捨己	外狩素心庵
茅野蕭々	谷川徹三	津田青楓	野上豊一郎	後藤朝太郎

座談会の内容は、新しい時代の到来に際し、どのようにお茶を改革していくのかをめぐり話し合ったものである。具体的に言えば、お茶の大衆化はできるのかどうか、伝統のお茶の形を維持していくのはよいことなのか、茶器などを現代工芸品に変えてよいかなど、お茶とその周辺について様々な交流が行われた。発話の頻度⁵⁾から見れば、西川が主役であったと思われる。座談会の参加者からの質問や討論に逐一回答している。ここで西川と後藤との会話を見てみよう。座談会が始まり、開口一番、二人には次のような対談が見られる。

西川：そこで、今日の茶会は皆さん面白いと思われましたか？

後藤：そうですね。ああいう部屋は非常に懐かしい。私などは自分でルンペンの積りでいますからお茶とか禅が一番好きです。

西川：そうですね。歴史的にいますと、「和敬静寂」と説いています。それをよく考えると、それと反対のことが多かったと思います。足利時代には人々が各々力を争った。その乱雑さを見て、つまり平和を欲したので「和」を説き、社会が乱雑だったので「静」を説き、その次に堺の貿易が盛んで成金が続々と出て、派手な生活が堺を風靡したので、これを見て「寂」を説いたと思うのです。その次も、あの桃山の派手な生活を見て、説いたではありませんか？

後藤：つまり渋くする、さびさせる——お茶は渋みをつけるというのから、寂しくもなり落ち着きを持たせるというのかな。

会話の内容から、座談会前にメンバーたちがどこかの茶室に集まり、西川からお茶の湯に招待されたことが推察できる。「お茶」、「禅」、「和敬静寂」、「渋く」、「さび」「渋み」、「寂しく」などという茶会後の後藤の感受から見れば、西川が主催した茶会はおそらく日本伝統的なお茶の湯を守っていたのであろう。引き続き、座談会の会話を見てみよう。

後藤：支那では、プロというか職工というか四時半から五時になると茶館に行くんですな。皆蓋のある奴で飲むんです。金のある者は自分で茶をポケットに入れて来てそれを飲んでいる。その時、いつも決まって床間の所に座っている奴がいるんですね。聞いてみると釜たきの組長というもので、それが仕事の順序を立てるんだそうです。この支那の茶館などは別に文化とか芸術という名は使わないが皆非常にいい気持ちでやっているな。左様、人数は百人か八十人もいるかしら……。

長谷川：ハハ……随分いますな。何かお菓子でもあるんですか。

後藤：いや、何もない。

西川：それで、うまいですか？

後藤：うまいんですな。

西川：ただ、うまいだけでなく、気分がいいんですか。

後藤：そう、うまいと共に気持ちがいいですね。

西川：そういう人達は、平生の食物はかなり低いものでしょうね。

後藤：それは低いものです。朝の七時か八時になると一杯になりますよ。その茶を飲む気持は、やはり我々が茶を飲む時と同じなんだが……。兎に角茶会に行くある嬉しいんだね。

西川：その部屋の気分はどうですか？

後藤：左様、額には「群賢」と書いてありますよ。

野上：「群賢」とは、つまりプロレタリアだろうね。

後藤：プロレタリアだよ、ああいうのがあると助かりますな。ハハ……（笑声）

長谷川：然し、上海なんかは女がいるじゃないか？……

後藤：ハハ……

上の会話から見ると、中国において、お茶を飲む人の身分（民衆）、飲む時間（四時半から）、人数（八十か百）、お茶の茶具（蓋がある）、お茶の入れ方（ポケットに入れるものもある）、床の間（実は中国の茶館で日本のような床の間はない）、茶師の仕事（釜炊きの組長）、お茶付きのお菓子と料理、お茶を飲む雰囲気、茶室の飾りと周囲への配慮などが日本とまったく異なっていることが分かる。後藤が中国のどの辺りの茶館について

述べたのかは不明であるが、彼が見た中国のお茶は全くその通りのものである。ただし、中国の茶館も地域によって著しい差異があり、例えば、茶館で劇を演じたり、噺家が話をしたり、麻雀や賭け事などで遊んだりする中国文化の代表的な場所である点については看過されている。それはある意味において日常生活の形を備えた遊びであり、西川の茶の湯理解と全く違ったであろう。一方、「うまいですか」、「ただ、うまいだけでなく、気分がいいんですか」、「その部屋の気分はどうですか」などのリズムが弾んだ質問から見れば、西川は当時中国のお茶の大衆化などに非常に興味を示したのでであろう。もう一つは、野上豊一郎の「群賢」に対し、後藤が「ああいうのがあると助かりますな」と答えている点である。ここにも後藤の中国庭園に関する独特な審美がある。確かに後藤の言う通り、「群賢」のような文字や文学的手段は、庭園だけでなく、茶館にも影響を与えている。「群賢」のような中国らしさの名づけや対聯は、見る者や観光客の知的背景に応じて、各自の脳裏で独自のイメージを形成させる特徴がある。つまり、中国のお茶は中国庭園と同じく、文字（扁額、名称、対聯、詩句など）により、主人公は脳裏で再構築できるのである。

次に後藤が中国のお茶についてどのように考えているのかを見る。

茶を煮、香を焚きつつ人生の幽玄味を観することは茶道のおきまりの型とされている。けれどもここに所謂茶道なるものは、必ずしも日本に普通に言う茶の湯を指して言うものではない。むしろ大陸人の日常生活において見られる茶の風俗、茶の取り扱い方、茶の心得などを主として考えて見たいのである。（中略）之を茶の道と言えば道であるが支那の人は道と言わず、単に茶事と言うだけである。⁶⁾

日本では「茶の湯」を「茶道」と呼びうるのに対し、中国では「茶道」と言わず「茶事」と称すると、後藤はまず日中の「茶の湯」についての呼称の違いを指摘してきた。また、大陸人の日常生活において見られる茶の風俗、茶の取り扱い方、茶の心得などに注目し、日中近代のお茶の違いについて次のことを述べている。

- ① 几帳面と言うことよりも、万事が大まかで呑気である。而も客に対するもてなしてはよほど社交的な点が濃かになる。
- ② 形よりも大陸気分で、禅機の漲っていることをはっきり知る。茶そのものよりも禅堂にいるような心持がする。
- ③ 飾り付けのものがほこりまみれになっていたり、特別に取り片付けをしたりしないため自然のままになっているのが多い。これは民族性の相違から来ているものであると解せられる。
- ④ 特に有閑階級のもののためと言うわけではなく茶館が市中に多くあるのでもわかるやうに大体がのびやかな人が多い。従って茶事は支那の人に元来向くやうにできてい

る。

- ⑤ 支那は昔は知らぬこと今は皆椅子に腰をかけて頂くのである。茶を立てるものも、椅子によっているのであるから、わりに朗らかにまたのびやかに行く。
- ⑥ 支那には茶道生活と言うが別にあるわけではなく、ひろく普及して皆一般に理解されているのだからそこに窮屈に感ずることがない。
- ⑦ 茶道の事を贅沢とか、高級とか言う風に考えるものはない。誰れ人も上下ひとしくお茶に傾注する風習があるのである。
- ⑧ 茶器類に凝ったり、八釜しく言ったりするものは少数である。天真爛漫にガブ呑みをすることも敢えて辞しないのである。⁷⁾

後藤は上記八つの方面から日中両国においてお茶の大衆化状況を発信した。特に中国の部分は今から見ても納得できると思われる。つまり、後藤から見れば、中国のお茶は呑気で、大まかで社交的な雰囲気が高く、階級制限がなく自由自在な気分が漂うものなのである。ただし、それはやはり日常生活の形を備えた遊びに限ったものである。

おわりに

後藤朝太郎は「支那の茶道」をはじめとするシリーズの論説を 1932 年から 1939 年⁸⁾ 西川一草亭が亡くなるまで『瓶史』に発表し続けていた。近代中日のお茶に関する文化的交流は、後藤の言説から見れば、次のいくつかの特徴が見られる。「茶道」、「茶事」、「茶館」、「喝茶」など後藤の文章には一見して混乱した言い方が見られるが、強いて言えば後藤の考えがその中から窺えるのではなかろうか。後藤は日本国内の雰囲気あるいは流行りに包まれながら中国の現状を考察していたと言えよう。そのため、後藤はよく日本における「茶道」などの言い方と中国における「茶事」、「茶館」、「喝茶」などの言い方との間で行ったり来たりしていたのである。中国のお茶に「わび」、「さび」など日本的な美意識は使われず、「幽玄味」は使われた。しかし、その「幽玄味」は主に後藤が述べたところでは、文字の幽玄味⁹⁾と認識され、しかもその幽玄味は中国大陸らしい雰囲気から生まれたと考えられた。後藤によれば、中国のお茶や茶館は日本の「茶道」ほど中国庭園との結びつきがほとんどない。日本のお茶は近代において、少なくとも西川一草亭を代表とする京都の文化サークルは日本の伝統文化をどのように現代化していくのか、つまりお茶の「さび」をどのように守りながら再創作していくのかという過程は、中国のことを決して無視できない。このような背景において、後藤の言説は時代を映す鏡のように西川を代表とする日本文化界の人々の前に映っていたのであろう。

注

- 1) 後藤朝太郎は、「支那通」であるとともに、東京帝国大学を卒業したアカデミズムの学者で

もあった。後藤に関する先行研究の関心は殆どが文字、中国学、中国認識、中国民俗などに集まっているが、執筆者は看過された後藤の中国庭園に関する研究を行っているが、庭園と関係があると思われる「お茶」についての考察は本論の新しい試みである。

- 2) 熊倉功夫ほか(1993)『花道去風流七世：西川一草亭：風流一生涯』淡交社、p. 58。
- 3) 明末の文人袁宏道(1568-1610)が32歳の時に著したものである。日本に伝わってから、江戸時代に人気となり、袁宏道派という流派まで生むなど、日本の花文化に大きな影響を与えた。工藤昌伸は『江戸文化といけばなの展開』で「わが国のいけばなの歴史に登場する文人花はすべて『瓶史』の花論をその本旨としている」と評している。袁宏道の『瓶史』に関する研究には、村山吉廣(2001)「龜田鵬齋と『瓶史』」『中国古典研究(46)』、pp. 106-110；川田健(2001)「袁宏道『瓶史』と『瓶史國字解』 付『瓶史國字解』 龜田鵬齋序譯注」『中国古典研究(46)』 pp. 111-119；顧春芳(2007)「袁宏道の《瓶史》中一花的品評」『言語と文化6』、pp. 109-116；有澤晶子(2016)「袁宏道『瓶史』考：座右に清玩」『アジア文化研究所研究年報(51)』、pp. 1-18；有澤晶子(2017)「日本における袁宏道『瓶史』受容考」『文学論藻(91)』、pp. 85-104などがある。
- 4) 『瓶史』の刊行は昭和5年1月の改題以降、当年一期しか発行されなかったが、昭和6年以降は年に四期(新春、春、夏、秋)発行された。春号は「陽春」、「新春」、「新年」など名称が不統一であったが、本論では統一して「新年号」と呼ぶことにする。
- 5) 板垣鷹穂(1回)、長谷川如是閑(17回)、西村一草亭(38回)、堀口捨己(6回) 外狩素心庵(15回) 茅野蕭々(4回) 谷川徹三(4回) 津田青楓(13回) 野上豊一郎(5) 後藤朝太郎(14回)。
- 6) 後藤朝太郎(1939)「支那の茶道」、『瓶史』(第九卷新年特別号)、pp. 35-44。
- 7) 同注6。
- 8) 1934年に初めて「幽玄」という概念を中国庭園に使ったあと、1937年から1938年にかけて頻繁に中国庭園の「幽玄味」について発信している。後藤の言説には「わび」という概念がまったく出てこない。おそらく後藤は中国庭園の幽玄味は中国大陆らしい特徴から生まれたものなのだとその本質を探求しているのであろう。つまり、日中戦争開始前後で、後藤の立場や発言内容に変化はあまりないのである。
- 9) 「文字の幽玄味」だけではなく、後藤から見れば、「中国庭園の幽玄味」は「文字の幽玄味」+「自然の幽玄味」+「時の幽玄味」という三要素の総合概念であること。

参考文献

- 井上治(2009)「近代日本の花道思想における『宗教』と『芸術』——西川一草亭と山根翠堂」『ノートル・クリティーク(2)』、20-35頁。
- 籠谷真智子(1985)「九条武子文芸の研究-1-上村松園・西川一草亭宛の手紙より」『仏教文化研究所研紀要(15)』、27-58頁。

- 片柳草生・籠谷眞智子（2006）風流道場—花人、西川一草亭の生涯（特別企画 京都 千年都市の美と形）『季刊銀花（145）』、90-107 頁。
- 紅野敏郎（2009）「逍遙・文学誌(214)随筆雑誌『文体』（下）万太郎・秋庭俊彦・瀧井孝作・西川一草亭・松根東洋城・蛇笏ら」『國文學：解釈と教材の研究 54(5)』、142-147 頁。
- 周堂波（2020）「近代中日庭園の交響—後藤朝太郎と重森三玲」『東アジア日本学研究（第3号）』、207-214 頁。
- 谷晃（2002）「茶書逍遙(8)西川一草亭『風流生活』と西堀一三『日本茶道史』」『茶道雑誌 66(9)』、68-74 頁。
- 戸田穰（2003）「堀口捨己の戦前期における理論と活動(その2)：堀口捨己の建築外的背景・雑誌『瓶史』を中心に(建築歴史・意匠)」『日本建築学会関東支部研究報告集 II（73）』、465-468 頁。
- 西川一草亭（1932）「茶の湯座談会」『瓶史』去風洞、17-19 頁。
- 松本静夫・宮地功（2004）「『瓶史』にみられる武田五一、藤井厚二、堀口捨己と西川一草亭 その2」『日本建築学会中国支部研究報告集 27』、929-932 頁。
- 宮地功・松本静夫（2003）「藤井厚二研究：藤井家および藤井厚二を巡る人々」『福山大学工学部紀要 27』、105-110 頁。
- 宮地功・松本静夫（2004）「『瓶史』にみられる武田五一、藤井厚二、堀口捨己と西川一草亭 その1」『日本建築学会中国支部研究報告集 27』、925-928 頁。
- 宮地功・松本静夫（2004）「『瓶史』に記述された座談会と出席者についての考察」『学術講演梗概集. F-2, 建築歴史・意匠』、427-428 頁。
- 宮地功・松本静夫（2006）「『瓶史』に記載された座談会についての考察」『学術講演梗概集. F-2, 建築歴史・意匠』、561-562 頁。
- 宮地功・松本静夫（2007）「藤井厚二研究：藤井厚二の経歴と人脈」『福山大学工学部紀要 31』、147-152 頁。

Examining Modern Chinese-Japanese Cultural Exchange Through Tea: Gotō

Asatarō and 《Heishi》

ZHOU, Tangbo XU, Na

Abstract

This paper examines modern cultural exchange between China and Japan through the lens of tea culture. It focuses on the remarks of Gotō Asatarō during the "Tea Gathering Roundtable Discussion" published in 《Heishi》, a work first issued in the early Shōwa period. The study also touches upon Nishikawa Issōtei, a figure most

closely associated with *The History of the Bottle*. In Chinese tea culture, concepts like "sabi" (rustic simplicity) and "wabi" (subtle beauty) are not utilized, while the notion of "yūgenmi" (profound and subtle beauty) is present. However, "yūgenmi" in this context is primarily recognized as a literary aesthetic and is considered to have emerged from the distinct atmosphere of the Chinese mainland. Unlike the deep integration of Japanese tea culture with gardens in the form of the "tea ceremony," Chinese tea culture and teahouses show little connection to Chinese gardens. In modern Japan, tea culture—particularly as represented by Kyoto's cultural circle led by figures like Nishikawa—faced the challenge of modernizing traditional practices. This process involved the re-creation of tea culture while preserving the essence of "sabi." During this time, Japan's tea culture could not ignore the influence of China. Against this backdrop, Gotō's statements likely served as a reflection of the times, resonating with the cultural concerns of Japanese intellectuals represented by Nishikawa and others in the cultural world.

Keywords : 《Heishi》, Nishikawa Issōtei, Gotō Asatarō, Tea Gathering Roundtable Discussion, Yūgenmi

清国・日本・民国・偽満洲国・中国を生きた謝介石について

金 斑実（商丘師範学院／神奈川大学訪問研究員）

要旨

「満洲国」へ赴いた台湾出身者の研究は忌避されていたが、その後、日本植民地下の台湾、ないしは日本、そして「満洲国」で高等教育を受けた人たちの研究が開始された。しかし、「満洲国」成立以前に中国本土での政治活動を行った謝介石は「満洲国の台湾人」を論ずる場合は例外的な存在で研究は限られている。そこで、本稿は「満洲国」の初代外交部総長で、「日本大使」も務めた台湾・新竹の生まれの謝介石の一生を追いかけたものである。謝介石は台湾生まれ、日本、中国本土を歩き来しながら、清国、民国、偽満洲国、中華人民共和国を生きた人物である。日本の工作により中国大陆ではいくつかの団体、傀儡政権まで作られたが、その中で、謝介石が「日中の架け橋」として登用されており、謝介石も複雑な時代と環境でうまく利用しながら生き抜いてきた「幸運な人」である。日本植民地下の台湾を、満洲を、そして日本、中国を謝介石の内面ではどのように位置づけていたか不明であるものの、史料記載の事実から彼の立場を判断できるであろう。

キーワード： 日本植民地、傀儡政権、謝介石

はじめに

「満洲国」の初代外交部総長で、「日本大使」も務めた謝介石は、台湾・新竹の生まれである。このことを知ったのは、25年前の偽満洲国教育を研究し始めた時であった。吉林省档案馆で吉林外国語学堂（1907.5～1909.7）を調べている時に日本語教師として名前が挙がっていた。いわゆる「清国のお雇い日本人」として雇われていたのである。実際汪向荣著¹⁾では、謝介石が担当した科目が英語になっており、その後も彼の履歴に関して調べてもなかなか史料が見つからなかった。また、台湾では「満洲国」の初代外交部総長（実権は外交部次長の大橋忠一が握っていた）で、日本大使も務めた謝介石のような人物について嘗てタブーだとされ、検討されることはなかった。清国時代乃至は日本統治下の台湾に生まれた人という意味でやはり忌避されるテーマであったのであろう。二十世紀に入り、ようやく許雪姬²⁾（中央研究院近代史研究所）の研究があり、謝介石を考察する基礎資料が提供された。本研究では、先行研究が触れていない吉林省档案馆史料『吉林外国語学堂』、満洲房産株式会社関係史料とライフヒストリー『台湾人在満洲国』も検討にいれ、謝介石

の一生を追っていく。よって、謝介石という人物の真像に近づけるのではないと思われる。

1. 台湾生まれ

謝介石は1879年、台湾・新竹の生まれ、原籍は福建惠安である。幼年時代明志書院で三年間伝統的教育を受けており、漢文の基礎がしっかりできていた。台湾は下関条約の締結より日本に割譲される。新しい支配者である日本は、従来の書房教育を抑制し、その代わりとして国語伝習所、国語学校、実業学校などの植民地教育機関を創設した。そこで、1896年に新竹に設立された竹城学館（元明志書院を利用したもので、後に新竹国語伝習所に改名）に入学した。国語伝習所は日本語教員養成のための速成学校である。1897年卒業し、7月新竹県雇いとなり、同年12月に知事官房通訳勤務となった。同月、知事の上京に随行し日本を訪問している。1900年4月台北県新竹公学校学務委員、同年7月新竹弁務署雇員となり、同年8月に軍役志願者募集官属を命じられた。

2. 日本に渡る

日本人官吏である里見庁長の推薦を受けて1904年に東京へ渡る。東洋協会専門学校（後の拓殖大学）で台湾土語³⁾を教えた。日清戦争によって日本が台湾を領有した明治28(1895)年から3年を経た明治31年に台湾経営を支援する民間団体として台湾協会が発足されるが、それが拓殖大学の母体となる。4月2日の台湾協会発起会で、10項目の「目的及び事業の要」の中に「彼我言語練磨上の便を図る事」が掲げられるが、その「彼我言語」とは台湾土語と日本語になる。9月16日、政財界の要人を集めて台湾協会設立の主旨説明を行った会頭桂太郎は、「台湾語並びに本邦語の練習の便利を図る」と明言した。また幹事長水野遵も同日の演説で台湾語の練習が必須であると実例を挙げて力説した。こうして協会は人材の養成を台湾経営の最重要課題と考えていた桂と、言語疎通の重要性を熟知していた水野のリーダーシップにより、表面上は実業主体を掲げながらも着々と教育事業に傾注していったのである。明治33年4月5日の台湾協会評議員会では、再び「植民学校設置」が審議され、同月19日に第1回調査委員会が開催され、学校の設置は実質上、この委員会で決定された。翌5月26日の協会第2次総会の席上で、協会学校設立の具体案が満場一致で承認された。学校設立の正式決定は7月25日の評議員会であった。こうして同年9月、「台湾及南清地方ニ於テ公私ノ業務ニ従事スル」（台湾協会学校校則第1条）人材の養成をめざす台湾協会学校が創設された。

東洋協会専門学校で台湾土語を教えた教員は初代の林拱辰を含めて計7名であった。謝介石は1904年10月から1906年9月まで東洋本校で台湾土語教師として、台湾に派遣される日本人官吏に台湾土語を教えていた。

謝介石は台湾土語を教えながら、1904年に明治大学専門部に入学し、1908年に卒業する

が、詳細については今のところ、明らかではない。

3. 清国吉林に渡る

20世紀初頭には多くの日本人が学務顧問或は教師として中国に招かれ、各分野で活躍した。彼等は「日本人教習」或は「日本教習」と呼ばれ、一時は数百人を超える盛況ぶりであった。教習の中には服部宇之吉、渡辺龍聖、吉野作造、藤田豊八、松本亀次郎、川島浪速、長谷川辰之助（二葉亭四迷）、戸野美知恵などのように、その後各方面で活動した人物も少なくない。当時このように多数の日本人教習が招かれたのは、中国が「日本モデル」の教育の近代化を志し、その事業を補佐する人材を日本に求めたことに由来する⁴⁾。

当時、吉林省に派遣された人⁵⁾として、表1の人物が挙げられる。

地域	学校	教師名	担当科目	出身地&出身校
吉林 長春	吉林法政館	木村欽二	日本語	台湾新竹庁の人
	外国語学校	謝介石		
	中等実業学堂	中村速一		
		加知貞一郎	教育学	東京高等師範学校卒業
	農業実業学堂	峯簇良充		
	女子師範学堂	峯簇操子	理科、体操、音楽	

表1 吉林省に派遣された日本人教習

1903年12月に吉林將軍達桂は官紳13名を日本に派遣し、政治速成科を学習させた。1907年に、吉林將軍達桂は吉林外国語学堂（1907.5～1909.7）の設立を上奏した⁶⁾。同年5月に設立され、翰林院編修の貴鈺が監督になるが、「吉林一角は日本と露西亜が迫る所である。現在、商埠が開放しているところで、列強が当地の周辺に集まり、交渉が日々頻繁になる」ために設立した学校である。設立当時は日本語、英語、露西亜語を教えていたが、1908年5月に満蒙語を追加し、学校名も吉林方言学堂に改名した⁷⁾。

謝介石がいつから吉林に渡ったかはっきりしないものの、本調査は1909年のものであるため、少なくともその時は吉林にいたことは確かである。史料の制限よりか、許雪姫の研究ではこれについては言及しておらず、現在までの研究では大体次のようである。

「明治大学の同窓にいた張勳の息子と親しくなり、この縁で中国大陆に渡って張勳の法律顧問となった。清朝滅亡後は吉林法政学堂教習兼吉林都督府政治顧問となり（この時は謝愷と名乗った）、吉林にいた日本人と共に中日国民協会を立ち上げている。」⁸⁾

謝介石は17歳に国籍を日本籍に変えたということから、台湾出身で、漢文と日本語に堪能な彼を「日本人教習」として派遣されるのも当たり前であろう。

4. 民国天津に渡る

1914年に天津日本総領事館に申請して日本国籍を放棄し、翌年に中華民国国籍を取得した。袁世凱政権下で要職に就いた張勳（清末民初の軍人・政治家。革命後も清朝に忠節を尽す）に従って出世する。1917年7月、張勳・康有為らが溥儀を擁して画策した復辟運動に関わり、外交部官員となる。徐州と天津を往復し、張勳と接触していた謝介石は張勳復辟時の事を日本公使館員に伝えている。

復辟問題ニ関シ徐世昌ハ昨年末陸宗輿ヲ使トシ其ノ意見ヲ張勳ニ通シ右ノ條件を提出シタリ

一、宣統帝ヲ復位スルコト

二、徐世昌輔政王トナリ其下ニ責任内閣ヲ設ケ大政ヲ綜理シ帝位ハ単ニ虚設トシ徳川氏ト朝廷トノ関係ノ如クスルコト

三、輔政王ハ終身トシ其ノ繼承ハ金匱石室ノ例ニ依リ豫メ自ラ三名ノ候補者ヲ定メ置クコト（其子ヲ以テ之ヲ嗣ガシムルノ意ニ出ツ）

四、徐世昌ノ女ヲ以テ皇后トスルコト

等ナリキ張勳ハ之ヲ聞キ始メテ徐世昌ノ私心スクノ如ク迄深キモノアルニ驚キ是レ全ク徐世昌ノ復辟ナリトシ人臣ニシテ輔政王タルハ大不題タルコト殊ニ其ノ終身タルハ何レモ臣下自ラ豫メ之ヲ定ヘキモノニアラザルコト帝位ヲ虚設トスルコトモ帝ノ成長其他ノ事情ニ依リ一定ス可ラザルコト其女ヲ皇后トスルコトハ満漢融和ノ為強テ反对セザルモ是亦臣下ノ専断ヲ許サザルコト等反对ノ理由ヲ述ベ要スルニ右ハ徐一姓ノ復辟ニシテスル條件ノ下ニ復辟実行ニ賛同スルコト能ハザル旨ヲ答ヘ陸宗輿ヲシテ之ヲ徐世昌ニ通セシメタリ⁹⁾

など、伝えた内容の詳細の記録は八枚にも上っている。

5. 奉天に渡る

外務省外交史料館には『謝介石』という史料名での記録がある。それは『戦前期外務省記録 宣伝関係雑件／嘱託及補助金支給宣伝者其他宣伝費支出関係／外国人ノ部 第一巻 謝介石 大正08年12月27日』である。その中に最初の件名が「謝介石利用ニ関スル件」である。

本件ニ関シ別紙甲号写ノ通林閣東長官ニ申進シタル処乙号写ノ通黒事務官ヨリ回答有之候ニ付盛京時報社長中島眞雄トモ十分諒解ヲ得タル且別紙両号写ノ如キ契約書ヲ盛原時報社長ヨリ謝介石ニ交件セシメ謝ハ之ヲ張作霖ニ示シ盛京時報ニ執筆スル傍ヲ漸次張作霖ニ取入ラントスルモノニテ若シ其ノ目的ヲ達シタル且ハ相当役ニ立

ツヘキ方ト思考致候処目下中島社長鎌倉ニ滞在中ニ付至急同人ニ謝トノ契約ヲ同意書セシムル様御取計相成度尤モ該契約ハ謝カ張作霖ニ取入ル方便トシテ仮ニ定メタルモノニテ時報トハ之カ為何等権義関係ヲ生センメサル事ニ付@@中島ニ含メ同人承諾ノ上ハ同人ヨリ盛京時報社ニ直ニ電報スヘキ様併セテ御示達方御取計相煩度¹⁰⁾

張勳復辟以降、督軍署外交顧問である謝介石は吉林側、奉天側の信頼されていた。また日本も彼をよく利用するため、お金の面から仕事の面まで便宜を図ってあげたのである。また、「民報」に関しても謝介石について述べている。日本が利用している謝の親戚である松毓一派の新聞を買収して排日新聞に対応していたことがわかる。

以上から、日本は謝をうまく利用して中国官僚の取り組み、情報操作に有利に働かせたのである。謝も日本に利用されることも納得したであろう。また、1925 年以降は鄭孝胥（清朝において、大阪総領事・総理衙門章京・京漢鉄道南段総弁・広東按察使・湖南布政使等を歴任）・羅振玉（清末民初から満洲国にかけて活動した考古学者・教育者。溥儀の家庭教師を務め、満洲国参議府参議に任命され、後に日満文化協会会長も務めている。）らと連絡を取り合う。

帝政復活を諦めきれない溥儀は日本軍を後ろ盾にすることを考えており、鄭孝胥やとりわけ日本語が流暢で外交活動の経験がある謝介石を重用した（彼は 1927 年に溥儀の謁見を受けた）。上記によって、謝介石が後に満洲国の政界で活躍できる道を確保されたと思われる。

6. 「満洲国」長春に渡る

1931 年の満洲事変に際しては吉林にいた熙洽の配下として政治工作を行ない、翌 1932 年に「満洲国」が建国されると外交部総長（外務大臣）に任命された。在任中にはリットン調査団、日満議定書、溥儀の訪日といった出来事があった。1935 年、日本との外交関係が公使級だったところを大使級に格上げされた際に、謝介石は外交部総長を辞任して初代駐日大使に就任する。

同年、「台湾始政四十年記念博覧会」参観という名目で台湾へ帰る。故郷・新竹の名望家の娘と長男との結婚も理由の一つだったらしい。いわば「故郷に錦を飾る」という感じであろう。日本人優位の植民地体制の中で台湾人は逼塞した思いを抱え込んでいた中、謝介石が満洲国皇帝の名代として日本人の台湾総督から恭しく迎えられるのを目の当たりにして、海外へ行って一旗あげようと意気込んだ青年もいた。そうした台湾人を謝介石も引き立てた。溥儀の係付けとなった黄子正は謝の紹介によるし、外交部に就職した台湾人も少なからずいた。台湾人か日本人かを問わず、台湾関係者が満洲国でツテを求める際には謝介石に頼った。

7. 長春と日本を行き来する

今までの謝介石に関する言及では、「謝介石は1937年に公的活動から引退。一時、東京で暮らしたが、満洲房産株式会社という国策会社の理事長として再び満洲国に戻る」と記述されている。つまり、満洲国政界から離れたとは言えない。それは、満洲房産株式会社は、「満洲国」において住宅建設および不動産金融を展開した「国策住宅供給機関」であるからである。

1938年2月の創立総会では、理事長に元満洲国初代外交部総長ですでに官界を引退していた謝介石が任命され、副理事長には蒙疆銀行副総裁の山田茂二（元満中銀計算課長、国庫課長）が内定された。1942年4月満洲国政府は臨時株主総会の定款変更決議を認可し、満洲房産株式会社法を改正した。謝介石が理事長を辞任し、新たに山田茂二が理事長に就任するとともに、満洲国政府から満洲房産株式会社職制改正の認可を受けた¹¹⁾。

以上から、1941年3月まで国策会社である満洲房産株式会社の理事長として君臨していたことは確かである。

8. 北京で一生を終える

戦後の謝介石の足跡については、Wikipedia等では「日本の敗戦により満洲国が瓦解すると漢奸として逮捕され、その後北京の獄中で病死した。」とされており、また、史料が乏しく遺族への慮りからはっきりし評価などはされていない。

『台湾人在満洲国』¹²⁾によると、1949年1月中国共産党軍が北京に入城し、「父の話によると国共両方、国民党老蔣が私を逮捕し、共産党が私を釈放した」と謝介石の次男（謝白倩）が話している。「(中国)建国前の謝介石の三男（謝津生）が地下共産党の身分」であり、また、「当時地下共産党の責任者を家にかくまったことがあることから、その責任者が次の日に謝介石を釈放したとしている」と謝介石の孫・謝輝が話している。また、「漢奸」ではないと家族は述べている。1937年以前に偽満政府を離れていることから戦犯ではなく（謝介石の孫・謝孟姑）、また国民党が「漢奸」と断罪しても本人は様々な証拠を出して釈明できる（謝介石の孫・謝輝）と訴えている。

おわりに

謝介石は台湾生まれ、日本、中国本土を行き来しながら、清国、民国、偽満洲国、中華人民共和国を生きた人物である。日本の工作により中国大陆ではいくつかの団体、傀儡政権まで作られたが、その中で謝介石などが「日中の架け橋」として登用されており、謝介石も複雑な時代と環境でうまく利用しながら生き抜いてきた人である。台湾を、満洲を、そして日本、中国を謝介石の内面ではどのように位置づけていたのであろうか。彼の歩んだ道を辿ると史料記載の事実から彼の立場を判断できるのであろう。さらに彼に関する史料を多く発掘して総合的に判断されたい。

注

- 1) 汪向荣 (1991) 『清国のお雇い日本人』朝日新聞社、p. 125。
- 2) 許雪姬 (2007) 「是勤王還是叛國——「滿洲國」外交部總長謝介石的一生及其認同」《中央研究院近代史研究所集刊》57 期、pp. 57-117。
- 3) 台湾協会『臺灣協會會報』から辿って言及する。
- 4) 阿部洋 (1990) 『中国の近代教育と明治日本』福村出版、pp. 136-137。
- 5) 汪向荣 (1991) 『清国のお雇い日本人』朝日新聞社、p. 125 (ここでは、謝介石が担当した科目が英語になっているが、吉林省档案馆所蔵の档案「J35 吉林方言学堂」を調べた所、実際日本語を教えていたことがわかった。)
- 6) 吉林省教育志編纂委員会教育大事記編写組 (1989) 『吉林教育大事記』第一卷、吉林出版社、p. 7
- 7) 吉林省档案馆所蔵 档案 J35 「吉林方言学堂」
- 8) 許雪姬 (2007) 「是勤王還是叛國——「滿洲國」外交部總長謝介石的一生及其認同」《中央研究院近代史研究所集刊》57 期、pp. 63
- 9) 外務省外交史料館国内政関係雑纂/支那ノ部/復辟問題第二卷 1917 年 6 月 21 日「謝介石談 6 月 17 日 林權助公使」1-6-1-4_2_11_002
- 10) 外務省外交史料館新聞雑誌操縦関係雑纂/機密公第八四号/外務大臣子爵内田康哉殿「謝介石利用ニ関スル件」「10. 謝介石」大正 08 年 12 月 27 日 1-3-1-35_1_2_001
- 11) 満洲房産株式会社『第五期營業報告書』1942
- 12) 『台湾人在満洲国』(台湾中天テレビ 2013)

参考文献

- 阿部洋 (1990) 『中国の近代教育と明治日本』福村出版。
- 汪向荣 (1991) 『清国のお雇い日本人』朝日新聞社。
- 拓殖大学創立百年史編纂室 (編) (2011) 『東洋文化協會五十年史稿：台湾・東洋協會研究』拓殖大学。
- 金珽実 (2014) 『満洲間島地域の朝鮮民族と日本語』(比較社会文化叢書 Vol. 32) 花書院。
- 金珽実 (2017) 『満洲・間島における日本人—満洲事変以前の日本語教育と関連して』花書院。
- 吉林省教育志編纂委員会教育大事記編写組 (1989) 『吉林教育大事記』第一卷、吉林出版社。
- 許雪姬 (著)、羽田朝子、殷晴、杉本史子 (訳) (2021) 『離散と回帰 「満洲国」の台湾人の記録』(台湾學術文化研究叢書) 東方書店。
- 中見立夫 (2002) 「“様々な”満洲国”体験—満洲国の外交官と満洲国へ行った台湾人」『近現代東北アジア地域史研究会ニューズレター』14、3-25 頁。
- 羽田正貴 (2006) 「1920 年代ハルピンにおける取引所設立問題」『Newsletter / 近現代東北アジア地域史研究会第 18 号、1-29 頁。

許雪姬（2007）「是勤王還是叛國——「満洲国」外交部総長謝介石的一生及其認同」《中央研究院近代史研究所集刊》57期、57-117頁。

平山剛（2011）「満洲における国策住宅供給機関の実証実験」社会経済史学会 第80回全国大会。

平山剛（2012）「満洲房産株式会社の住宅供給事業」『アジア経済』53(5)、55-90頁。

華京碩（2012）「満洲における日本人経営漢字新聞に対する日本の外務省の関与について——『盛京時報』と外務省との関係を中心に」『日本マス・コミュニケーション学会・2012年度秋季研究発表会・研究発表論文』。

長谷部茂（2014）「明治・大正期における拓殖大学草創期の台湾語教育について」『拓殖大学語学研究』第131号、121-147頁。

吉林省档案館所蔵 档案 J35「吉林方言学堂」。

外務省外交史料館新聞雑誌操縦関係雑纂「1-3-1-35_1_2_001」「1-6-1-4_2_11_002」。

台湾中天テレビ（2013）『台湾人在満洲国』。

About Xie Jieshi Who Lived Through the Qing Dynasty, Japan, the Republic of China, the Puppet Manchukuo, and the People's Republic of China

JIN, Tingshi

Abstract

Researches on Taiwanese origin who migrated to the "Manchukuo" were once shunned. Subsequently, however, investigations into individuals who received higher education in Taiwan under Japanese colonial rule, or in Japan and the "Manchukuo" were set in motion. Nevertheless, Xie Jieshi, who had engaged in political activities on China's mainland prior to the establishment of the "Manchukuo", presents an exceptional case when it comes to the discourse on "Taiwanese in the Manchukuo", and research on him remains rather circumscribed. In light of this, this research undertakes a chronological exploration of the life of Xie Jieshi, a native of Hsinchu, Taiwan, who served as the inaugural Chief of the Foreign Ministry of the "Manchukuo" and also took on the role of "Ambassador to Japan". Born in Taiwan, Xie Jieshi traversed between Japan and China's mainland, thus experiencing the eras of the Qing Dynasty, the Republic of China, the Puppet Manchukuo, and the People's Republic of China. Through Japan's machinations, several organizations and even puppet regimes were fabricated on China's mainland. Among these, Xie Jieshi was enlisted as a "bridge" facilitating exchanges between Japan and China. He can also be regarded as a "fortunate individual" who managed to endure by deftly capitalizing on the convoluted historical context and the complex milieu. While it remains ambiguous as to how Xie Jieshi internally positioned Taiwan under Japanese colonial rule, Manchuria, Japan, and China, his

stance can presumably be inferred from the historical records and documented facts.

Keywords : Japanese Colonial Territory, Puppet Regime, Xie Jieshi

フフホト日本人居留民の経済活動に関する考察（1937－1945）

王 鶴琴（内蒙古大学）

要旨

1937年10月に日本軍が帰綏県を占領した後、帰綏県は12月1日に厚和市と改名された。1938年3月10日、「厚和豪特日本居留民会」が日本人居留民を管理する自治的機関として設立され、厚和における日本人居留民が一連の社会活動を展開するための基盤となった。日本政府もまた、この居留民会を通じて、厚和に住む日本人居留民を国家の枠組みに組み込み、彼らの帝国臣民意識を強化することを目指した。

本稿では、日中両国の関連史料を集め、「厚和豪特日本居留民会」とその経済活動を考察の対象とし、日中戦争期におけるフフホトの日本人居留民会の概要、人口と職業構成、さらに日本人居留民の経済活動について論述する。それによって、当時のフフホトにおける日本人居留民が日中戦争で果たした役割とその影響を明らかにする。

キーワード： フフホト、日本人居留民、経済活動、日中戦争

はじめに

近代中国における日本人居留民に関する研究成果は、主に上海、天津、青島、済南、北京、厦門、そして東三省などに集中している。民国時期の内モンゴル地域、特にフフホトに関する日本人居留民の研究は極めて少ない。既に発表された国内外の関連研究の中では、フフホト¹⁾（当時は厚和と略称）の日本人居留民に関する小林元裕の研究が最も代表的である。彼は自分の著書『近代中国の日本居留民と阿片』の「蒙疆と日本居留民」という章と、内田知行と柴田善雅の共著『日本の蒙疆占領：1937-1945』の「蒙疆の日本人居留民」という章では、それぞれ蒙疆地域における日本人居留民の活動状況、移動状況、社会構成、教育状況について紹介した。しかし、小林氏の研究は蒙疆地域の日本人居留民の活動そのものではなく、阿片生産地としての蒙疆と阿片販売市場である天津の間で果たした日本人居留民の役割に関する問題である。従って、本稿ではこの研究を基礎とし、日本アジア歴史資料センターなどの関連アーカイブ、また『蒙疆新聞』、回顧録、地方誌などの史料を活用して、日中戦争期におけるフフホト日本人居留民会とその経済活動をより深く考察する。

1. 居留民会の概要

1937年10月に日本軍が帰綏県を占領して以来、フフホトの日本人居留民数は急速に増加し、1938年3月までにその数は800人以上に達した。居留民数の急増に伴い、子どもたちの教育需要も急激に高まったため、1938年3月8日に「厚和日本居留民会」が設立された。厚和日本居留民会には固定的な行政権はなく、日本外務省の機関である厚和領事館の監督下にある「自治団体」として機能していた。厚和日本居留民会の設立は、厚和における日本人居留民社会の形成における重要な節目であった。

居留民会の活動は、会長の組織力と統括力に支えられていた。歴代の会長には藤中弁輔、大園長喜、小島育男、森一郎、照山虎寿、石橋秀雄、土屋博愛が就任した²⁾。初代会長の藤中弁輔は1885年に日本の山口県で生まれ、日本陸軍士官学校を卒業し、日露戦争に参加した後、1934年に日本善隣協会に入り、内モンゴルで多くの役職を歴任した³⁾。第3代会長の小島育男は1905年に広島県で生まれ、居留民会長に就任した際には厚和市公署主任顧問を兼任していた⁴⁾。第4代会長の森一郎は1909年に佐賀県で生まれ、京都帝国大学東洋史学科を卒業し、満洲国民生部警務司や司法科、磐石県警正などを歴任した⁵⁾。第6代会長の石橋秀雄は1900年に福岡県で生まれ、久留米商業や三井京城支店に勤務し、フフホトでは三井物産の専任担当者を務めた⁶⁾。第7代会長の土屋博愛は1893年に和歌山県で生まれ、中学卒業後、外務理事官を務めた⁷⁾。

「厚和豪特日本居留民会」は、日本軍が帰綏県を占領し、傀儡政権を樹立した後、日本人居留民が増加する中で設立された。居留民会は自治的な行政機関であるため、厚和日本領事館や領事館警察署、そして駐蒙軍の管理と指導の下で活動していた。居留民会の設立は、後に日本人居留民がさまざまな社会組織を立ち上げるための基盤となった。日本政府もまた、領事館などの公式機関や居留民会を通じて、フフホトに住む日本人居留民を国家体系に組み込み、彼らの生活をあらゆる面で干渉と管理し、帝国臣民としての意識を強化することを目指していた。

2. 人口と職業構造

2.1 人口

蒙疆地区における日本人居留民の人口の増減は、日本軍の侵略活動と直接的な関係がある。日本は1922年に張家口に領事館を設立して以降、1935年まで日本人居留民の数は常に20～30人程度の規模に留まり、人口の増加は停滞していた⁸⁾。しかし、1935年に日本軍が華北および内モンゴルの中西部へ進出を続けるにつれ、張家口の日本人居留民数は1936年に736人に達した⁹⁾。1937年に日中戦争が全面的に勃発し、日本軍が張家口を占領し、蒙疆政権が設立されると、日本人居留民の数は急増し、1938年には4773人に達した¹⁰⁾。同様の現象は、大同、呼和浩特、包頭でも見られ、これらの都市でも日本軍が占領すると、日本人居留民の

数は急速に増加した。

1937 年 10 月 10 日に日本軍がフフホトを占領して以降、日本人居留民の数は急増し、1945 年 8 月に日本軍が撤退するまでの人口変動は以下の通りである¹¹⁾。

	男	女	合計
1937 年	—	—	7
1938 年	938	719	1657
1939 年	2254	1356	3961
1940 年	3040	2047	5671
1941 年	2849	2192	5457
1942 年	2937	2284	5599
1943 年	2732	2267	5433
1944 年	2444	2145	5013

表 1 厚和管内日本人居留民数 (1937-1944 年)

1937 年から 1940 年までの 4 年間、フフホトの日本人居留民の数は急速に増加し、これはフフホトの蒙疆における政治的地位の向上と密接に関係していた。1940 年には、日本人居留民数は 5671 人でピークに達したが、1941 年からは人口増加が急に鈍化し、ほぼ横ばいの状態が続いた¹²⁾。1943 年からは人口が毎年減少し始めた。日本人居留民の人口増加が急に停滞した理由は 4 つある¹³⁾。

- ①日本の大商社は多くが厚和に支店を開設していたが、それらはフフホトの日本人居留民向けに生活必需品を販売する単方向の事業に限られていた
- ②日本が蒙疆地区で推し進めた貿易統制と厳格な外為管理により、フフホトの日本の中小事業者は資金繰りが悪化し、経営がうまくいかなかった
- ③1940 年に日本政府が来華制限令を發布し、非政府関連の事業による来華申請を制限したため、商業の発展が制約を受け、居留民数の増加が鈍化した
- ④1943 年 10 月 1 日に日本の大東亜省が中国駐在機関の調整を理由に厚和総領事館を領事館に格下げし、フフホトの政治的地位が低下した一方で、張家口の地位が上昇した。この都市の政治的地位の変化も、フフホトにおける日本人居留民数の停滞や減少の一因となった。

2.2 職業構造

フフホトに最初に入ってきた日本人居留民の多くは、軍隊と共に移動した宿泊業者（旅館 3 軒）、飲食店（1 軒）、料理店（2 軒）、雑貨店（1 軒）と、36 人の特殊業界の女性（芸者、接客婦、酌婦など）であり、彼らは主に日本軍兵士の日常生活を支えるための存在であった

14)。蒙疆政権と蒙古連盟自治政府の設立に伴い、居留民によるフフホトでの商業規模は拡大し、1939年2月までにフフホトでの日本人居留民による営業業種は38種類に及んだ。これには、飲食店16軒、料理店12軒、土木建設業10社、旅館業8軒、その他58業種、合計104業種が含まれていた¹⁵⁾。

1939年のフフホト日本人居留民の職業構成の統計によると、会社員、銀行員、商店員が最も多く、彼らの多くは東洋拓殖株式会社などの日本系企業や蒙疆銀行などの蒙疆政権によって設立された特殊あるいは準特殊会社で働いていた。次に多かったのは土木建設業で、1938年から1940年にかけて日本人居留民の人口が急増したため、彼らの居住環境を整える必要があった。このため、厚和市公署は「厚和都市計画委員会」を設立し、日本人居住区、商店街、文化娛樂施設、新たな日本領事館などの建設を計画した¹⁶⁾。さらに、第三に、蒙古連盟自治政府や厚和市公署などの各級政府機関には、日本人官吏が顧問として勤務し、各部門の最高権力を掌握していた。

3. 経済活動

日本軍がフフホトを占領する前、日本のこの地域における貿易活動は極めて少なかった。しかし、蒙疆政権が設立された後、日本の商人や日系資本が大量に蒙疆に流入した。これには、大蒙公司や東洋拓殖株式会社など政府や軍の背景を持つ企業だけでなく、日本人の日常生活を支えるための様々な日本の小売業者も含まれていた。

1937年10月に日本人居留民が日本軍と共に帰綏に入り、居留民の商業活動は急速に成長し始めた。1938年1月、フフホトの日本憲兵隊が行った統計によると、この時期の日本人居留民による商業活動の規模は小さかったが、布教所、医師、豆腐製造業、洋品雑貨商、軍警用品商、旅館、スナック、料理店、新聞、靴類販売、レストラン、洗濯店など、食住に関わる多岐にわたる業種が含まれており、初期の日本僑民の生活ニーズを概ね満たしていた¹⁷⁾。

フフホトにおける日本人居留民の急増に伴い、一方では居留民の日常生活を支えるための商店、例えば服装店や雑貨店が急増した。他方で、日本国内の資源不足により、占領地で「物資統制」政策が推進され始めた。フフホトでは、蒙疆政権の「特殊会社」や「準特殊会社」が中心となり、東洋拓殖株式会社などが現地に分店や工場を設立し、日本人居留民の商業活動が形成された。この商業活動の促進を図るために、日本人居留民の経済団体「厚和市日本商工会」が1940年4月に設立された。この組織は、情報交換や地域内の工業や商業の統計作業などを行う法人資格を有しており、フフホトにおける日本人居留民の商業活動に貢献した。この商工会は設立時に会員資格に制限を設けておらず、下層の日本人商工業者も会員として加入できた。

『蒙疆年鑑』によると、1941年12月までに「厚和市日本商工会」の会員数は68社に達しており、特殊会員9社、普通会员59社に分かれていた¹⁸⁾。普通会员は貿易商7社、食品・雑貨商12社、菓子・時計・楽器商8社、洋服・呉服・家具・洋貨商9社、軍需品商・電気

製品商・鉄工・自転車商 10 社、書籍・雑貨・薬品商など 13 社が含まれていた。特殊会員の多くは特殊会社や準特殊会社であり、普通会员は主に雑貨商や小売商で、これらの商店は主にフフホトの日本人居留民の日常生活を満たすために営業していた。商業の中心地は、民国時代から商業が繁栄していた帰化城に集中していた。

おわりに

1937 年 10 月に日本軍が帰綏県を占領した後、日本人居留民が大量にフフホトに流入し、「厚和日本居留民会」が日本人居留民を管理する自治的な機関として設立された。会長は主に日本人官吏や会社背景を持つ人物が務めた。居留民会は自治的な性質を持つ行政機関であったため、厚和日本領事館の管理と指導のもとで活動を行う必要があった。厚和日本居留民会は、厚和における日本人居留民がさまざまな社会活動を展開するためのプラットフォームである、基盤となった。その中で「厚和日本商工会」が誕生し、フフホトで経済活動を行っているほとんどの日本人居留民を会員として取り込み、彼らの経済活動を支援する役割を果たした。

注

- 1) kükeqota (すなわちフフホト) という名称は、明の万暦 36 年から 40 年頃に成立したとされるモンゴル語の史料『俺答汗伝』に初めて登場する。漢文史料では「哈喇河套」、「呼和浩特」、「庫克和坦」、「庫庫浩特」、「庫庫河屯」、「胡胡和屯」、「庫庫和屯」、「庫克和屯」などと表記され、これらはいずれもモンゴル語「kükeqota」の音訳異体である。明の万暦 3 年（1575 年）には「帰化城」という名称が与えられた。清の乾隆 2 年（1737 年）、帰化城の北東約 5 里の場所に駐屯地が建設され、「綏遠城」と命名された。1913 年に帰化城と綏遠城が合併し「帰綏県」となり、1929 年には綏遠特別行政区が綏遠省に改編され、帰綏県がその省都となった。1937 年に帰綏県は「厚和浩特市」と改称され、1945 年には「帰綏市」に戻された。そして 1954 年 4 月 25 日、帰綏市は「フフホト市」に改名され、内モンゴル自治区の首府となった。
- 2) 筆者は株式会社蒙疆新聞社の『蒙疆年鑑 1941 年版』、『蒙疆年鑑 1942 年版』、『蒙疆年鑑 1943 年版』、『蒙疆年鑑 1944 年版』をもとに整理を行った。
- 3) 善隣会編『善隣協会史——内蒙古における日本人活動』、日本蒙古協会、1981 年、43-44 頁、314 頁。
- 4) 「大厚和居留民會の初の選良決まる」、『蒙疆新聞』、1939 年 5 月 21 日。
- 5) 株式会社蒙疆新聞社『蒙疆年鑑 1941 年版』、40 頁。
- 6) 株式会社蒙疆新聞社『蒙疆年鑑 1942 年版』、4 頁。
- 7) 株式会社蒙疆新聞社『蒙疆年鑑 1943 年版』、36 頁。
- 8) 内田知行、柴田善雅『日本の蒙疆占領：1937-1945』、205 頁。
- 9) 注 8) と同じ。

- 10) 注 8) と同じ。
- 11) 筆者は『北支経済統計季報』第 5 号、南満鉄道株式会社調査部、1939 年 7 月、84-89 頁；「厚和管内邦人人口」、『蒙疆新聞』、1939 年 1 月 21 日；内田知行、柴田善雅『日本の蒙疆占領：1937-1945』、214-216 頁；株式会社蒙疆新聞社『蒙疆年鑑 1944 年版』、275 頁をもとに統計を整理し作成した。『蒙疆年鑑』1944 年版には、1940 年の邦人人口が 6000 人に達したと記載されている。
- 12) 株式会社蒙疆新聞社『蒙疆年鑑 1944 年版』、275 頁。
- 13) 王鶴琴（2023 年）『抗日戦争期における「厚和浩特」日本人居留民研究』内蒙古大学修士論文、23 頁。
- 14) 「各種営業許可状況」、『厚和特別市公署市政月報』、1938 年第 3 期。
- 15) 「飲食店が最多一厚和の邦人職業別」、『蒙疆新聞』、1939 年 2 月 1 日。
- 16) 注 5) と同じ、262 頁。
- 17) 注 14) と同じ。
- 18) 注 6) と同じ、435－436 頁。

参考文献

- 内田知行、柴田善雅（2009 年）『日本の蒙疆占領：1937-1945』、研文出版。
- 小林元裕（2012 年）『近代中国の日本居留民と阿片』、吉川弘文館。
- 高綱博文（2009 年）『「国際都市」上海のなかの日本人』、研文出版。
- 陳祖恩（2009 年）『上海日僑社会生活史』、上海辞書出版社。
- 万魯建（2010 年）『近代天津日本僑民研究』、天津人民出版社。
- 森久男（2009 年）「関東軍の内蒙工作と大蒙会社の設立」『中国 21』、47-70 頁。
- 包慕萍（2008 年）「殖民地時期の都市計画と技術者の流動—フフホト、長春、大同の都市計画比較」『中国近代建築研究と保護（六）』、第 561-570 頁。
- 王夢融（2020 年）『日本語新聞「蒙疆新聞」研究：1938-1943』内蒙古大学修士論文。
- 王鶴琴（2023 年）『抗日戦争期における「厚和浩特」日本人居留民研究』内蒙古大学修士論文。

An Analysis of the Economic Activities of Japanese Residents in Hohhot

WANG, Heqin

Abstract

After the Japanese army occupied Guisui in October 1937, Guisui was renamed to Hohokoto on December 1. On March 10, 1938, the "Hohokoto Japanese Residents' Association" was established as an autonomous organization to manage Japanese residents, serving as a foundation for Japanese residents in Hohokoto to develop various social activities. The Japanese government also aimed to incorporate Japanese residents living in Hohokoto into the national framework through this residents' association and strengthen their consciousness as imperial subjects.

This paper collects relevant historical materials from both Japan and China, focusing on the "Hohokoto Japanese Residents' Association" and its economic activities, to discuss the overview of the Japanese Residents' Association in Hohhot during the Sino-Japanese War period, including its population and occupational composition, as well as the economic activities of Japanese residents. Through this, the paper aims to clarify the role and impact of Japanese residents in Hohhot during the Sino-Japanese War.

Keywords : Hohhot, Japanese residents, economic activities, Sino-Japanese War

学会役員

<顧問>

李漢燮(高麗大学・名誉教授)

山泉進(明治大学・名誉教授)

<会長・理事>

李東哲(山東外事職業大学・教授)

<副会長・理事>

安達義弘(日韓言語文化交流センター・
副代表)

権寧俊(新潟県立大学・教授)

崔光准(新羅大学・名誉教授)

杉村泰(名古屋大学・教授)

鄭亨奎(日本大学・特任教授)

李東軍(蘇州大学・教授)

<常任理事>

李昌玟(韓国外国語大学校・教授)

岩野卓司(明治大学・教授)

金光林(新潟産業大学・教授)

金珽実(商丘師範学院・副教授)

崔肅京(富士大学・教授)

施暉(蘇州大学・教授)

李慶国(追手門学院大学・名誉教授)

李先瑞(寧波理工大学・教授)

李東輝(大連外国語大学・教授)

<一般理事>

安勇花(延辺大学・副教授)

飯嶋美知子(北海道情報大学・准教授)

伊月知子(愛媛大学・准教授)

岩野(吉川)佳英子(愛知工業大学・教授)

加藤三保子(豊橋技術科学大学・名誉教
授)

倪瑋(常葉大学・教授)

崔玉花(延辺大学・副教授)

周堂波(武漢理工大学・副教授)

徐瑛(延辺大学・副教授)

宋曉凱(曲阜師範大学・教授)

張維薇(四川大学・副教授)

中川良雄(京都外国語大学・特任教授)

仲矢信介(東京国際大学・准教授)

娜荷芽(内蒙古大学・教授)

任星(厦門大学・副教授)

白曉光(西安外国語大学・副教授)

彭広陸(北京理工大学・教授)

堀江薫(新潟県立大学・名誉教授)

宮脇弘幸(宮城学院女子大学・客員研究
員)

宮崎聖子(福岡女子大学・教授)

李光赫(大連理工大学・副教授)

<事務局>

事務局長

金珽実(商丘師範学院・副教授)

副事務局長

力丸美和(九州大学・助教)

事務局助手

于心(成都東軟学院・副教授)

南明世(北海学園大学・講師)

学会動向

◆「第6回 東アジア日本学研究国際シンポジウム」が中国で開催

2024年9月20日（金）から22日（日）にかけて、中国寧波市の浙大寧波理工学院において国際シンポジウムが開催されました。シンポジウムには154名が参加し、109組による研究発表が行われました（対面は101組141名、オンラインは8組10名）。シンポジウムは盛況のうちに終了し、各発表に対して活発な議論が交わされました。特に、最新の研究成果や実践的な知見に関する意見交換が活発に行われ、分野を超えた有意義な交流の機会となりました。また、質疑応答の場では参加者同士の理解を深めるとともに、新たな研究課題の発見にもつながる場面が多く見られました。

◆第4回 東アジア日本学研究学会役員会がオンラインで開催

東アジア日本学研究学会 2024年度第4回理事会が、2024年10月22日（火）に李東哲会長の司会でオンライン開催され、役員24名が出席しました。会議では、大会の報告や学会誌に関する報告が担当理事より行われ、情報の共有がなされました。また、ホームページの更新や来年度の大会に関する議論も行われ、開催に向けた準備の方向性が確認されました。

◆学会誌第14号への投稿募集

2025年9月発行予定の『東アジア日本学研究』第14号への投稿を募集中です。会員の皆様の積極的な投稿を期待します。締め切りは4月1日（火）の北京時間24:00です。

東アジア日本学研究学会事務局

会員消息

◆新入会員（14名）

暴凶亜（寧波財經学院）、徐穎（山東外国語職業技術大学）、劉洪岩（燕山大学）、詹瑋（閩江学院）、孫蓮花（大連理工大学）、張文穎（北京第二外国語学院）、吳玲（揚州市職業大学）、韓艷麗（長江大学）、孫楊（揚州大学）、林子愉（浙大寧波理工学院）、丸川知雄（東京大学）、郭佳麗（ディップ株式会社）、劉怡（名古屋大学）、杜沁桓（名古屋大学）

◆会員の所属・職位変更

李慶国 追手門学院大学、教授→追手門学院大学、名誉教授

◆書籍出版

李東哲（編著）、井上優・金光林・黃少安・杉村泰・高野晃尚・仲矢信介（著）

『日中韓言語文化比較研究（上）』韓国文化社、2024年12月

※上記の情報は2024年10月1日以降、2025年3月31日までの変動事項です。

東アジア日本学研究学会事務局

東アジア日本学研究学会会則

<名称>

第1条 本会は、東アジア日本学研究学会(The Society of Japanese Studies in East Asia)と称する。

<目的>

第2条 本会は、東アジア地域における日本学の学際的研究をととして、また、それぞれの研究者が研究成果を発表し交換し合うことをととして、学問の進歩及び当該地域の平和的發展に寄与することを目的とする。

<事業>

第3条 本会は、前条の目的を達成するために次の事業を行う。

1. 東アジア地域における日本学を中心とした学際的研究・調査
2. 学会、研究会、講演会及びシンポジウムの開催
(学会における共通言語は、原則として日本語とする)
3. 機関誌及び図書等の刊行
4. 内外の学術団体、研究者との連絡及び学術上の交流
5. その他本会の目的を達成するために必要と認められる事業

<会員>

第4条 本会の会員は、個人会員、賛助会員とする。

1. 個人会員は、東アジア地域の研究に関心を持ち、かつ本会の目的に賛同する個人
2. 賛助会員は、本会の目的に賛同し、本会の事業に協力する法人・団体または個人

第5条 本会には、名誉会員および顧問をおくことができる。名誉会員および顧問は、理事会が推薦し、会員総会の承認を受ける。

<入会・退会>

第6条 本会に入会を希望する者は、理事会に申請し、その承認を得るものとする。

ただし、大学院生は、指導教員の推薦を得ることとする。

第7条 本会を退会しようとする者は、退会を事務局に通告すれば退会することができる。会費を2年間滞納した者は、理事会において承認のうえ、退会とみなす。

<会費>

第8条 会員の会費は、次のように定める。

一般会員	5,000 円
学 生	3,000 円
賛助会員	50,000（1口） 円

<役員>

第9条 本会に次の役員をおく。

1. 会長 1名
2. 副会長 若干名
3. 理事 30名以内（理事のうち若干名を常任理事とする）
4. 事務局長 1名
5. 会計監事 2名
6. その他理事会が必要と認めた役員

第10条 役員の任期は、就任から2年とする。ただし、再任は妨げない。

<役員の職務>

第11条 本会の役員の職務は次のとおりとする。

1. 会長は、本会を代表し、会務を統括する。
2. 副会長は、会長を補佐し、会長に不都合が生じた時はこれを代理する。
3. 理事は、理事会を組織し、会務を審議執行する。理事会の議事は、出席者の過半数により決定する。
4. 事務局長は、会長の指示に基づいて、事務を執り行う。
5. 会計監事は、会計を監査する。

<役員の選出>

第12条 役員の選出は次のとおりとする。

1. 会長は、会員総会において選出する。
2. 副会長・理事は会長が任命する。
3. 会計監事は、会員総会において選出する。
4. その他の役員は、理事会が委嘱する。

<学会誌編集委員会>

第13条 本会は、理事会のもとに学会誌編集委員会をおく。

1. 学会誌編集委員会は、学会誌の出版計画を立案し、これを理事会に提案する。
2. 委員は、個人会員の中から理事会が推薦し、会長が任命する。
3. 委員の任期は、就任から2年とする。ただし、再任は妨げない。

4. 学会誌編集委員会に委員長を置き、委員の中から互選する。
5. 委員長は、学会誌編集委員会の事務を掌理する。

<会員総会>

第14条 本会は、毎年1回会員総会を開催する。

第15条 会員総会では、次の事項を審議決定する。

1. 事業報告及び決算
2. 事業計画及び予算
3. 会長及び会計監事の選出
4. 会則の変更
5. その他の必要な事項

第16条 臨時会員総会は、理事会が必要と認めたとき、または会員の2分の1以上の要望があるときに開催する。

第17条 会員総会の議決は、出席会員の過半数をもって決する。

<会計>

第18条 本会の運営は、会費及びその他の収入で賄う。

1. 本会の会計年度は、毎年4月1日に始まり、3月31日に終わる。
2. 本会の決算は、会計監事の監査を受けなければならない。

<雑則>

第19条 本会の所在地は、〒818-0125 福岡県太宰府市五条2丁目8-8-205とする。

<付則>

1. 本会の設立は、2018年9月1日とする。
2. 本会則は、2018年9月1日から実施する。
3. 本会の運営に必要な事項は理事会が定める。

『東アジア日本学研究』投稿要領

- 1) 『東アジア日本学研究』は、東アジアにおける日本学研究に関する論文・研究ノート・書評などにより構成される。
- 2) 1年に2号（春季号・秋季号）の刊行を原則とする。
 - ・春季号はシンポジウムの論文集とする。毎号シンポジウム終了後3週間以内を目安にその都度締め切りを設ける。
 - ・秋季号はシンポジウムの発表以外の内容も含む学術論文集とする。投稿期間は毎号3月1日から4月1日までとする。
(例：2020年度年会費分の春季号は翌2021年3月、秋季号は翌2021年9月に発行予定)
- 3) 『東アジア日本学研究』に投稿できるのは以下の者および編集委員会で承認した者とする。
 - ・春季号
筆頭著者：会員およびシンポジウムで発表した非会員
共著者：上記の者のほか、シンポジウムで発表していない非会員も可
 - ・秋季号
筆頭著者：会員のみ
共著者：会員のほか、非会員も可
- 4) 投稿者が会員の場合、投稿する当該年度までの会費を投稿前に全て納入しなければならない。投稿者が非会員の場合は、投稿料として会員の年会費相当額を、投稿本数分事務局に納入することとする。（いずれの場合も、筆頭著者だけでなく共著者も同様とする。）
- 5) 投稿者が学生会員の場合は、投稿時に投稿原稿、投稿票とともに、指導教員等による投稿承諾書（100字以内で様式は任意。指導教員等の署名または捺印が必須）を提出しなければならない。ただし、編集委員会が投稿を依頼した者については、これを適用しない
- 6) 投稿原稿は未発表のものでなければならない。投稿者は投稿原稿の不採用が決定される前に当該原稿を他の場所で公刊してはならない。
- 7) 本誌の春季号と秋季号は両方同時に投稿することができる。ただし、両者の内容は異なるものとする。また、一人が一回に投稿できる本数は以下の通りとする。
 - ・筆頭著者2本以上…不可
 - ・筆頭著者1本のみ…可
 - ・筆頭著者1本、第二著者以下1本…可
 - ・筆頭著者1本、第二著者以下2本以上…不可
 - ・筆頭著者0本、第二著者以下2本まで…可
 - ・筆頭著者0本、第二著者以下3本以上…不可
- 8) 『東アジア日本学研究』に掲載された全ての原稿の著作権は東アジア日本学研究学会に帰

- 属する。
- 9) 原著者が『東アジア日本学研究』に掲載された文章の全部または大部にわたって複製利用しようとする場合には、事前に編集委員長に申請しなければならない。編集委員会は特段の不都合がない限りはこれを受理し、複製利用を許可する。
 - 10) 『東アジア日本学研究』に掲載された全ての原稿は、東アジア日本学研究学会のホームページにおいてPDFファイルにて公開する。
 - 11) 投稿者は、東アジア日本学研究学会ホームページに掲載の「執筆要領」の内容を踏まえ、これに準拠した完成原稿と投稿票を提出する。投稿票は別添の所定の様式で提出すること。
 - 12) 「完成原稿と論文要旨」「投稿票」「投稿承諾書」は、E-mail の添付ファイルとして送付する。ファイル形式は原則として MS-Word とする。ファイル名はそれぞれ次のようにすること。

	ファイル名	例
完成原稿と論文要旨	1. 論文・要旨（氏名）	1. 論文・要旨（山田太郎）
投稿票	2. 投稿票（氏名）	2. 投稿票（山田太郎）
投稿承諾書	3. 投稿承諾書（氏名）	3. 投稿承諾書（山田太郎）

- 採用が決定された原稿の提出方法は編集委員会から再度通知する。
- 13) 投稿された原稿は、査読者2名による審査結果をもとに、編集委員会が採否を決定する。
 - 14) 採用された場合、投稿者は英文要旨を提出する。英文要旨は、提出前に必ずネイティブチェックを受けること。
 - 15) 原稿の投稿先および問い合わせ先は次のとおりとする。
- 東アジア日本学研究学会事務局 E-mail: eaja20172@163.com

2018年9月30日 制定
2019年9月20日 改正
2021年4月20日 改正
2023年1月20日 改正

投 稿 票		
投稿日：20 年 月 日		
氏名		
所属・職位	(例) ○○大学・助手、講師、副教授、教授、大学院生	
メールアドレス		
電話番号		
論文タイトル		
種類（該当を残す）	春季号 / 秋季号	論文・研究ノート・書評
分野（該当を残す。 複数回答可）	1. 語学・言語教育 2. 文学 3. 文化 4. 歴史 5. 哲学・思想 6. 経済 7. 政治 8. その他	
連絡事項 事務局または編集委員会に連絡したいことがあれば書いてください。特になければ記載不要です。		

『東アジア日本学研究』執筆要領

1) 利用言語

原稿は日本語を使用し、横書きで作成する。

2) 原稿枚数

原稿の枚数は40字×35行を1枚と換算して、春季号論文は5～7枚(注・図表・参考文献を含む)、秋季号論文は10～15枚(注・図表・参考文献を含む)とする。

3) 見出し番号の表記

本文内の各節章の見出しにつける番号は1.、2.、3. …とし、その下の款項には1.1、1.2、1.3…を用いる。さらにその下の項には1.1.1、1.1.2、1.1.3…を用いる。最初に「はじめに」、最後に「おわりに」を置いてもよい(番号は付けない)。

4) 句読点の表記

句読点は全角の「、」「。」を用いる。

5) 括弧の表記

括弧は原則として全角とする(欧語表記および注記を示す記号に用いる片括弧を除く)。

6) 数字の表記

数字は、熟語など特別な場合を除き半角のアラビア数字を用いる。4桁表記以上となる場合は、コンマ(,)を用いる。また、「兆、億、万」などの漢数字を用いてもよい。

7) 年号の表記

年号は原則として西暦を用いる。必要に応じて、西暦の後に元号などを丸括弧に入れて併用してもよい。

8) 度量衡の単位は、原則として記号(m kg など)を用いる。

9) 図や表には番号とタイトルを記入する。

10) 注は以下のように該当部分の右肩に入れ、論文末にまとめて並べる。

～と考える¹⁾。

11) 参考文献の表記

本文と注記で用いた全ての文献を「参考文献」として本文の最後に一括して表示する。

参考文献の表記は以下のとおりとする。

(日中韓語の書籍) 編著者名(発行年)『書名一副題』出版社。(MS 明朝 9P)

(日中韓語の雑誌論文) 著者名(発行年)「論文名一副題」『雑誌名』巻数(号数)、〇-〇頁。

(日中韓語の書籍中の論文) 著者名(発行年)「論文名一副題」(編者名『書名一副題』出版社)、〇-〇頁。

(日中韓訳書) 編著者名(発行年)『書名一副題』(訳者名、原著は〇年発行)出版社。

(欧文の書籍) 編著者名(発行年) 書名: 副題, 発行地: 出版社。

(欧文の雑誌論文) 著者名(発行年) “論文名: 副題,” 雑誌名, 巻数(号数), pp. 〇-〇。

(欧文の書籍中の論文) 著者名(発行年) “論文名: 副題,” 編者名 ed., 書名: 副題, 発行地: 出版社, pp.

〇-〇。

『東アジア日本学研究』査読要領

【査読スケジュール】

・投稿締切日

(春季号) シンポジウム終了後3週間以内とする。

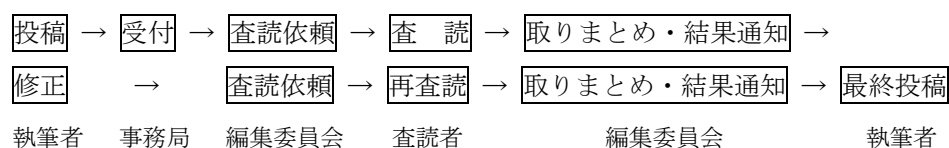
(秋季号) 毎号4月1日(北京時間24:00)とする。

・投稿先: 東アジア日本学研究学会事務局 E-mail: eaja2017@163.com

・査読の流れ

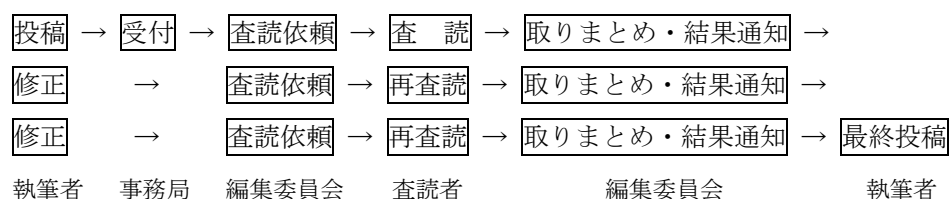
(春季号) 査読は2回までとする。

(2回目の総合評価が「再査読」の場合は結果的に「不採用」となる。)



(秋季号) 査読は3回までとする。

(3回目の総合評価が「再査読」の場合は結果的に「不採用」となる。)



【査読者の構成】

- 1) 論文1編について2名の査読者が査読する。
- 2) 査読者は編集委員会によって原則として会員の中から選任する。会員の中に適任者がいない場合は外部審査員を依頼することができる。審査料は全て無料とする。
- 3) 春季号の場合は、自己の投稿論文でなければ査読可能とする。秋季号の場合は、投稿者は当該号の査読は行わないこととする。

【査読】

- 4) 査読は投稿者・査読者間、査読者間ともに匿名で行うこととする。
- 5) 判定は、「採用」「条件採用」「再投稿」「不採用」の4段階とする。
 - ・「採用」は誤植程度の修正しか必要でない場合とする。
 - ・「条件採用」は査読者から指摘された問題が1週間程度で修正でき、当該号での採用が見込める場合とする。
 - ・「再投稿」は査読者から指摘された問題が2週間程度で修正でき、当該号での採用が見込める場合とする。

・「不採用」は当該号での採用のレベルに達していない場合とする。

- 6) 査読者は所定の「査読票」に査読結果とコメントを記入する。
- 7) 論文の中に投稿者が特定される情報が書かれていることが査読の過程で明らかになった場合でも、原則として査読を継続する。但し、投稿者と査読者が指導教員と指導生の関係、同じ機関に属する等の場合には、査読者の交代を行う。
- 8) 査読にあたり二重投稿等の疑義等が生じた場合、投稿者宛てコメントには記載せず、編集委員会宛てコメントに記載する。

【査読結果のとりまとめ】

- 9) 査読者は「査読票」を編集委員長に送付する。
- 10) 編集委員会では、以下の総合判定ガイドラインに基づいて採否を決める。基本的にこれを順守するが、このガイドラインに従わない方がよいと判断される場合には、編集委員会で審議する。

＜総合判定ガイドライン＞

(◎採用、○条件採用、△再投稿、×不採用)

採用 : ◎◎ (6点)

条件採用 : ◎○ (5点)、○○、◎△ (4点)

再投稿 : ◎×、○△ (3点)、○×、△△ (2点)、△× (1点)

不採用 : ×× (0点)

- 11) 総合判定の確定後、編集委員長は結果を事務局に送付する。
- 12) 事務局は、総合判定結果と査読者のコメントを投稿稿者に送付する。

【再投稿・最終投稿】

- 13) 「採用」の場合は、微修正の確認を編集委員会で行う。
- 14) 「条件採用」と「再投稿」の場合は、初回の2名の査読者で再度査読する。
- 15) 春季号の査読は2回まで、秋季号の査読は3回までとし、査読結果に基づいて編集委員会で最終判定を行う。
- 16) 編集委員会は最終判定結果を事務局に送付し、それを事務局から投稿者に送付する。

【その他】

- 17) 「不採用」に関する投稿者からの反論には原則として応じない。
- 18) 校正は字句等の修正のみ認める。問題が生じた場合には編集委員長が確認する。

編集後記

編集委員長 杉村泰（名古屋大学教授）

本号には25本の投稿がありました。各論文とも2名の査読者による審査が行われ、採用10本、不採用2本、不受理12本、辞退1本という結果になりました。書式やページ制限を遵守して投稿して下さい。

副編集委員長 加藤三保子（豊橋技術科学大学名誉教授）

この文章を書いている日は1月17日。30年前のこの日に、阪神・淡路大震災が発生しました。本学会関係者にも、この巨大地震の被災者はいらっしゃると思います。テレビ番組を見ながら改めて自然災害の恐ろしさを痛感し、自助・共助・公助の意味を考える1日となりました。

編集委員 加藤恵梨（愛知教育大学准教授）

本号も言語研究、日本語教育、文学研究など、さまざまな研究分野から東アジアについてアプローチした優れた研究が多くみられ、大変勉強になりました。今後も会員のみなさまのご投稿をお待ちしております。

編集委員 金光林（新潟産業大学教授）

『東アジア日本学研究』誌にたくさんの論文が投稿されていることはたいへん喜ばしいことですが、不採用、不受理が増えております。投稿者はより良い論文を書く努力が必要であり、私も査読者として論文のチェックにより真剣になりたいと思っております。

編集委員 吉川佳英子（愛知工業大学教授）

力作を数多く読ませていただき、たいへん勉強になりました。独創的な問題意識を持ったものや、新鮮な切り口を示したものなど、研究内容はいつも多彩です。次年度も刺激的な論文が寄せられるのを楽しみにしています。

編集委員 李東軍（蘇州大学教授）

本学会誌の査読委員を担当しております。第13号の査読では、査読した論文のうち何編かが修正の上採用になりました。一方、私も楽しく査読をし、いろいろ刺激をうけました。皆さんの投稿を楽しみに待っています。

編集委員 安勇花（延辺大学副教授）

今回初めて学会誌編集委員会の正式な編集委員として査読させていただきました。今回査読した論文のうち一編はかなり完成度の高い論文でした。査読を通してたいへん勉強になりました。

事務局（学会誌受付担当） 力丸美和（九州大学助教）

本号にもたくさんの投稿ありがとうございます。一方、書式やページ制限の違反により不受理となったものも多く、大変残念に思っています。皆様が執筆された論文が無事掲載されるよう、投稿要領や執筆要領を熟読の上、ご投稿ください。

事務局（学会誌編集補佐担当） 南明世（北海学園大学講師）

多岐にわたる分野の興味深い研究が収められ、思考を深めるきっかけとなる内容でした。多様な視点からの議論が展開され、編集に携わる中で多くの学びを得ました。次回もさらなる研究の成果に出会えることを楽しみにしています。

【本号の査読者】（50音順）

安勇花（延辺大学副教授）、加藤恵梨（愛知教育大学准教授）、加藤三保子（豊橋技術科学大学名誉教授）、金光林（新潟産業大学教授）、金斑実（商丘師範学院副教授）、権裕羅（秋田大学助教）、周堂波（武漢理工大学副教授）、池孝民（商丘師範学院講師）、中川良雄（京都外国語大学特任教授）、任星（厦門大学副教授）、白曉光（西安外国語大学副教授）、南明世（北海学園大学講師）、宮崎聖子（福岡女子大学教授）、吉川佳英子（愛知工業大学教授）、李東軍（蘇州大学教授）、李東哲（山東外事職業大学教授）

東アジア日本学研究 第13号
Japanese Studies in East Asia No.13

2025年3月20日発行

東アジア日本学研究学会

The Society of Japanese Studies in East Asia

学会事務局 E-mail: eaja2017@163.com（一般）

eaja20172@163.com（学会誌専用）

住所：〒143-0012 東京都大田区大森東 1-36-8-218

ホームページ <https://www.east-asia.info/>

ISSN 2434-513X
